岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第334集

上台遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業二戸地区関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

上台遺跡正誤表

標高の表記について	数値中の「, 」はすべて「. 」に訂正	
例	誤	正
	L＝149, 500m	L＝149. 500m

上台（うわだい）遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業二戸地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,187箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因になりました広域農道整備事業を例にあげるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、二戸市下斗米の広域農道整備事業に関連して平成11年度に発掘調査を実施した上台遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は、縄文時代・奈良時代を主体とすることが明らかになり、特に奈良時代の大形住居跡が検出されたことで、該期の貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました二戸市地方振興局二戸農村整備事務所、二戸市教育委員会をはじめとする関係機関・関係各位に心より感謝申し上げます。

平成12年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　船　越　昭　治

例　言

1．本報告書は、岩手県二戸市下斗米寺久保59ほかに所在する上台遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、広域農道整備事業二戸地区に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は二戸地方振興局二戸農村整備事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、二戸農村整備事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号はＩＥ98－1332、遺跡略号はＵＤ－99である。

4．野外調査は丸山浩治・中村直美が担当した。調査期間は平成11年4月12日から７月15日である。

5．室内整理は丸山浩治が担当した。整理期間は平成11年10月１日から平成12年３月31日である。

6．報告書の執筆は、Ｉを委託者である二戸地方振興局二戸農村整備事務所の松田正則氏、IIの１・３及び土器観察表作成を中村直美、その他を丸山浩治が担当した。

7．各種遺物の鑑定は次の方々にお願いした。

炭化材樹種同定及び種実同定：高橋利彦（木工舎「ゆい」代表）

獣骨鑑定：佐々木務（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

8．座標原点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。

座標原点の測量：株式会社ハイマーテック

空中写真撮影：東邦航空株式会社

9．野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を頂いた（五十音順、敬称略）。

井上雅孝　宇部則保　門嶋知二　小島敦子　佐藤嘉宏　関　俊明　関　豊　高橋信雄　佐藤良和　能登　健　八木光則

10．野外調査参加者は以下の通りである（五十音順）。

荒川専次郎　荒木田ミツ　上沢岩太郎　上沢かの　小林コト　小林春福　沢田嘉雄　立花　晋　槻木京子　中島とめ　中村タミ　長畑美幸　仁井田正男　野崎末子　原美津子　米沢清隆　米沢しげ子　屋代英明

11．室内整理参加者は以下の通りである（五十音順）。

滝浦由美　中塚真理子　藤沢洋子

12．発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

13．調査成果は現地説明会資料ほかに発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　例

1．遺構図の用例は下記の通りである。

(1)　遺構実測図の縮尺は基本的に竪穴住居跡・竪穴住居状遺構・土坑・陥し穴状遺構が1/60、カマドが1/30である。但し、遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケール及び縮尺を付した。

(2)　推定線は破線で表記した。

(3)　層位は基本層序にローマ数字、各遺構覆土にアラビア数字を使用した。これらをさらに細分した場合は、数字の後に小文字のアルファベットを付けて表記した。

(4)　土層の観察にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。

(5)　図面中の土器は「Po」、礫は「S」の略号で表記した。

(6)　挿図中で使用した網掛け及びスクリーントーンの用例は下図の通りである。それ以外のものについてはその都度挿図中に記した。

2．遺物実測図の用例は下記の通りである。

(1)　縮尺は土器・台石・砥石が1/3、その他が1/2である。同一図版中に異縮尺の遺物が混在する箇所もあるため、その都度スケール及び縮尺を付した。

(2)　土器の実測にあたり、口縁部及び底部が1/4以上残存する場合は努めて図上復元を試み、残存率は口縁の線の長さで表した。詳細は下図の通りである。

(3)　土器観察表「法量」中の（ ）は推定値を、—は残存値を示している。

(4)　遺物図に使用したスクリーントーンの用例は下図の通りである。

(5)　須恵器は断面図を塗りつぶした。

3．遺物写真図版の縮尺は、ミニチュア土器・剝片石器・石玉・鉄製品・土製品・古銭が約1/2、獣骨が約1/1、その他が約1/3になるよう編集している。

4．竪穴住居跡の主軸方位は、カマドが設置された壁辺に直交する方向とした。

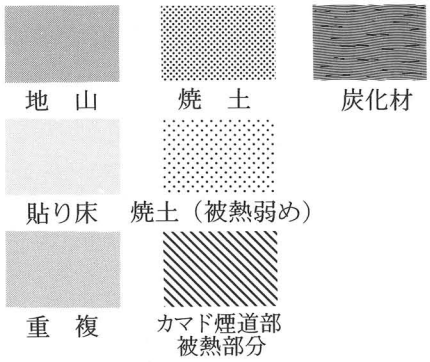
5．竪穴住居跡の床面積計測にはプラニメーターを使用し、壁の下端を3回計測して算出された平均値を記載した。

6．竪穴住居跡内の記述の際、Q1～Q4という呼称をしている箇所があるが、それぞれの示す範囲は下図の通りである。

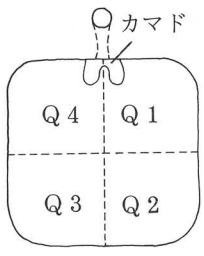
7．国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

8．引用・参考文献は各章末に記した。

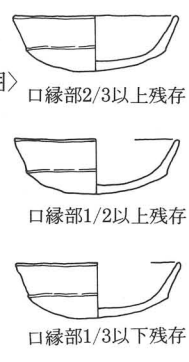
〈網掛け、スクリーントーンの用例〉

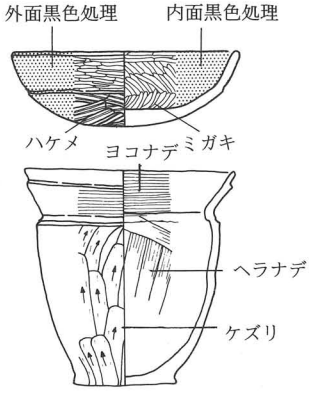


〈竪穴住居跡Q1～Q4範囲〉



〈遺物実測図用例〉





報告書抄録

ふりがな	うわだいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上台遺跡発掘調査報告書
副書名	広域農道整備事業二戸地区関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第334集
編著者名	丸山浩治・中村直美
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185　℡（019）638－9001
発行年月日	西暦2000年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′ 〃	東経 °′ 〃	調査期間	調査面積	調査原因
上台遺跡（うわだいいせき）	岩手県二戸市（いわてけんにのへし）下斗米寺久保（しもとまいてらくぼ）59ほか	03213	IF－98－1332	40度 17分 00秒	141度 14分 55秒	19990412～ 19990715	4,034㎡	広域農道整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上台遺跡	狩り場	縄文時代	陥し穴状遺構　1基	縄文土器（前・中期） 石器	他の遺構は確認されず遺物は流れ込みの可能性大
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡　7棟 竪穴住居状遺構　3棟 方形溝状遺構　1棟 土坑　7基 To-a溝状堆積範囲　1箇所	土師器 土製紡錘車 鉄製品（刀子、小札等） 石器 須恵器 獣骨 植物種子	大形住居跡内の様々な施設 カマドの残存状態良好 小札の出土 To-aの推積顕著

目　　次

序
例　言
凡　例
報告書抄録
目　次

＜本　文＞

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
1．立地と地形……1
2．基本層序……4
3．周辺の遺跡……8
Ⅲ　調査と整理の方法
1．野外調査……11
(1)グリッド設定……11
(2)粗掘・遺構検出……11
(3)遺構の調査方法・遺物の取り上げ方……11
2．整理方法……12
Ⅳ　検出遺構と出土遺物
1．古代……15
(1)竪穴住居跡……15
(2)竪穴住居状遺構……49
(3)方形溝状遺構……54
(4)土坑……57
(5)To－a溝状堆積範囲……62
2．縄文時代……64
(1)陥し穴状遺構……64
3．遺構外出土遺物……65
(1)古代……65
(2)縄文時代……65
(3)その他……65
Ⅴ　調査成果・まとめ
1．竪穴住居跡について……67
2．まとめ……70
Ⅵ　自然科学的分析
1．上台遺跡出土炭化材の樹種……73
2．上台遺跡出土種実の同定……75

職員一覧……111

＜挿　図＞

第1図　岩手県全図……1
第2図　遺跡位置図……2
第3図　周辺の地形……3
第4図　第1トレンチ断面図……5
第5図　第2・第3トレンチ断面図……7
第6図　周辺古代遺跡位置図……9
第7図　遺構配置図……13・14
第8図　第1号竪穴住居跡(1)……16
第9図　第1号竪穴住居跡(2)……17
第10図　第2号竪穴住居跡(1)……19・20
第11図　第2号竪穴住居跡(2)……21
第12図　第2号竪穴住居跡(3)……22
第13図　第2号竪穴住居跡(4)……23
第14図　第2号竪穴住居跡(5)……24
第15図　第2号竪穴住居跡(6)……26
第16図　第2号竪穴住居跡(7)……27
第17図　第2号竪穴住居跡(8)……28
第18図　第2号竪穴住居跡(9)……29
第19図　第2号竪穴住居跡(10)……30
第20図　第3号竪穴住居跡(1)……32
第21図　第3号竪穴住居跡(2)……33
第22図　第4号竪穴住居跡(1)……34
第23図　第4号竪穴住居跡(2)……35
第24図　第5号竪穴住居跡(1)……36

第25図　第５号竪穴住居跡(2)……37
第26図　第５号竪穴住居跡(3)……38
第27図　第６号竪穴住居跡(1)……40
第28図　第６号竪穴住居跡(2)……41
第29図　第６号竪穴住居跡(3)……42
第30図　第６号竪穴住居跡(4)……43
第31図　第７号竪穴住居跡(1)……45
第32図　第７号竪穴住居跡(2)……46
第33図　第７号竪穴住居跡(3)……47
第34図　第７号竪穴住居跡(4)……48
第35図　第１号竪穴住居状遺構・
　　第２号竪穴住居状遺構(1)……50
第36図　第２号竪穴住居状遺構(2)……51
第37図　第３号竪穴住居状遺構……53
第38図　第１号方形溝状遺構(1)……54
第39図　第１号方形溝状遺構(2)……55・56
第40図　土坑(1)……59
第41図　土坑(2)……60
第42図　土坑(3)……61
第43図　To－a溝状堆積範囲……63
第44図　第１号陥し穴状遺構……64
第45図　遺構外出土遺物(1)……65
第46図　遺構外出土遺物(2)……66

＜表＞

第１表　周辺古代遺跡一覧表……８
第２表　第２号竪穴住居跡周辺ピット観察表・
　　遺物観察表……25

＜写真図版＞

写真図版１　遺跡全景……81
写真図版２　調査前風景……82
写真図版３　基本層序(1)……83
写真図版４　基本層序(2)……84
写真図版５　第１号竪穴住居跡……85
写真図版６　第２号竪穴住居跡(1)……86
写真図版７　第２号竪穴住居跡(2)……87
写真図版８　第２号竪穴住居跡(3)……88
写真図版９　第３号竪穴住居跡……89
写真図版10　第４号竪穴住居跡……90
写真図版11　第５号竪穴住居跡……91
写真図版12　第６号竪穴住居跡(1)……92
写真図版13　第６号竪穴住居跡(2)……93
写真図版14　第７号竪穴住居跡(1)……94
写真図版15　第７号竪穴住居跡(2)・
　　第１号竪穴住居状遺構……95
写真図版16　第２号・第３号竪穴住居状遺構……96
写真図版17　第１号方形溝状遺構……97
写真図版18　土坑(1)……98
写真図版19　土坑(2)……99
写真図版20　To－a溝状堆積範囲・
　　第１号陥し穴状遺構……100
写真図版21　出土遺物(1)……101
写真図版22　出土遺物(2)……102
写真図版23　出土遺物(3)……103
写真図版24　出土遺物(4)……104
写真図版25　出土遺物(5)……105
写真図版26　出土遺物(6)……106
写真図版27　出土遺物(7)……107
写真図版28　出土遺物(8)……108
写真図版29　出土遺物(9)……109
写真図版30　出土遺物(10)……110

Ⅰ　調査に至る経過

上台遺跡は、広域農道整備事業二戸地区の二戸市下斗米工区の農道工事施工に伴って、その工事区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

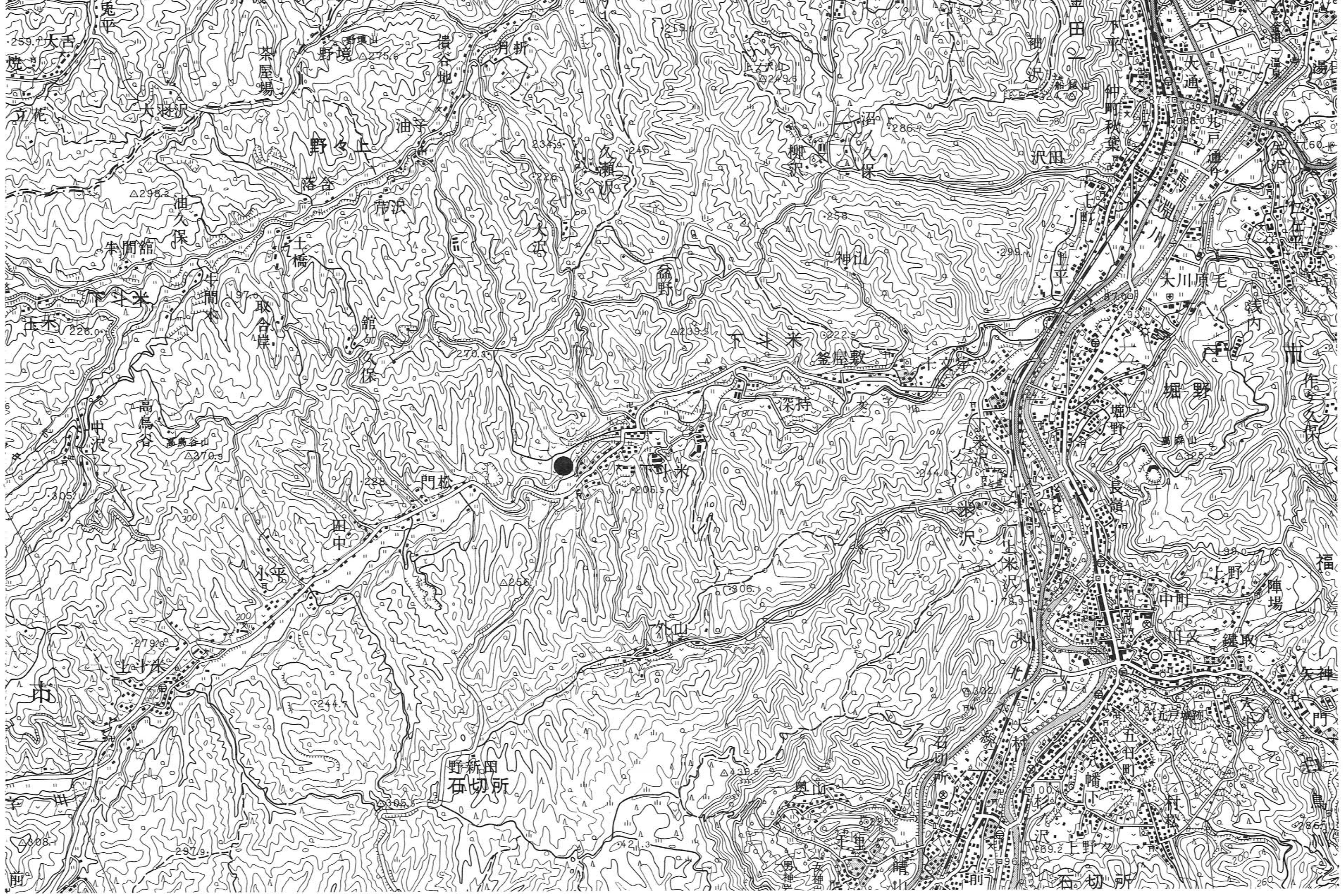
本地区は、岩手県北西部に位置し、その気候的要素から岩手県における主要な畑作地帯となっている。基幹作物は、たばこ、りんご、肥育牛、及びブロイラーが盛んであり南部の一戸地域は高原野菜、たばこ、酪農が主体となっており、浄法寺地域ではたばこが主体であり、安代地域は肉牛繁殖が盛んである。これらを連絡する基幹農道を設置することとともに農業近代化施設の設置と相俟って農畜産物の流通の合理化を図るものである。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

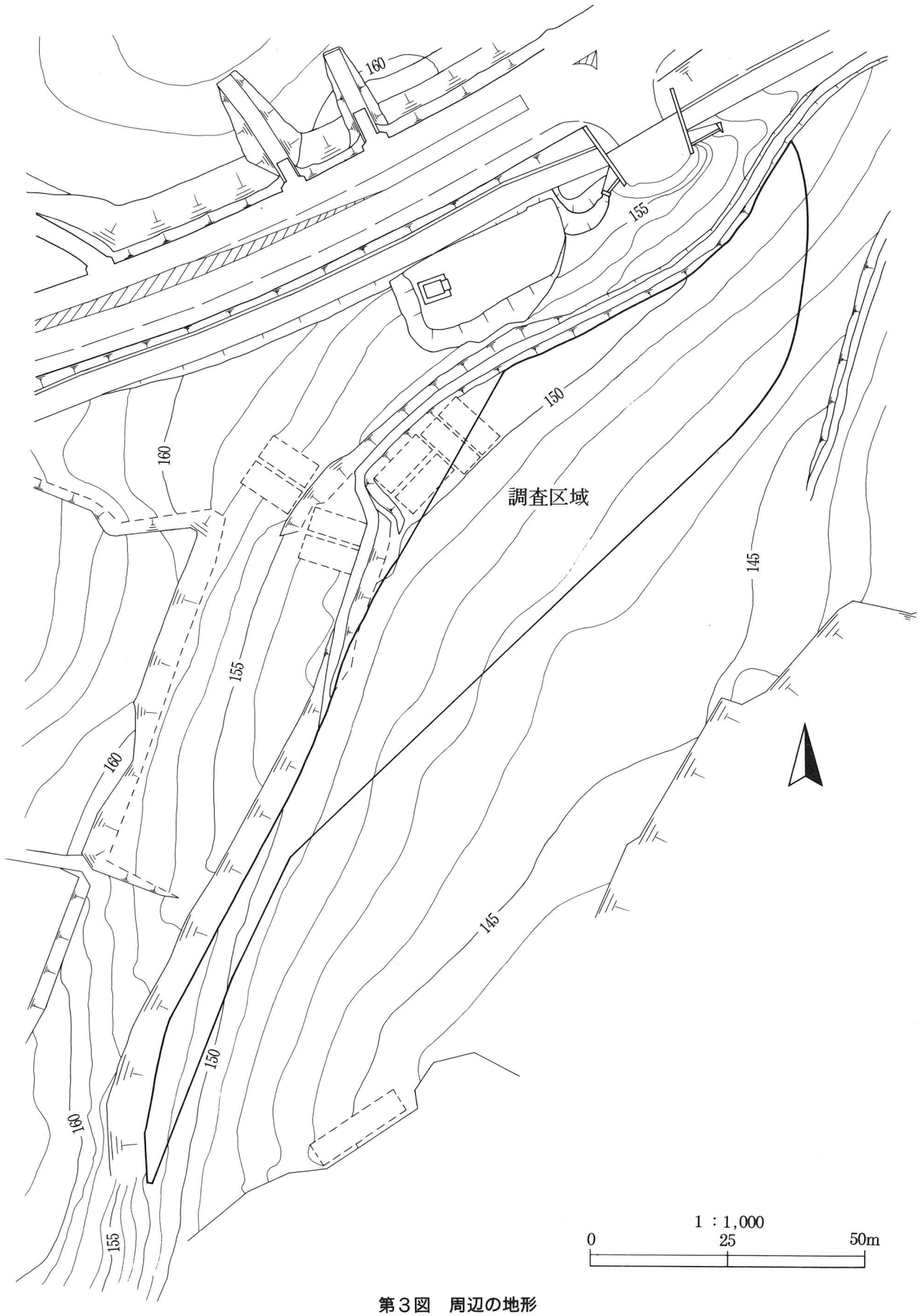
1．立地と地形（第1～3図・写真図版1）

遺跡の所在する二戸市は岩手県の北端部に位置し、北側は青森県名川町、同三戸町、西側は青森県田子町、岩手県浄法寺町、南側は一戸町、東側は九戸村、軽米町と接しており、東を北上山地、西を奥羽山脈に挟ま

第1図　岩手県全図



第２図　遺跡位置図　　　　1：50,000　　浄法寺・一戸



第３図　周辺の地形

れた馬淵川水系中流域に立地する内陸の都市で、面積は238.17㎢、人口約３万人の岩手県で最も新しい市政都市である（1972年施行）。上台遺跡は二戸市の中心から北西方向にあたる下斗米寺久保59ほかに所在し、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の西約４㎞の地点、北緯40°17′00″東経141°14′55″付近に位置する。

二戸市域を流れる馬淵川は、岩手郡葛巻町東縁の北上山地北半部に源を発し、支流である安比川、沢内川、十文字川、海上川を統合しながら北流して青森県八戸湾にそそぐ。馬淵川の西方は奥羽山脈の裾野にあたる緩やかな丘陵地形をなしており、下斗米地区はこの西岸地域にあたる。東流する十文字川左岸の丘陵は、両側を谷に挟まれた小規模な舌状地形を呈しており、遺跡はこの舌状に張り出した丘陵の南東向き緩斜面縁辺に立地している。現在、十文字川の沖積地部分は水田として利用されている。調査区のある丘陵緩斜面は、標高145～150mで沖積地から20m程度の比高差があり、現況は畑地である。

なお、同一の丘陵斜面上には、主要地方道二戸―田子線緊急地方道整備事業に伴って平成６年に発掘調査された寺久保遺跡があり、本遺跡のほぼ北西方向（斜面上方）に隣接する。上台遺跡のある地域は、主要地方道二戸―田子線の沿線上にあたるが、国道４号線のバイパス建設に伴って一連の発掘作業が行われた地域からはやや西側に外れており、これまで発掘調査はほとんど行われていない。

遺跡の載る火山性丘陵地帯は、八幡平の東側に位置する安比岳南麓付近を源とし、馬淵川最大の支流である安比川によって南北に二分されている。遺跡のある十文字川の右岸は、稲庭岳（標高1078m）を中心とした火山性の山麓丘陵（稲庭岳山麓丘陵）で、東に向かって次第に高度を下げ、東端縁は馬淵川西端に達している。また南側は、八幡平から東～北東に茶臼岳、大黒森山、前森山、七時雨山、西岳などの火山が並び、北側と同様にその東～北東端が馬淵川西岸に達している。

以上の火山性丘陵は、安山岩質岩類を主な基盤岩としているが、丘陵の北東縁の馬淵川西岸付近には新第三紀の末の松山層や門ノ沢層と呼ばれる凝灰岩質角礫岩や砂礫等が分布し、その上を第四紀の火山噴出物等が覆っている。

二戸市の地形は以上の馬淵川以西の火山性丘陵地、馬淵川流域、馬淵川以東の非火山性山地（北上山地）の三地域に大別される。この地域の北上山地には古い隆起準平原が広く分布しており、最高点は折爪岳（標高852m）である。北上山地は内陸部と沿岸部（三陸海岸地帯）、との気象境界の位置も占めている。また、馬淵川流域には数段の洪新世・完新世の段丘が形成されている。

２．基本層序（第４～５図・写真図版３～４）

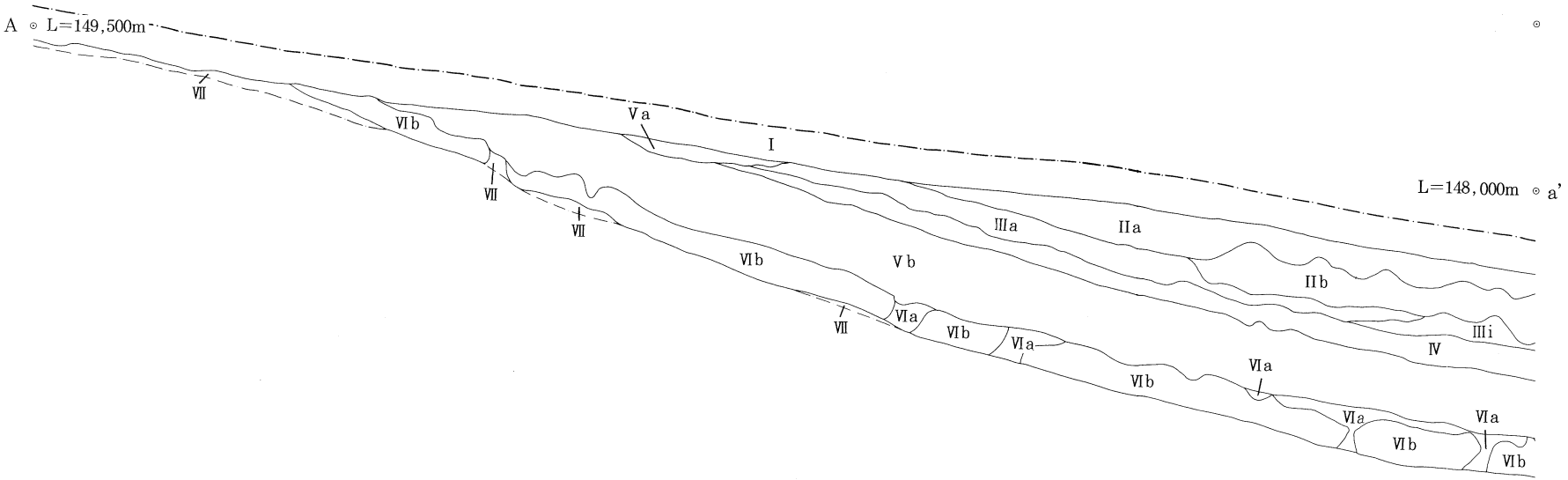
上台遺跡の調査区は丘陵緩斜面上に位置し、等高線とほぼ並行方向に約230m、斜面方向に最大約37m程の範囲で設定されている。この調査区の土層を正確に把握するため、斜面方向に沿ったトレンチを３本設定し、そのセクションから基本層序を決定した。

緩斜面上にあたる本調査区には、斜面上方からの土砂等の流入が断続的に続いていたと考えられる。このため調査区内でも斜面上方の堆積は薄く、逆に下方は各層とも厚く堆積し、混入物を若干含んでいる。また、この地方一帯には十和田湖周辺を起源とする火山噴出物が幾層も存在するが、これらは粘性に乏しく移動しやすい性質であるため、かなり厚い堆積が部分的に確認された。

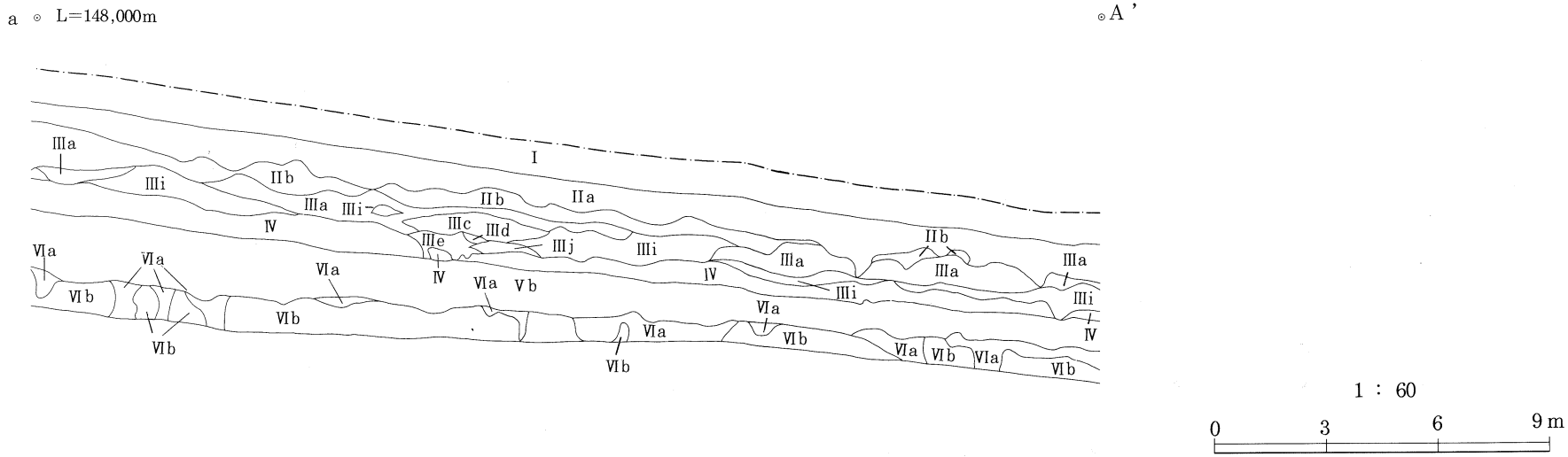
第Ⅰ層　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　現在の耕作土。

第Ⅱａ層　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性弱　しまり中　十和田ｂ降下軽石（以下To－ｂと表記）が少量混入する。

第１トレンチ断面　①



第１トレンチ断面　②



1 : 60

0　3　6　9 m

第４図　第１トレンチ断面図(1)

第II b層　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　黒色土との混土。To－b及び十和田中掫降下軽石（いわゆる中掫浮石・アワズナ　以下To－Cuと表記）が少量混入する。

第II c層　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　第II b層と第III d層の混土。第3トレンチ付近に堆積。

第III a層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　黄褐色土との混土。黒色土ブロック及び大粒のTo－Cu（φ2～5㎜）が中量混入する。

第III b層　10YR5/6　黄褐色　砂質シルト　粘性中 しまり中　To－Cuが中量混入する。

第III c層　10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　粘性強 しまり強　水成堆積層。第2トレンチ付近に堆積。

第III d層　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱 しまり極強　砂とシルトの互層。水成堆積。第2トレンチ付近に堆積。

第III e層　10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり極強　水成堆積層。To－Cuが少量混入する。第2トレンチ付近に堆積。

第III f層　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり強　第III a層に似るが、より硬質で、第III d層がブロック状に混入する。

第III g層　10YR5/6　黄褐色　砂質シルト　粘性微弱 しまり強　砂質土層。To－Cuが少量混入する。

第III h層　10YR5/6　黄褐色　砂　粘性無 しまり弱　φ1～3㎜の砂層。To－Cuが多量に混入する。水成堆積。

第III i層　10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱 しまり中　水成堆積層。水の影響を受け脆弱化したTo－Cuが多量に混入する。

第III j層　7.5YR5/3　にぶい褐色　砂質　粘性無 しまり中　φ1～2㎜の砂層。To－Cuが多量に混入する。水性堆積。

第 IV 層　2.5Y7/8　黄色　軽石　粘性無 しまり微弱　To－Cu層。

第V a層　10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり強　To－Cuがブロック状に少量混入する。

第V b層　7.5YR1.7/1 黒色　シルト　粘性中 しまり強　十和田南部降下軽石（いわゆる南部浮石・ゴロタ　以下To－Nbと表記）が中量混入する。

第VI a層　10YR3/4　暗褐色　軽石　粘性弱 しまり強　To－Nb層に暗褐色土が混入する。

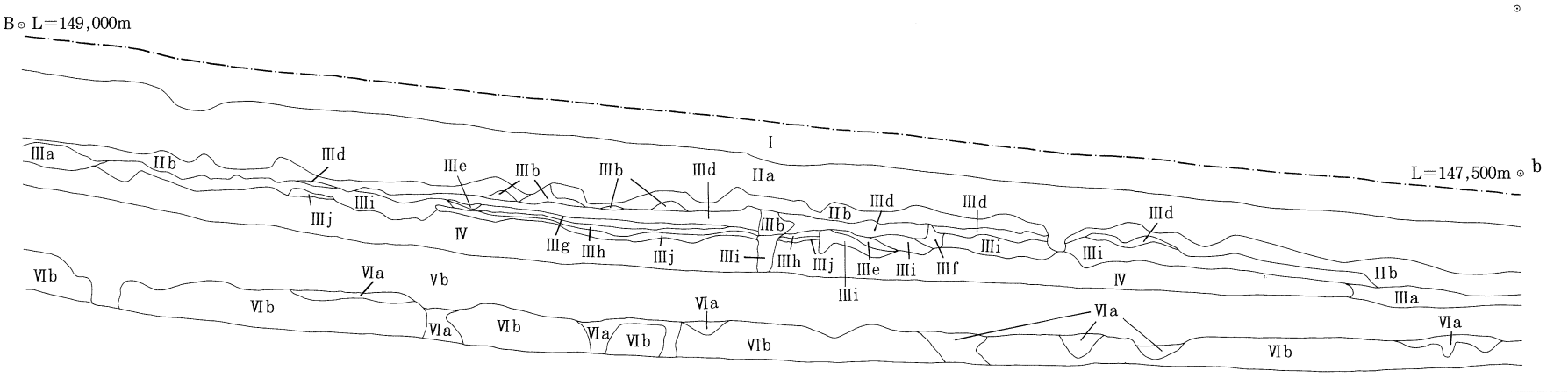
第VI b層　7.5YR5.5/8 明褐～橙色　軽石　粘性無 しまり微弱　To－Nb層。

第 VII 層　10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり強　十和田八戸テフラ（To－H）の土壌化層。

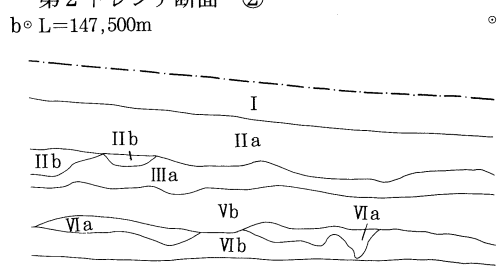
以上のように堆積している。第III層には水の影響をかなり強く受けている層が目立ち、これらは第2トレンチ付近で観察された。第IV層堆積後、第2トレンチ付近にある程度の流水等があったことが推測される。

また、第II層中には十和田a降下火山灰（以下To－aと表記）が堆積する箇所がある。かなり流動的であるため、その堆積は地形による影響を非常に大きく受けている。凹凸のない部分からは全く検出されず、深く落ち込む場所には厚く堆積している。

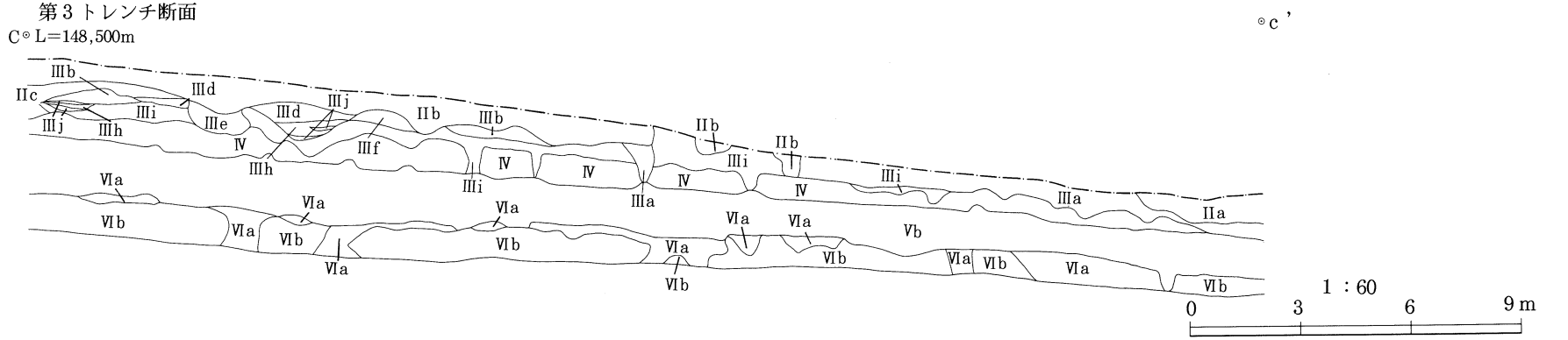
第２トレンチ断面　①



第２トレンチ断面　②



第３トレンチ断面



第５図　第２・第３トレンチ断面図(2)

3．周辺の遺跡（第6図・第1表）

現在、二戸市では161箇所の遺跡が確認されている。時代別では縄文114、弥生4、古代61、中世32である（複合遺跡の場合は別個として捉えた）。以下、本遺跡の主体をなす古代に絞り、二戸市内の該期遺跡について、これまで調査された16遺跡及び本遺跡を表にまとめた。

No.	遺跡名	所在地	遺跡の内容（縄文時代を除く）
1	府金橋遺跡	二戸市金田一字駒焼場	竪穴住居跡10（奈良2・平安7・不明1） 土坑11・円形周溝1・墓坑1（以上、時期不明）
2	駒焼場遺跡 （二戸市教委）	二戸市金田一字駒焼場 34－3ほか	竪穴住居跡4（平安3・中世1） 土坑1（時期不明）
2'	駒焼場遺跡 （岩手県埋文）	二戸市金田一字駒焼場 12－2ほか	竪穴住居跡45(奈良7・平安33・不明5)大溝跡4・溝跡4・方形周溝跡3(以上、平安) 土坑61(奈良3、平安54、平安以降4)柱穴群1(平安後期～近代)
3	馬場遺跡	二戸市金田一字馬場 50－1ほか	竪穴住居跡15（奈良11・平安3・中世1） 土坑8（古代4・中世1・不明3）
4	荒田Ⅲ遺跡	二戸市金田一字荒田	竪穴住居跡1・土坑2（以上、平安時代）
5	上田面遺跡	二戸市金田一字上平	竪穴住居跡33（奈良31・平安2）竪穴状遺構7・古代以降の掘立 柱建物跡2・円形に巡る溝1条
6	堀野遺跡	二戸市堀野字馬場	竪穴住居跡11（平安時代）
7	長瀬D遺跡	二戸市米沢字長瀬	竪穴住居跡7（奈良6、中世1）堀跡（中世）
8	長瀬C遺跡	二戸市米沢字長瀬	竪穴住居跡24（古代）
9	長瀬B遺跡	二戸市米沢字長瀬	竪穴住居跡32（奈良末25、平安前葉7） 住居状遺構4・堀立柱建物跡2・土坑8・周溝2（以上、古代）
10	米沢遺跡	二戸市米沢字荒谷	竪穴住居跡2（平安）
11	米沢遺跡	二戸市米沢字家の上	竪穴住居跡11・住居状遺構1・溝状遺構11条（以上、古代） 畝間状遺構2箇所（古代1・中世1）
12	長瀬A遺跡	二戸市米沢字長瀬	竪穴住居跡11（古代）土坑1
13	荒谷A遺跡	二戸市米沢字荒谷	竪穴住居跡4（奈良：8c後半）
14	中曽根Ⅱ遺跡	二戸市石切所字中曽根	円形周溝28（古墳？）竪穴住居跡78・土坑35（以上、古代）
15	火行塚遺跡	二戸市石切所字火行塚	竪穴住居跡9・周溝6（以上、平安）土坑10（奈良末～平安）
16	寺久保遺跡	二戸市下斗米寺久保 55－1ほか	竪穴住居跡4・住居状遺構4・掘立柱建物跡5・土坑5（以上 奈良：8c中葉）
17	上台遺跡	二戸市下斗米寺久保 59－1ほか	竪穴住居跡7・竪穴住居状遺構3・土坑7・方形溝状遺構1・ To－a溝状堆積範囲1（以上、奈良～平安：8c代中心）

第1表　周辺古代遺跡一覧表

第６図　周辺古代遺跡位置図

引用・参考文献

福岡町教育委員会　1965　『堀野遺跡』

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1981　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第22集

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1981　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第23集

二戸市教育委員会　1981　『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1982　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第35集

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1982　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第36集

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1983　『荒谷Ａ遺跡』文化財調査報告書第57集

二戸市教育委員会　1983　『駒焼場遺跡緊急発掘調査報告書』

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1984　『府金橋遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第72集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988　『米沢遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第132集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1989　『駒焼場遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第133集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1990　『馬場遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第137集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994　『荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡第１次発掘調査報告書』文化財調査報告書 第217集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996　『寺久保遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第239集

Ⅲ　調査と整理の方法

1．野外調査（第4図）

(1)　グリッド設定

グリッドの設定は、国土座標第Ｘ系に合わせ基準点１、基準点２を設定し、これを基に５ｍ×５ｍのメッシュを組む形で行った。グリッドの名称は西から東に向かってＡ～Ｚのアルファベット、北から南に向かって１～38のアラビア数字をつけ、その組み合わせによりＡ－１グリッド、Ｂ－２グリッドのように呼称した。なお、基準点の成果値は以下の通りである。

基準点１　Ｘ＝31,650.000　Ｙ＝35,280.000　Ｈ＝150.613m

基準点２　Ｘ＝31,650.000　Ｙ＝35,320.000　Ｈ＝146.619m

(2)　粗掘・遺構検出

最初に、地形の状態、及び事前に岩手県教育委員会文化課が行った試掘の結果に応じて４×２ｍのトレンチを20箇所程設定し、人力による粗掘を表土下30～40㎝まで行った。これは試掘時の遺構検出面が表土下30～40㎝と報告されていたことによる。この際、試掘によって遺構の存在が確認された地点に関してはその遺構の検出を、それ以外の地点に関しては遺構の有無の確認と地層の状況把握を目的とした。調査区南西側のＡ～Ｇ－26グリッド以南には３箇所のトレンチを設定したが、初回目標層位に至っても無検出であったためさらに第Ⅶ層まで層位毎に掘り下げ、順次遺構検出を行った。その結果、どの層位においても遺構・遺物が全く検出されなかったため調査終了とし、排土置場とした。この後、Ａ～Ｇ－26グリッド以南以外の区域は重機によって試掘による遺構検出面である第Ⅱ層上面（耕作土直下）まで掘り下げ、これによって遺構が検出された付近に関しては精査を行い,それ以外の区域に関してはさらに第Ⅲ層上面までの掘り下げ及び遺構検出を順次行っていった。Ⅲ層上面以下については、重機を使用せず、幅２ｍのトレンチを地形の傾斜を考慮して設定し、人力によって層位毎に掘り下げ、遺構検出をⅦ層上面まで行うという方法をとったが、Ⅲ層上面以下からは遺構・遺物とも検出されなかった。

(3)　遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

竪穴住居跡及び竪穴住居状遺構の調査は四分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を順次行った。

フィルムは35㎜モノクローム・カラーリバーサル、及び６×9㎝モノクロームの３種を使用し、調査終了時点でセスナ機により空中写真を撮影した。

実測図の縮尺は20分の１を基本としたが、種類や規模の大小により10分の１、40分の１、50分の1を用いた。なお、調査の進行上土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみにとどめた遺構もある。

遺物は、遺構内出土のものは遺構名と出土層位（上位・中位・下位・床面直上・床面）及び出土位置を、遺構外出土のものはグリッド毎に層位を記して取り上げた。

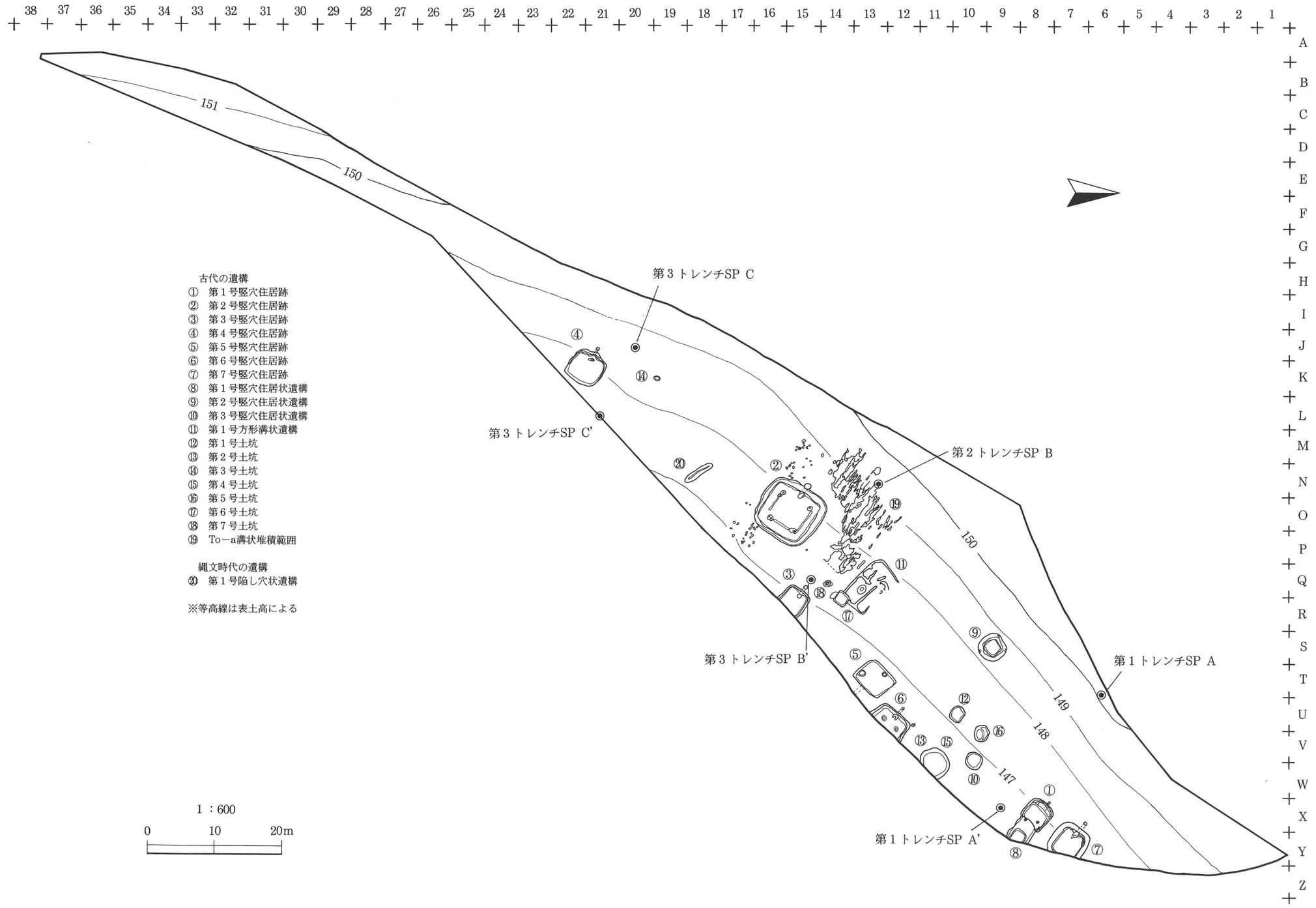
2．整理方法

(1) 遺物整理

現場で水洗しきれなかった遺物の水洗から開始し、注記、仕分け、接合、掲載遺物の選別、写真撮影、実測、法量等の計測、トレースといった手順で行った。単年度発刊ということもあり整理期間が限定され、掲載遺物点数はかなり縮小している。基本的に住居跡床面から出土した遺物については出来る限り掲載したが、多量の遺物が出土した遺構については、覆土中出土で同形態の遺物が多い場合、特に土師器甕類については状態の良いものを特に数点抽出して掲載している。

(2) 遺構図面

現場で記録した遺構平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認、図面の合成、トレースという手順で進めた。期間の制約があるため、合成の必要であった図面以外は第2原図の作成を行っていない。


古代の遺構
① 第１号竪穴住居跡
② 第２号竪穴住居跡
③ 第３号竪穴住居跡
④ 第４号竪穴住居跡
⑤ 第５号竪穴住居跡
⑥ 第６号竪穴住居跡
⑦ 第７号竪穴住居跡
⑧ 第１号竪穴住居状遺構
⑨ 第２号竪穴住居状遺構
⑩ 第３号竪穴住居状遺構
⑪ 第１号方形溝状遺構
⑫ 第１号土坑
⑬ 第２号土坑
⑭ 第３号土坑
⑮ 第４号土坑
⑯ 第５号土坑
⑰ 第６号土坑
⑱ 第７号土坑
⑲ To－a溝状堆積範囲
縄文時代の遺構
⑳ 第１号陥し穴状遺構
※等高線は表土高による
1：600
0 10 20m
第３トレンチSP C
第３トレンチSP C’
第２トレンチSP B
第３トレンチSP B’
第１トレンチSP A
第１トレンチSP A’
151
150
149
148
147
38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

第７図　遺構配置図

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1．古代

発見された古代の遺構は大半が奈良時代のもので、竪穴住居跡、竪穴住居状遺構（カマドを持たない竪穴）、方形溝状遺構、土坑がある。これらのほとんどには、覆土中にTo－aが厚く堆積しており、遺構検出の大きな目安となった。

(1)　竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第8～9図、写真図版5・21）

［位置・検出状況］　X－7、W～Y－8グリッドに位置する。検出面は第II層上位で、To－aの楕円形状の広がりによって確認した。同面における本遺構付近の地形は、南東方向に約7°の下り傾斜を持つ。なお、本遺構の南東側約2mには第1号竪穴住居状遺構が、また、北東側約2mには第7号竪穴住居跡がある。

［規模・平面形・方位］　規模は、北西壁397cm、北東壁約400cm、南西壁約350cmを測る。南東側には近年の重機による攪乱が入っており、壁が破壊されているためその長さは不明である。平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。床面積は推定で7.5m²強、主軸方向はN－50°－Wである。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は北西壁46cm、北東壁53cm、南西壁67cmである。各壁面とも下部は床面に対してほぼ垂直な角度で立ち上がるが、上半部は外傾している。斜面上部にあたる北西側ではこれが特に顕著で、壁面中央部から更に緩やかな立ち上がりを見せる。流土・流水等によって若干侵食されているものと思われる。

掘り込みは第Ⅳ層～第Ⅴ層上面まで行われており、その上部にTo－Cuをブロック状に含む暗褐色土によってほぼ全面に貼り床が構築されている。中央部に比べ壁側の掘り込みが深いため、貼り床も壁側の方が厚く、最厚部で約30cmを測る。床面はほぼ水平である。

［柱穴・ピット］　4個検出した。全て南東側に存在しており、P3は壁面上位から、P4は前述の撹乱下からの検出である。位置に規則性がなく、その様相が判然としない。P3は東方向へ伸びており、斜めに下がる斜穴である。

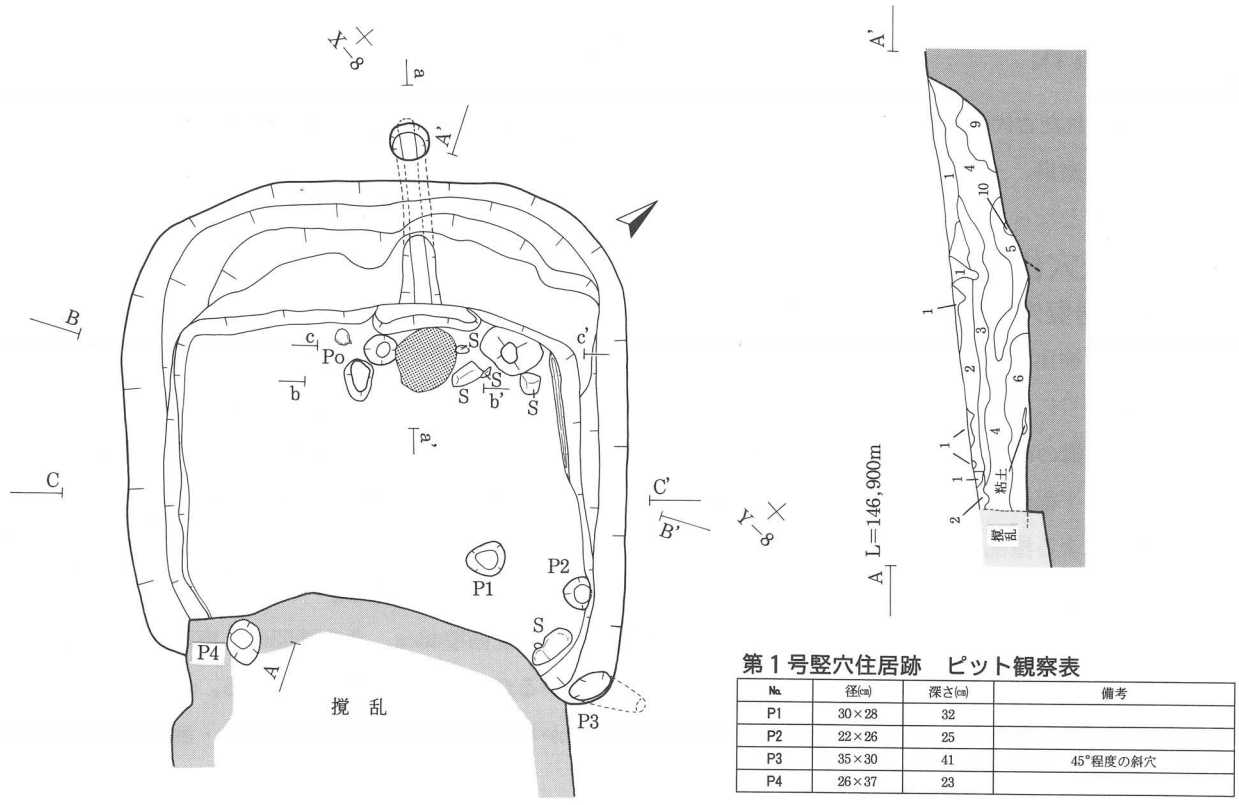
また、北東壁左側からは壁溝状の窪みが検出されている。長さ約100cm、幅約7cmを測る。

［覆土］　9層に分層された。大別して、下層からTo－Cuを含む暗褐～黒褐色土、ラミナの顕著なTo－a、褐色土とTo－aの混合土の順に堆積している。To－aはレンズ状を呈する。全て自然堆積と思われる。

［カマド］　北西壁の中央部に構築されている。全体的に潰れたような様相を呈し、天井部がほとんど残存していない。左袖部付近の貼り床内には、板状に加工された軟質の凝灰岩が立位の状態で存在しており、その外側及び上部には灰白色を主体とした粘土が見られる。このため本体はこの凝灰岩を芯材に用い、灰白色粘土等を貼り付けて構築されたものと思われる。火床面は床面より若干盛り上がっており、厚さは5cm程である。煙道部は刳り貫き式で、煙出し孔直下に向かって緩やかに掘り込まれている。北西壁からの煙道長は145cmである。煙出し孔は30×25cmの不整円形で、同孔検出面からの深さは約50cmを測る。

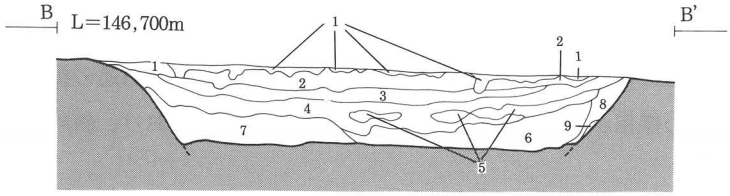
カマド芯材と思われる凝灰岩の周囲に掘り方の痕跡は確認されず、貼り床構築土と接している。そのためこの凝灰岩は貼り床構築と同時に設置されたものと考えられる。また、これらカマド構築材は床面北隅及び東隅などからも出土しているため、本カマドは破壊された可能性が高い。

［出土遺物］　カマド左袖部から土師器坏片が１点、床面Ｑ３壁際から刀子が１点出土している。床面からはこの２点のみ。覆土中からは土師器甕片・坏片が出土しているが、覆土堆積状況から自然流入と思われる。

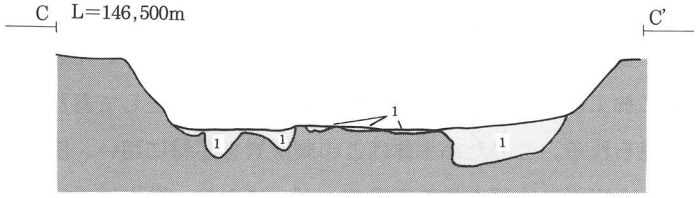


第１号竪穴住居跡　ピット観察表

No.	径(cm)	深さ(cm)	備考
P1	30×28	32	
P2	22×26	25	
P3	35×30	41	45°程度の斜穴
P4	26×37	23	



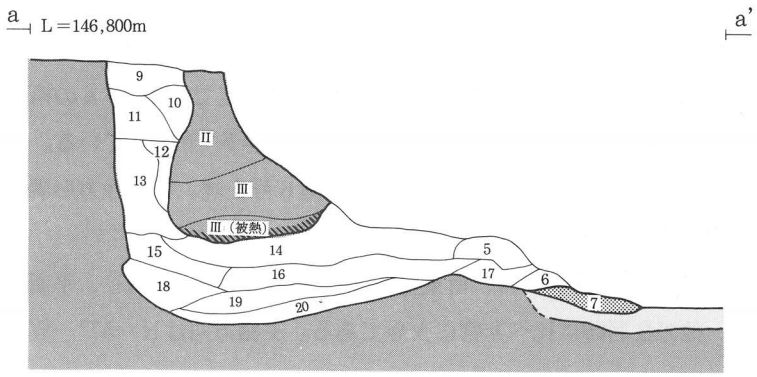
第１号竪穴住居跡
1. 10YR4/1　褐灰色　砂質シルト　粘性微弱 しまり弱　To−a中量混入。
2. 10YR8/2　灰白色　火山灰　粘性弱 しまり強　To−aの水成堆積層。ラミナ顕著
3. 10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu微量混入。
4. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中　To−Cu微量混入。
5. 10YR4/4　褐色　シルト　粘性中 しまり中　黄褐色土との混土。To−a微量混入。
6. 10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中 しまり中　にぶい黄褐色土ブロック少量、To−Cu微量混入。
7. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu微量混入。
8. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu微量混入。
9. 10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu微量混入。
10. 10YR6/6　明黄褐色　粘土　粘性強 しまり中　カマド構築土

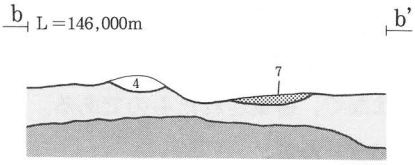


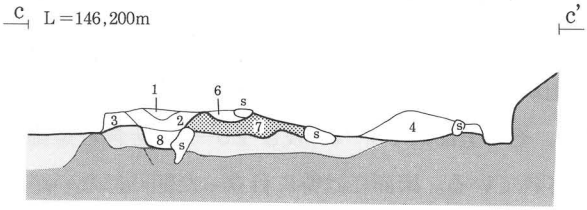
第１号竪穴住居跡貼り床
1. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cuがブロック状に中量混入。

1：60
0　1　2 m

第８図　第１号竪穴住居跡(1)

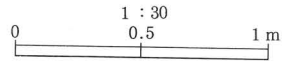


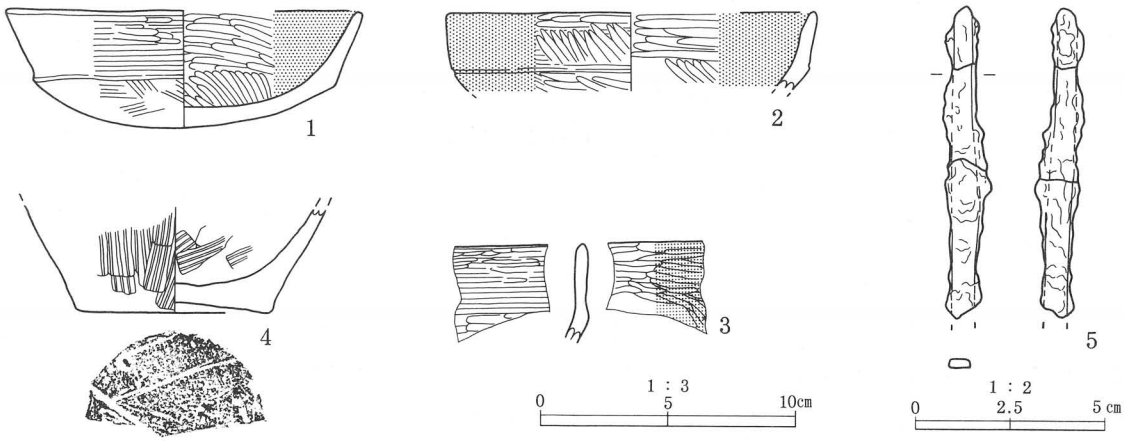




第１号竪穴住居跡カマド

1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
2．10YR8/1　灰白色　粘土　粘性強 しまり強
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中
　灰白色粘土との混土。
4．10YR6/8　明黄褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり中
　灰白色粘土、黒褐色土との混土。
5．10YR5/6　黄色　粘土　粘性強 しまり強
　黒褐色土少量混入。
6．5YR5/8　明赤褐色　砂質シルト　粘性微弱 しまり弱
　明褐色土粒、To－Cu微量混入。被熱している。
7．5YR4/6　赤褐色　砂質シルト　粘性微弱 しまり弱
　To－Cu微量混入。焼土層。
8．5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性中 しまり中
　灰白色粘土、黒褐色土との混土。
9．2.5Y4/2　暗灰黄色　シルト　粘性中 しまり中
　明黄褐色土粒微量混入。
10．2.5Y4/6　オリーブ褐色　シルト　粘性中 しまり中
　明黄褐色土粒中量混入。
11．10YR6/8　明黄褐色　シルト　粘性中 しまり強
　オリーブ褐色土との混土。
12．2.5YR4/4　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
13．2.5Y4/4　オリーブ褐色　シルト　粘性中 しまり中
　明黄褐色土、黒褐色土との混土。
14．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
　明黄褐色土焼土粒微量混入。
15．10YR5/6　黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
16．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
17．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中 しまり中
　明赤褐色土焼土粒少量混入。
18．2.5Y5/6　黄褐色　シルト　粘性中 しまり中
　黒色土ブロック少量混入。
19．2.5Y5/6　黄褐色　砂質シルト　粘性微弱 しまり微弱
　To－Cu多量に混入。
20．2.5Y4/3　オリーブ褐色　シルト　粘性弱 しまり弱





No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量（cm）			その他
						口径	底径	器高	
1	カマド左袖	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ→ミガキ 〔体～底〕ナデ	〔口～底〕ミガキ	(14.0)		4.6	内面黒色処理
2	覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ→ミガキ 〔体〕ナデ→ミガキ？	〔口～体〕ミガキ	(14.5)		−3.0	内外面黒色処理
3	Q４覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ→ミガキ 〔体〕ナデ	〔口～底〕ミガキ			−3.9	内面黒色処理
4	Q２覆土下位	土師器	甕	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ		7.6	−4.2	底部木葉跡あり

No.	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	状態	備考
5	床面Q３床面壁際	刀子	8.1	1.2	0.4	6.09	一端一部欠損	

第９図　第１号竪穴住居跡(2)

第２号竪穴住居跡（第10～19図、第２表、写真図版６～８・21～24）

［位置・検出状況］　Ｏ－15～16グリッド付近を中心に存在する。検出面は第Ⅱ層上位で、Ｔｏ－ａの楕円形状の広がりによって確認した。同面における本遺構付近の地形は南東方向に約４～５°下傾している。なお、本遺構の東側約７ｍには第３号竪穴住居跡、北東約10ｍには第７号土坑、第６号土坑、第１号方形溝状遺構が、また、南側約11ｍには第1号陥し穴状遺構が存在する。

［規模・平面形・方位］　壁長は、北西壁865㎝、北東壁810㎝、南東壁820㎝、南西壁760㎝を測り、平面形は隅丸方形を呈する。床面積は54.18㎡で、他の住居跡に比べ非常に大形である。主軸方向はＮ－57°－Ｗである。

［壁・床面］　本遺構の壁面は、四壁ともに上半部が外側に張り出しており、棚状（テラス状）を呈する。この張り出し部の幅は、北西壁で約80㎝、北東壁で約90㎝、南東壁で約45㎝、南西壁で約55㎝を測る。幅が広く、はっきりと棚状を呈することから壁の崩落によって生じたものではなく、構築されたものである。本部分の面積は16.38㎡で、住居跡全体の面積はこれに床面積を加えた70.56㎡となる。

各壁中央部における床面からの壁高残存値（床面～張り出し開始部分・張り出し開始部分～検出面）はそれぞれ、北西壁で117㎝（60㎝・57㎝）、北東壁で83㎝（52㎝・31㎝）、南東壁で47㎝（23㎝・24㎝）、南西壁で63㎝（30㎝・33㎝）である。下部はほぼ垂直に立ち上がる。張り出し部は水平に近い角度を呈する。

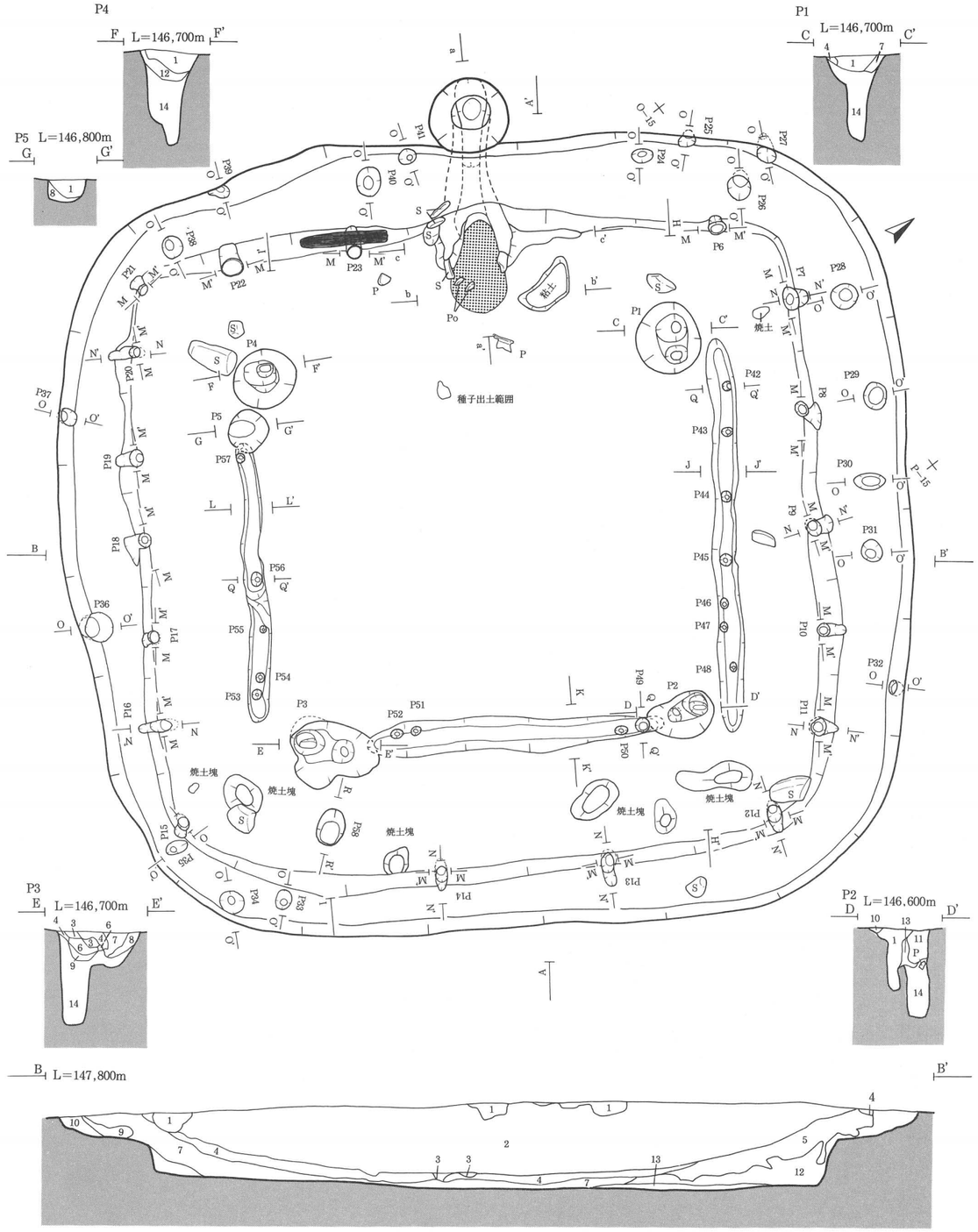
住居構築時の掘り込みは第Ⅴ層中位まで行われており、その上部にＴｏ－Ｃｕ及びＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土を主体とした貼り床が１～30㎝の厚さでほぼ全面に施されている。床面には特に目立った凹凸はないが、周辺の地形と同じく南東方向が、特にＱ２のレベルが若干低くなっている。全般に堅緻である。

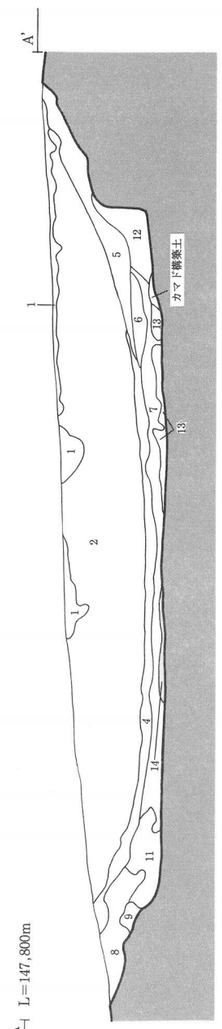
［カマド］　北西壁の中央部に構築されている。両袖部には、他の住居跡と同様に板状に加工された軟質の凝灰岩を芯材として使用しており、ほぼ直列に４～５個ずつ配置されている。右袖部では床面下10㎝程度まで達しているが掘り方は確認されず、貼り床構築土と接している。貼り床の構築と同時に設置されたものと考えられる。この芯材の周りににぶい黄橙色主体の粘土を貼り付けて本体を構成している。同様な凝灰岩は煙道内の底面付近からも数点出土し、内２点は煙道左壁に沿って直列した状態を呈していた。燃焼部には径98×68㎝・厚さ23㎝のにぶい黄褐色焼土が形成されている。煙道部は刳り貫き式で、その底面は本体部から中央付近までは平坦であるが、ここから煙出し部までは約20°の傾斜で下っている。内側壁面からの煙道長は60㎝である。煙出し孔は上部が急激に広がっており、外側壁面と接している。径88×83㎝の楕円形で、検出面からの深さは141㎝である。

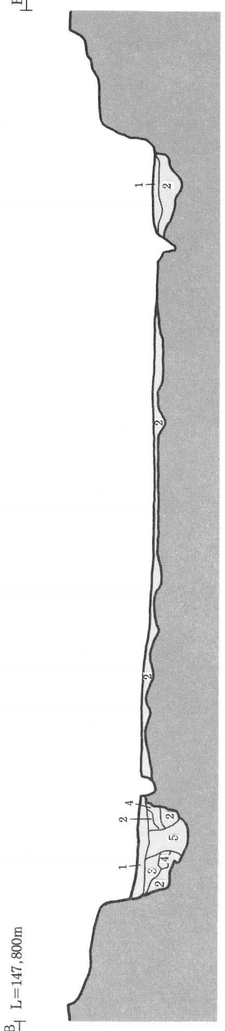
［柱穴・ピット・その他］　住居内のピットは合計で58個検出した。Ｐ１～Ｐ４の４個は主柱穴と思われる。開口部はＰ１及びＰ４が楕円形、Ｐ２及びＰ３が長楕円形である。Ｐ１～Ｐ３には、柱が入っていたと思われる最深穴の脇に小さい窪みが存在し、Ｐ２でははっきりとした柱穴状を呈する。Ｐ４にはこのような痕跡が明確には確認されないものの、南東側に浅いピットＰ５が隣接している。Ｐ１～Ｐ４の床面からの深さは全て１ｍ前後である。

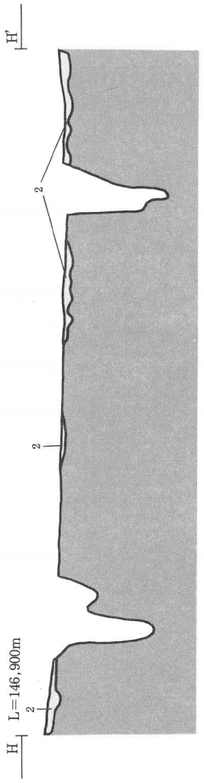
Ｐ６～Ｐ23の18個は壁面に残存していた痕跡から検出したもので、補助柱穴（壁柱穴）と考えられる。この痕跡は半円状を呈しているため、柱の片側は壁に入り込み、もう片側は住居内空間に露出していたものと思われる。各ピット間の間隔は比較的一定で、ある程度の規則性を持っている。また、この柱は若干外側に傾く傾向があったようである。床面からの深さはまちまちで、浅いもので数㎝、深いもので55㎝を測る。

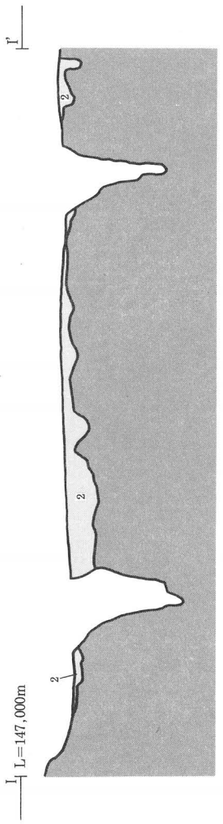
Ｐ24～Ｐ41の18個は壁の張り出し部分から検出したものである。平面形、大きさともまちまちで、深さも全体的に浅いため補助柱穴であったかどうかは不明である。











第２号竪穴住居跡

1. 10YR3/2 黒灰色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−aブロックが中量混入。
2. 10YR8/2 灰白色 火山灰 粘性弱 しまり強 To−aの水成堆積層。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中 To−aブロックが中量混入。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり弱 To−aがごく微量のみ混入。
5. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり弱 To−aブロックが漸く混入。
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 To−a粒及び褐色砂粒が少量混入。
7. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 To−a粒、To−Cu,To−Nb,及び褐色砂粒が少量混入。
8. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒及び褐色砂粒が微量混入。
9. 10YR3/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒及び褐色砂粒が微量混入。
10. 10YR3/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 褐色砂粒がごく微量混入
11. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 褐色砂粒が中量混入 。
12. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 褐色砂粒が中量、To−a粒が少量混入。
13. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり中 To−Cu及び褐色砂粒が少量混入。
14. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり強 To−Cuブロック、暗褐色土ブロックが中量混入。貼り床。

第２号竪穴住居跡主柱穴

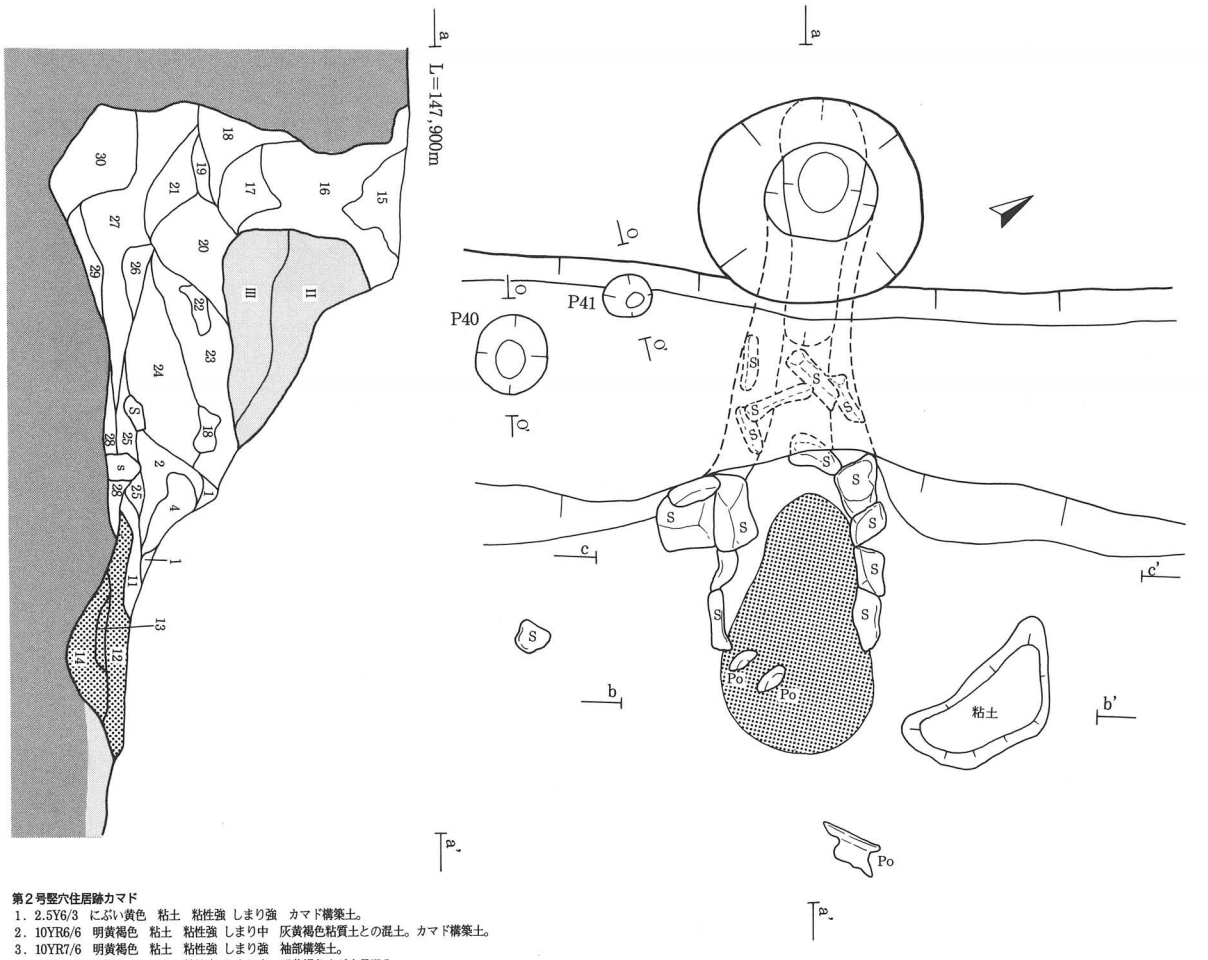
1. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu,To−Nb少量混入。
2. 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu,To−Nb微量混入。
3. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒,To−Cu,To−Nbが微量混入。
4. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu微量混入。
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒が少量、To−Cu,To−Nbが微量混入。
6. 10YR4/2 灰白色 火山灰 粘性弱 しまり弱 To−a。
7. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Nb少量混入。
8. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu中量混入。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱
10. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−aブロックが少量混入。
11. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu、To−Nb微量混入。
12. 10YR5/6 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu、To−Nb少量混入。
13. 7.5YR2/2 暗褐色 シルト 粘性中 しまり弱 To−Cu、To−Nb微量混入。
14. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性無 しまり無 To−Cu、To−Nb微量混入。しまりなくフワフワ。

第２号竪穴住居跡貼り床

1. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu,To−Nb少量混入。
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu及び暗褐色土ブロックが中量混入。
3. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒、To−Cu,To−Nbが微量混入。
4. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−Cu微量混入。
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−a粒が少量、To−Cu、To−Nbが微量混入。

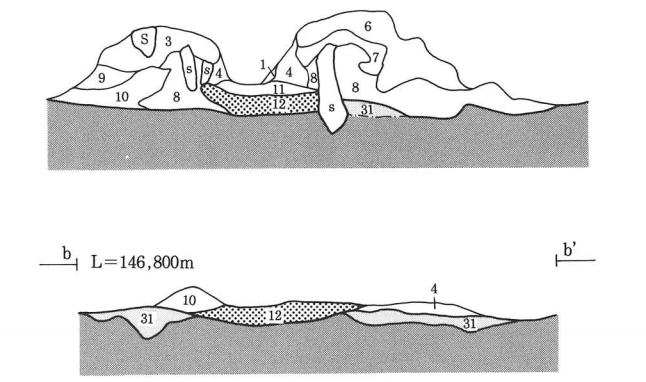
1：60
0 1 2 m

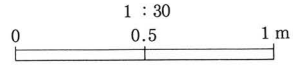
第10図　第２号竪穴住居跡(1)



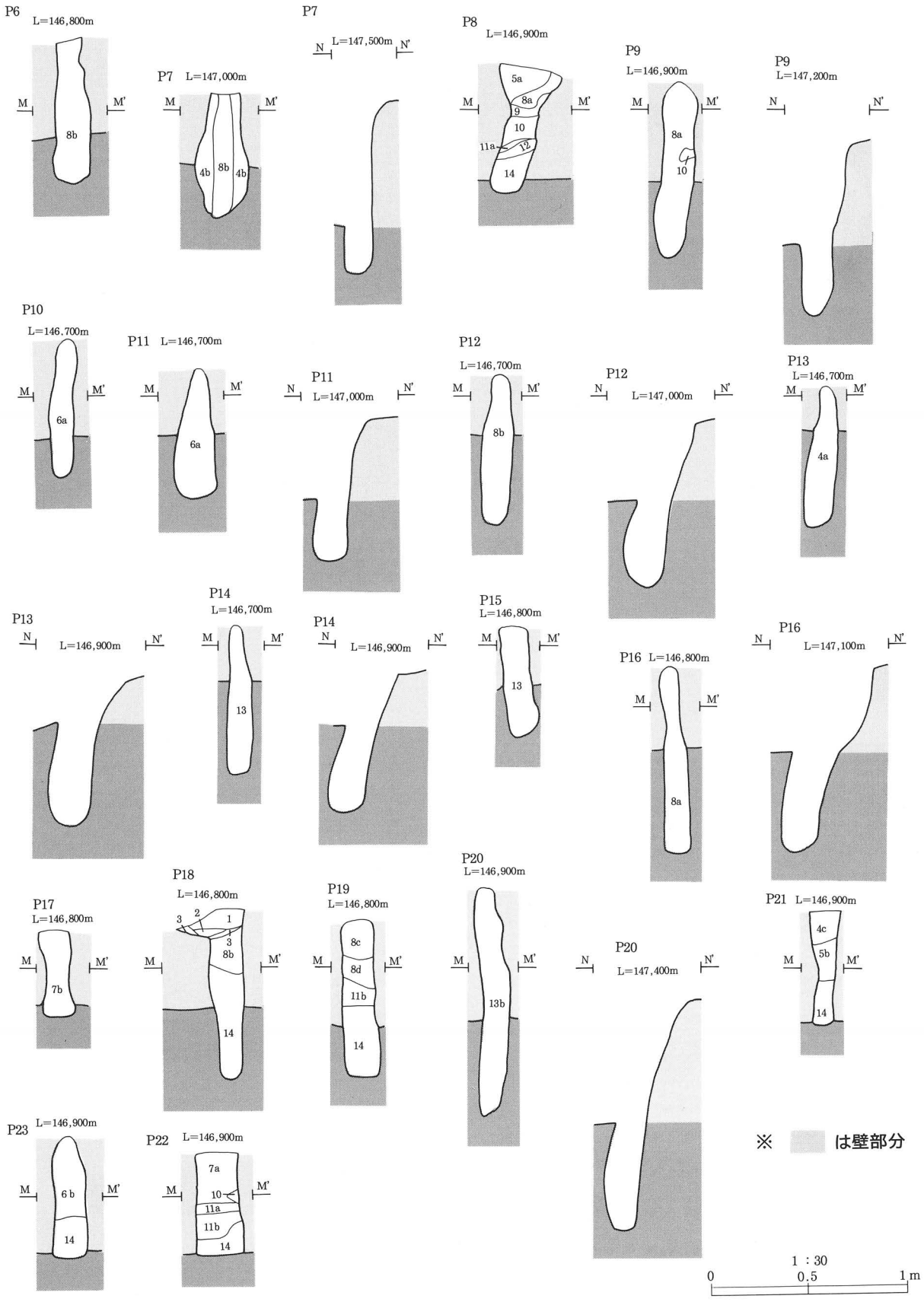
第２号竪穴住居跡カマド

1. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土 粘性強 しまり強 カマド構築土。
2. 10YR6/6 明黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 灰黄褐色粘質土との混土。カマド構築土。
3. 10YR7/6 明黄褐色 粘土 粘性強 しまり強 袖部構築土。
4. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 明黄褐色土が少量混入。
5. 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト 粘性中 しまり中 焼土粒が中量混入。
6. 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黒褐色土ブロック少量混入。
7. 10YR6/3 にぶい黄橙色 粘土 粘性強 しまり強 袖部構築土。
8. 10YR2/3 黒褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黄橙色粘質土及びTo−aブロックが中量、炭化物粒が少量混入。袖部構造築土。
9. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱
10. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 褐色粒が少量混入。
11. 7.5YR4/3 褐色 シルト 粘性中 しまり中 被熱層。
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり弱 焼土層。
13. 10YR7/2 にぶい黄橙色 粘土質シルト 粘性強 しまり弱 焼土層。
14. 5YR5/8 明赤褐色 シルト 粘性弱 しまり中 焼土層。
15. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 焼土粒、炭化物粒が少量混入
16. 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト 粘性中 しまり中 灰黄褐色粘質土との混土。焼土粒、炭化物粒少量混入。
17. 7.5YR5/4 にぶい褐色 シルト 粘性中 しまり中 灰黄褐色 粘質土との混土。炭化物粒少量混入。
18. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱 しまり中 To−Cuが 微量、黒褐色土がシミ状に混入。
19. 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒少量混入。
20. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 灰黄褐色粘質土、炭化物粒少量混入。
21. 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性微弱 しまり微弱 第18層がブロック状に少量混入。
22. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまり中
22. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまり中
23. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 にぶい黄褐色土ブロック、及びTo−Cuが少量混入。
24. 10YR5/4 にぶい黄褐色 軽石 粘性なし しまり弱 1〜3㎜のTo−Cu。塊状になっている部分有り。
25. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまり弱 焼土粒が全体に淡く混入。
26. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり弱 炭化物粒少量混入。
27. 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 暗褐色土粒少量混入。
28. 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性微弱 しまり弱 1〜8㎜の砂粒が多量に混入。
29. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性微弱 しまり微弱 若干大きめ（3〜5㎜）のTo−Cuが多量に混入。
30. 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性中 しまり弱
31. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり中 黄褐色土粘土質土、To−Cuブロックが中量混入。貼り床。

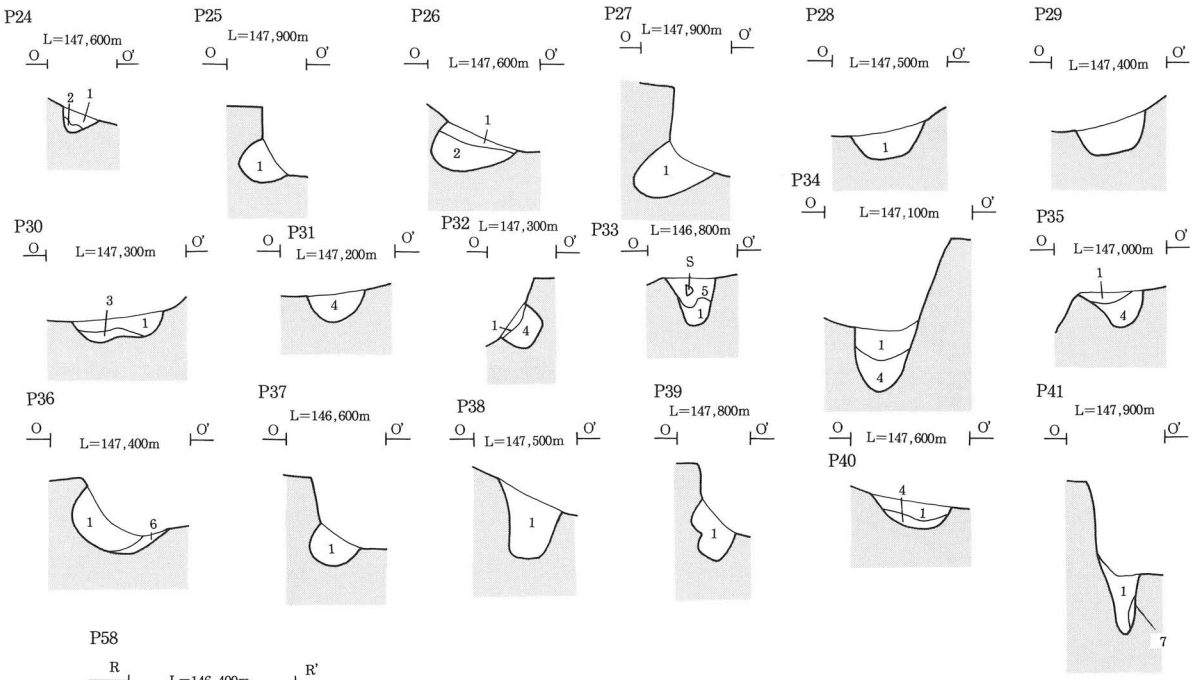


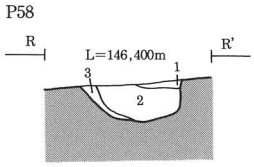


第11図　第２号竪穴住居跡(2)



第12図　第２号竪穴住居跡(3)





第２号竪穴住居跡P58

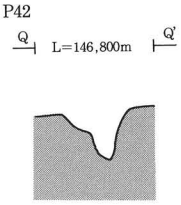
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中
2．7.5YR6/8 橙色　粘土　粘性強 しまり強　To−aが混入。
3．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中

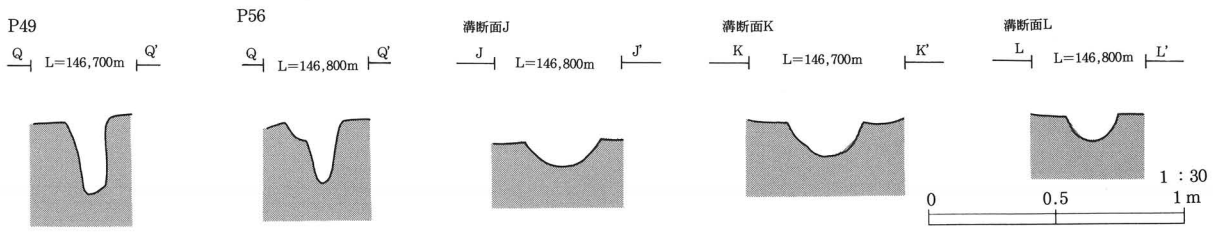
第２号竪穴住居跡張り出し部柱穴

1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
3．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中 しまり弱　To−Cu微量混入。
4．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu少量混入。
5．2.5YR6/4　にぶい黄色　シルト　粘性微弱 しまり弱　To−aに砂粒が若干混入。黒褐色土との混土。
6．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cu微量混入。
7．10YR5/8　黄褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　To−Cu少量混入。

第２号竪穴住居跡壁柱穴

1．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒褐色土との混土。
2．10YR8/1　灰白褐色　火山灰　粘性弱 しまり弱　To−a。ラミナみられる。
3．10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−a粒少量混入。
4a．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱
4b．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−a粒少量混入。
4c．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−Cu微量混入。
5a．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中 しまり中
5b．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中 しまり中　To−Cu粒微量混入。
6a．10YR4/4　褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　黒褐色土との混土。
6b．10YR4/4　褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　黒褐色土との混土。To−Cu及び炭化物粒が少量混入。
7a．10YR4/4　褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　黒褐色土との混土。
7b．10YR4/4　褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　灰黄褐色土との混土。To−Cu少量混入。
8a．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性微弱　しまり微弱
8b．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−Cu少量混入。
8c．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　褐色ブロック少量混入。
8d．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　炭化物粒少量混入。
9．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱
10．10YR7/6　明黄褐色　軽石　粘性無 しまり弱　To−Cu。
11a．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性微弱　しまり微弱
11b．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−Cuとの混土。
12．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
13a．10YR3/3　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱
13b．10YR3/3　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−Cu少量混入。
14．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱





第13図　第２号竪穴住居跡(4)

第14図　第２号竪穴住居跡(5)

第２号竪穴住居跡周辺ピット観察表

No.	規模（cm）	深さ(cm)	色調・土性
P1	50×32	38	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 サラサラ
P2	25×21	30	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 サラサラ
P3	17×13	33	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P4	30×21	32	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P5	36×30	38	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱 中位に褐色土混入
P6	16×16	24	10ＹＲ3/4 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P7	27×24	41	10ＹＲ3/4 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P8	27×19	33	10ＹＲ3/4 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P9	28×24	36	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P10	24×19	45	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P11	32×20	37	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 サラサラ
P12	21×14	44	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 To−Cu微量混入
P13	27×19	42	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P14	30×26	53	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P15	51×32	30	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P16	25×23	44	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P17	28×24	35	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 南東方向に傾く
P18	25×17	36	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 褐色土ブロック混入
P19	19×18	24	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P20	25×25	35	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 フワフワ
P21	20×18	40	10ＹＲ3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中
P22	37×28	35	10ＹＲ3/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱 土師器破片出土
P23	35×32	32	10ＹＲ4/4 褐色 シルト 粘性微弱 しまり中 炭化物粒混入
P24	32×27	24	10ＹＲ3/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無
P25	31×28	27	10ＹＲ3/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P26	32×30	36	上部15～20cm …10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱 下部…15～20cm 10ＹＲ4/6 褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P27	19×17	32	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P28	29×16	41	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P29	31×20	38	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P30	34×18	39	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P31	20×16	22	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P32	21×18	27	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱
P33	19×17	32	10ＹＲ3/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱

No.	規模（cm）	深さ(cm)	色調・土性
P34	14×10	25	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−aブロック混入
P35	20×13	29	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 To−aブロック混入
P36	26×17	29	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性中 しまり弱
P37	22×20	27	10ＹＲ3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P38	45×30	18	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり微弱
P39	26×20	21	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱
P40	41×17	13	上部５～６cm …2.5ＹＲ7/3 浅黄色 粘土質シルト 粘性強 しまり中 下部…10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱
P41	40×29	27	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P42	27×27	27	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 サラサラ
P43	25×21	20	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 サラサラ
P44	25×16	29	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P45	28×20	16	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性微弱 しまり中 上部のみ固くしまる
P46	26×17	27	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり弱 上部のみ固くしまる
P47	27×23	36	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 サラサラ 上部のみ固くしまる
P48	27×22	35	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 サラサラ 上部のみ固くしまる
P49	40×30	44	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり無 フワフワ 上部のみ固くしまる
P50	40×35	57	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり無 フワフワ 上部のみ固くしまる
P51	30×20	24	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり無 サラサラ 上部のみ固くしまる
P52	33×27	38	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり無 サラサラ 上部のみ固くしまる
P53	16×9	17	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱 サラサラ
P54	16×9	17	10ＹＲ3/1 黒褐色 シルト 粘性微弱 しまり中
P55	25×16	36	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
P56	20×12	25	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P57	33×27	18	10ＹＲ3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P58	35×15	36	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 フワフワ
P59	23×13	31	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P60	20×12	15	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
P61	10×9	18	10ＹＲ3/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P62	13×7	34	10ＹＲ2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P63	25×20	24	10ＹＲ2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり弱
P64	12×9	11	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
P65	23×19	35	10ＹＲ2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中

第２号竪穴住居跡遺物観察表

No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量（cm）			その他
						口径	底径	器高	
6	Ｑ１覆土下位	土師器	坏	〔口～底〕ミガキ	〔口～底〕ミガキ	(15.0)		(5.5)	内外面黒色処理？
7	Ｑ３覆土中位	土師器	坏	〔体～底〕ミガキ 〔口〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	(11.4)		(3.8)	内外面黒色処理？
8	Ｑ２覆土下位	土師器	坏	〔口～底〕ミガキ	〔口～底〕ミガキ	(12.8)		(6.9)	内外面黒色処理
9	カマド左袖	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ナデ→一部ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ミガキ	(14.0)		(5.0)	内面黒色処理
10	カマド左袖他	土師器	坏	〔口～底〕ミガキ	〔口～底〕ミガキ	(19.4)	8.2	7.9	内外面黒色処理
11	Ｑ１覆土下位	土師器	小形甕	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ナデ→一部ケズリ	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ナデ	(11.6)	(7.2)	8.9	
12	カマド前他	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ミガキ→一部ケズリ〔底〕ナデ→一部ミガキ	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体～底〕ハケメ	18.0	9.5	23.6	
13	Ｑ４カマド前	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ→ミガキ〔底〕ナデ→ミガキ	〔口〕ハケメ→ナデ→ヨコナデ 〔体～底〕ハケメ→ヨコナデ	20.0	9.3	30.0	
14	Ｑ１床面北隅	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	17.5		−13.7	
15	覆土下位、 １号住居状床面	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ケズリ	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ヨコナデ	(16.4)		(18.5)	
16	Ｑ２覆土中位	土師器	甕	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ	17.3		−15.5	
17	Ｑ１覆土下位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	18.7		(13.3)	
18	カマド前	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ	(20.4)		−9.6	
19	Ｑ１床面北隅	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ナデ→ミガキ	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→一部ミガキ	(14.3)		−15.6	
20	カマド前他	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ナデ→ケズリ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ナデ	(20.4)		−14.0	
21	カマド前	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ	(19.0)		−10.0	
22	Ｑ１覆土下位	土師器	甕	〔口～体〕ハケメ→ミガキ	〔口〕ハケメ→一部ミガキ 〔体〕ナデ→一部ミガキ？	(20.6)		−10.0	
23	Ｑ１床面・柱穴内、５号住覆土	土師器	甕	〔体～底〕ケズリ	〔体〕ハケメ		9.3	−8.5	内面まばらなハケメ調整
24	カマド左袖	土師器	甕	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ		8.4	−7.0	底部木葉痕有り
25	カマド前	土師器	甕	〔体～底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ		8.4	−6.4	
26	カマド左袖	土師器	甕	〔体〕ナデ→ケズリ	〔体～底〕ナデ 〔底〕ケズリ		7.1	(6.1)	
27	カマド左袖	土師器	甕	〔体〕ナデ→ケズリ	〔体～底〕ナデ 〔底〕ケズリ		9.4	−4.5	
28	カマド左袖	土師器	甕	〔体〕ケズリ→ナデ→一部ミガキ〔底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ		(6.2)	−7.6	
29	Ｑ１覆土下位	土師器	甕	〔体～底〕ナデ	〔体～底〕ナデ・ケズリ		8.2	(6.5)	
30	Ｑ３覆土中位	土師器	甕	〔体～底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ		(9.6)	(6.5)	
31	Ｑ２主柱穴内	土師器	甕	〔体～底〕ナデ	〔体～底〕ナデ		(12.0)	−3.6	
32	Ｑ１主柱穴内他	土師器	甕	〔体～底〕ナデ	〔体～底〕ナデ		(7.6)	−8.6)	
33	Ｑ４床面	土師器	甕	〔体〕ケズリ→ナデ〔底〕ナデ	〔体～底〕ハケメ		9.2	−2.4	
34	Ｑ４覆土下位	土師器	甕	〔底〕縁辺ナデ	〔底〕ナデ		10.5	−1.2	底部木葉痕有り
35	カマド前、 ５号住覆土他	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ〔体〕ナデ→ミガキ→ケズリ〔底〕ナデ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ 〔体～底〕ナデ	16.3	9.0	26.3	
36	Ｑ１カマド前他	土師器	甕	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ナデ	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体～底〕ナデ→ミガキ	20.0		−26.6	体部内面ミガキのようなナデ？
37	カマド前他	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ→ハケメ	(18.9)		−16.2	
38	カマド前、１号住居状床面他	土師器	甕	〔口〕ハケメ・ケズリ→ミガキ 〔底〕ミガキ	〔体～底〕ナデ		10.0	−12.4	
39	カマド前、 Ｑ１主柱穴内	土師器	甕	〔体〕ナデ→ミガキ	〔体〕ハケメ→ナデ		9.0	−10.4	
40	Ｑ１床面	土師器	甕	〔体〕ナデ	〔体〕ナデ			−4.7	内面粘土巻き上げ時の指頭圧痕 写真図版にのみ掲載
41	Ｑ１覆土上位	須恵器	大甕	〔体〕タタキメ	〔体〕ナデ			−8.2	格子目文

No.	出土地点	種別	径（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存状態	備考
42	Ｑ２床直	土製紡錘車	5.3×5.2	2.0	38.71	完形	中央で半分に欠損

No.	出土地点	種別	石質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存状態	産地	備考
43	Ｑ２床面南壁際	磨製石斧	遅れい岩	6.0	2.8	1.3	34.56	完形	北上産地	
44	覆土中位	砥石	石英安山岩	6.7	4.0	3.3	131.63	一端欠損	奥羽山脈	端部に敲打痕有
45	覆土中位	砥石	石英安山岩	8.8	5.4	4.3	197.38	完形	奥羽山脈	

No.	出土地点	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	状態	備考
46	Ｑ２床面	小札	5.0	3.1	0.2	4.64	1/3欠損	一端部に径２mmの孔２ヶ所有
47	Ｑ２床面	釘	5.7	0.8	0.9	4.15	完形	

第２表　第２号竪穴住居跡周辺ピット観察表・遺物観察表

北東壁、南東壁、南西壁の各壁面から内側１ｍ前後の付近の床面より、各壁面に平行する細長い溝状の掘り込みを検出した。３条とも各主柱穴の間またはそれに沿うように存在し、平面形及び深さは、北東部のものが440×20～30㎝・10㎝、南東部のものが317×18～40㎝・13㎝、南西部のものが307×17～24㎝・10㎝を測る。Ｐ42～Ｐ57の16個は同溝の底面付近から検出したもので、平面形は直径10～15㎝程度の楕円形を呈する。深さは10～17㎝程度である。

Ｐ58は白色粘土が多量に混入していたピットで、径40×30㎝の楕円形を呈する。深さは15㎝である。

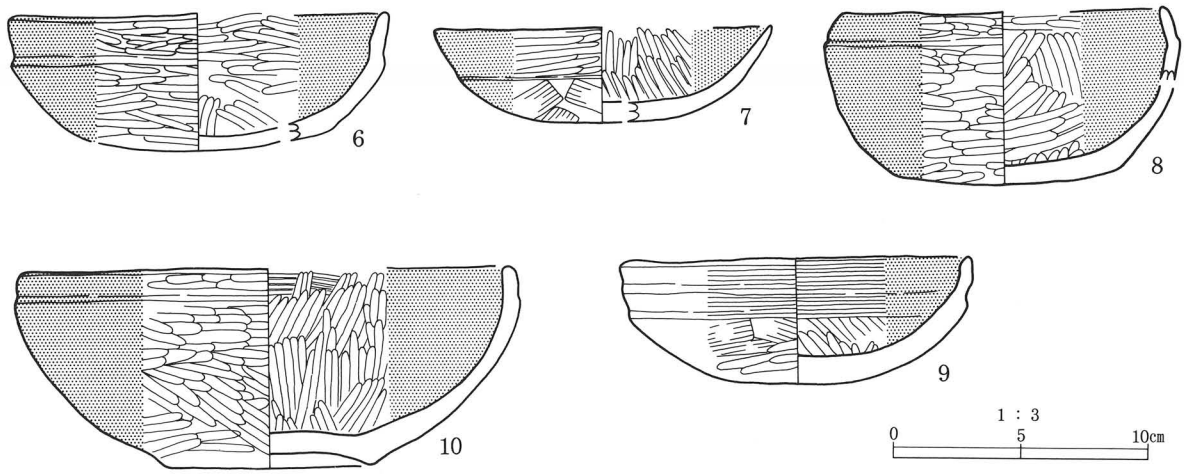
［覆土］　14層に分層された。この内、第14層は貼り床である。大別すると下層から、Ｔｏ－Ｃｕを含む黒色土、Ｔｏ－ａを粒状・モヤ状に含む黒褐色土、ラミナの顕著なＴｏ－ａ、Ｔｏ－ａの小ブロックを含む黒褐色土となる。本遺構においてもＴｏ－ａが非常に厚くレンズ状に水成堆積しており、最大厚は83㎝を測る。注目されるのは、このレンズ状に厚く堆積したＴｏ－ａの下層に、さらにＴｏ－ａを含む層（第４～９・12層）が存在することである。しかも第４層のＴｏ－ａ混入率に比して、より下層の第７層の方が多く混入していることは興味深い。

［遺物］　床面から土師器坏１点・破片１点、長胴甕１点・略完形品１点・甕片12点、球胴甕片５点、小札１点、釘１点が出土した。カマド付近から出土したものが大半を占める。№８の土師器坏は、その形態から８世紀前半のものと思われる。また、№38の球胴甕は第１号竪穴住居状遺構床面出土のものと接合した。この他には、床面直上から磨製石斧１点、土製紡錘車１点、覆土Ｔｏ－ａより下層から土師器坏片３点、小形甕片１点、砥石２点、Ｔｏ－ａより上位から須恵器大甕片１点が出土している。また、図示しなかったが、覆土中から多数の土師器片が出土している。

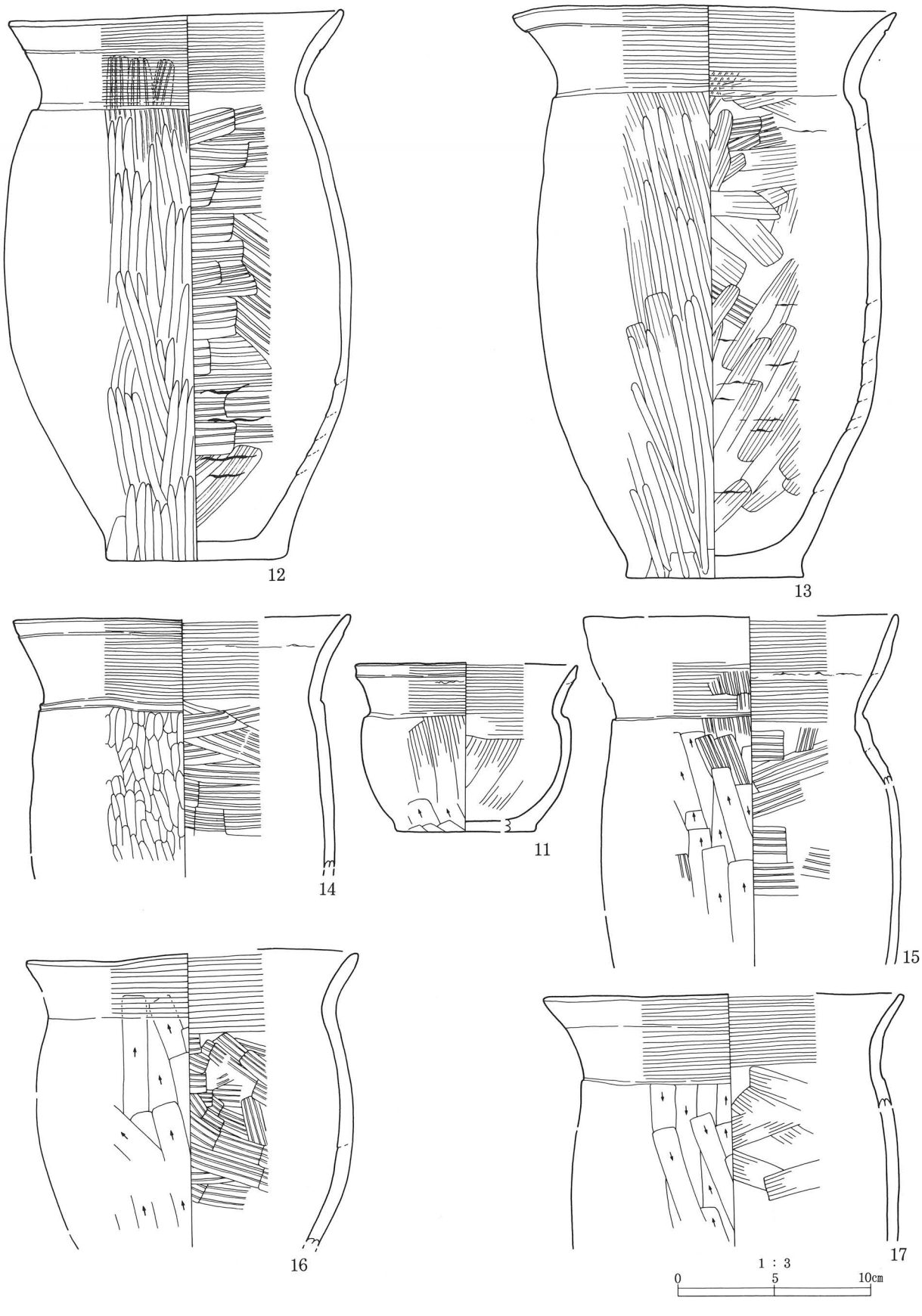
また、カマド左前の床面精査時に、貼り床内から植物種子を検出した。出土範囲は30×20㎝程度で、床面下５～６㎝まで入っているのが確認された。これについては種子同定を行い、Ⅵの自然科学的分析で詳しく記述しているのでそちらを参照していただきたい。

［住居跡周辺の小ピット群及びＴｏ－Ｃｕ混入土堆積範囲］　本遺構周辺から合計65個の小ピットが検出された。西側及び南東側に多く分布している。径・深さともまちまちであり、その性格も不明である。

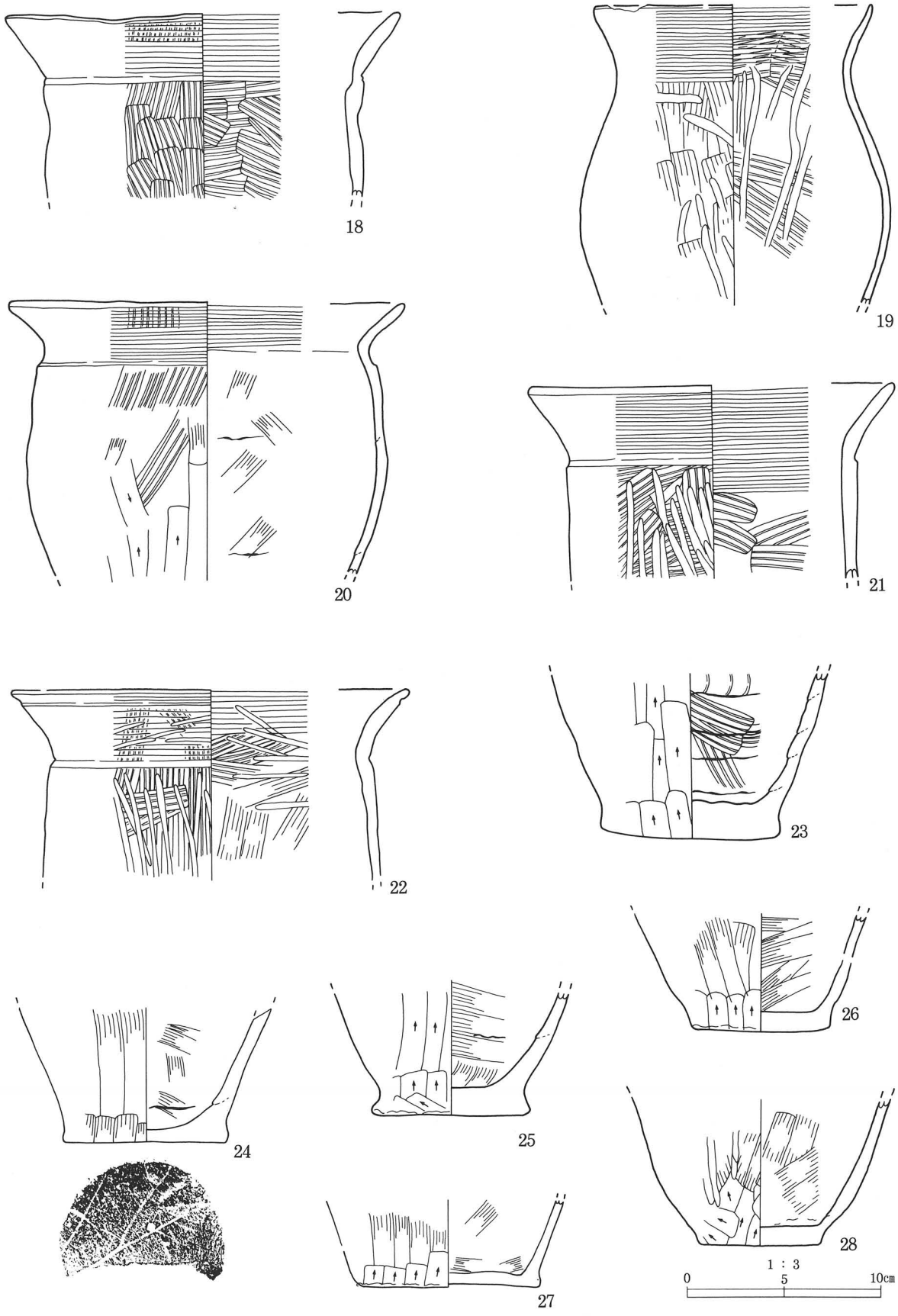
また、本遺構を囲むような範囲で、Ｔｏ－Ｃｕを含む黒褐色土の薄い堆積が検出された。斜面上部でカマド設置方向にあたる北西側～北東上半部・南西上半部における同範囲は、外壁から50～200㎝の幅で存在する。但しカマド煙出し孔付近には堆積していない。斜面下部の南東側では全周しておらず、点々としている。小ピット集中付近には堆積していない。また、北東下半部・南西下半部では外壁から離れ、外側に広がる状態を呈している。



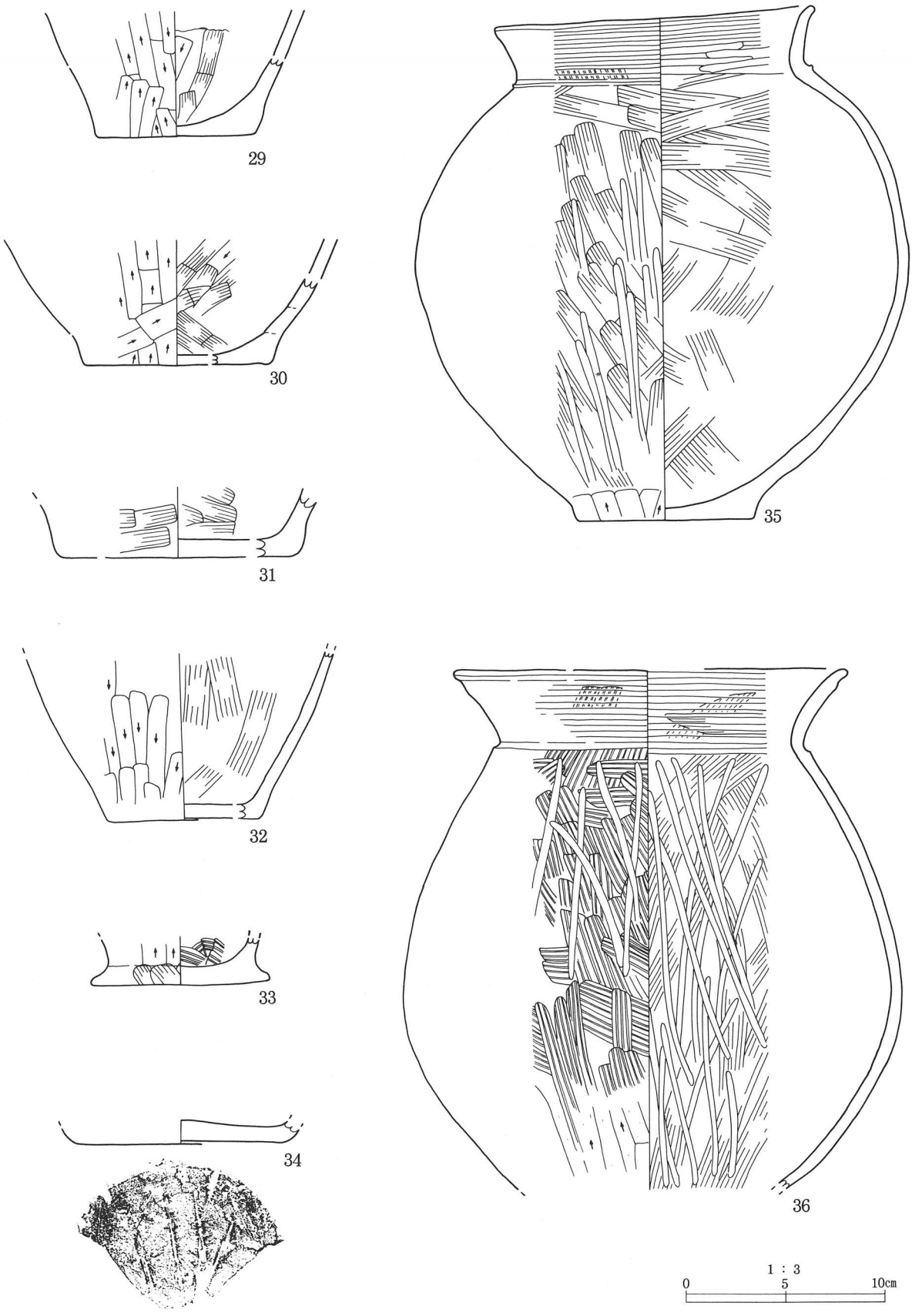
第15図　第２号竪穴住居跡(6)



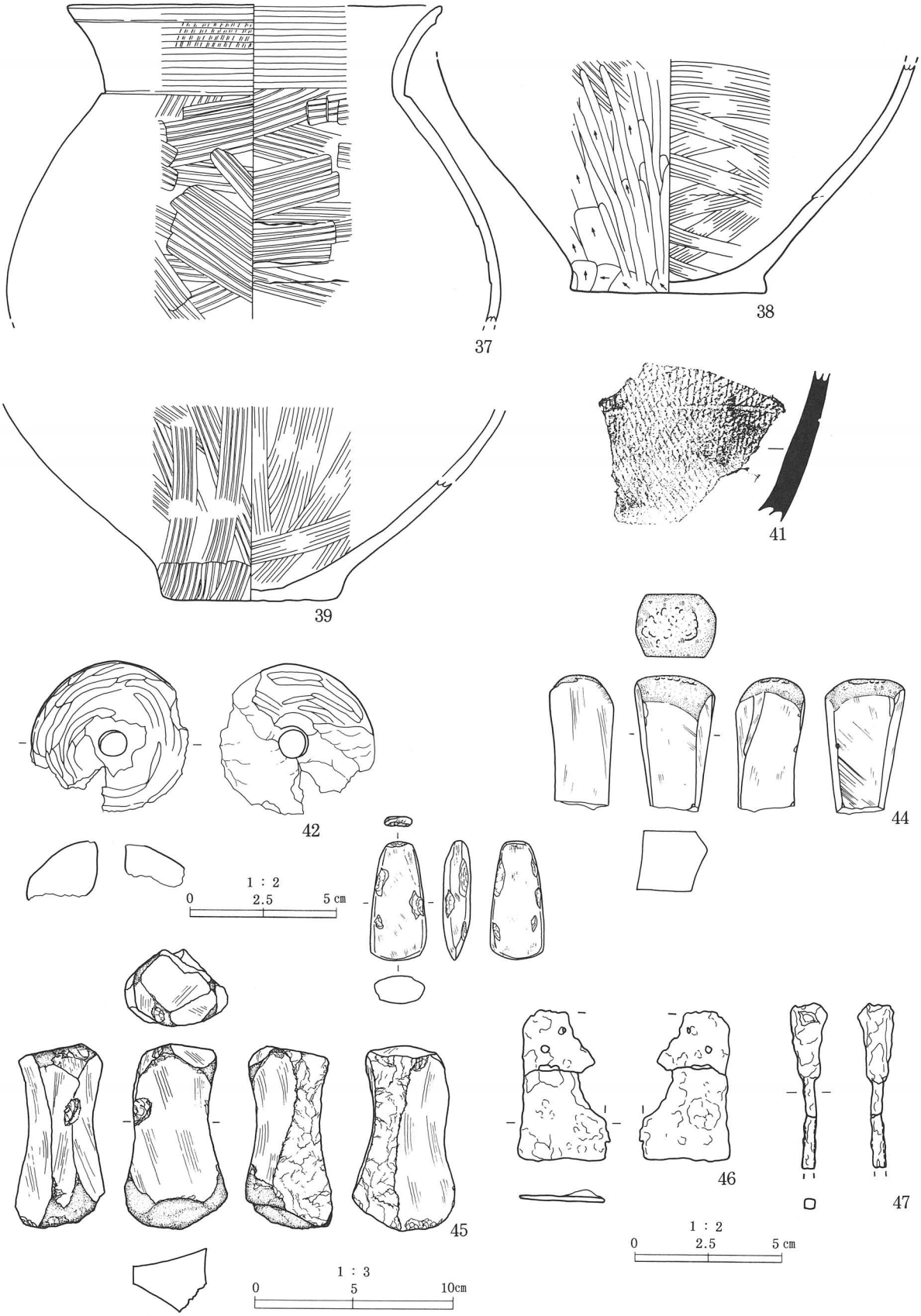
第16図　第２号竪穴住居跡(7)



第17図　第２号竪穴住居跡(8)



第18図　第２号竪穴住居跡(9)



第19図　第２号竪穴住居跡(10)

第３号竪穴住居跡　（第20～21図、写真図版９・25）

［位置・検出状況］　Q～R－15～16グリッドに跨って存在する。この付近は南東方向に約１～２°下傾しているのみで、比較的平坦である。住居本体部分の検出面は第II層中位で、To－aを含む黒色土の広がりによって確認したが、煙出し孔がこれより20cm程度上面から検出されたため、本体部分の本来の構築開始面もこれと同程度のレベルであったと思われる。南東側の一部が調査区域外にはみ出しており、この部分については不明。なお、本遺構の北側約５mには第７号土坑、第６号土坑、第１号方形溝状遺構が、西側約７mには第２号竪穴住居跡が存在する。

［規模・平面形・方位］　規模は、北西壁で350cmを測る。前述のように南東側が調査区域外にはみ出しており他３壁の壁長は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。床面積は推定で約9.5㎡、主軸方向はN－53°－Wである。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は、北西・北東・南西壁共に25～30cm前後である。但し前述のように本体部分を掘り過ぎているため、これより20cm前後高かったものと思われる。各壁とも、床面に対して120～130°の角度でやや外傾しながら直線的に立ち上がる。

住居構築時の掘り込みはVI層まで行われており、床面以下には多量のTo－Nbが混入している。貼り床の存否については、To－aが床面下まで多量に浸透していたため分層が困難で、明確には判断できなかった。但し、非常に硬くしまっており、凹凸も無くほぼ平坦である。

［カマド］　北西壁に構築されており、中央より若干右側に寄っている。残存状態が良く、芯材が良好な状態で残っていた。立位の礫が左右袖部に各２個ずつ配置され、その上部に天井石となる扁平な長方形の礫を２個平行に配している。この礫も他住居跡のカマドに使用されているものと同質の凝灰岩で、軟質で板状に加工されている。袖部芯材の礫は床面から10～15cm程度下まで入っているが、掘り方はTo－aの多量浸透もあって確認されなかった。右袖部にはカマド構築土と思われる粘質土が若干存在するが、他の部分には残存していない。燃焼部には径71×49cm・厚さ10cmの明赤褐色焼土が形成されている。煙道部は刳り貫き式で、底面は本体部から緩やかに下って煙出し部へ続いている。北西壁からの煙道長は65cmを測る。煙出し孔は径40×45cmの楕円形で、同孔検出面からの深さは115cmである。

［柱穴・ピット］　検出されなかった。

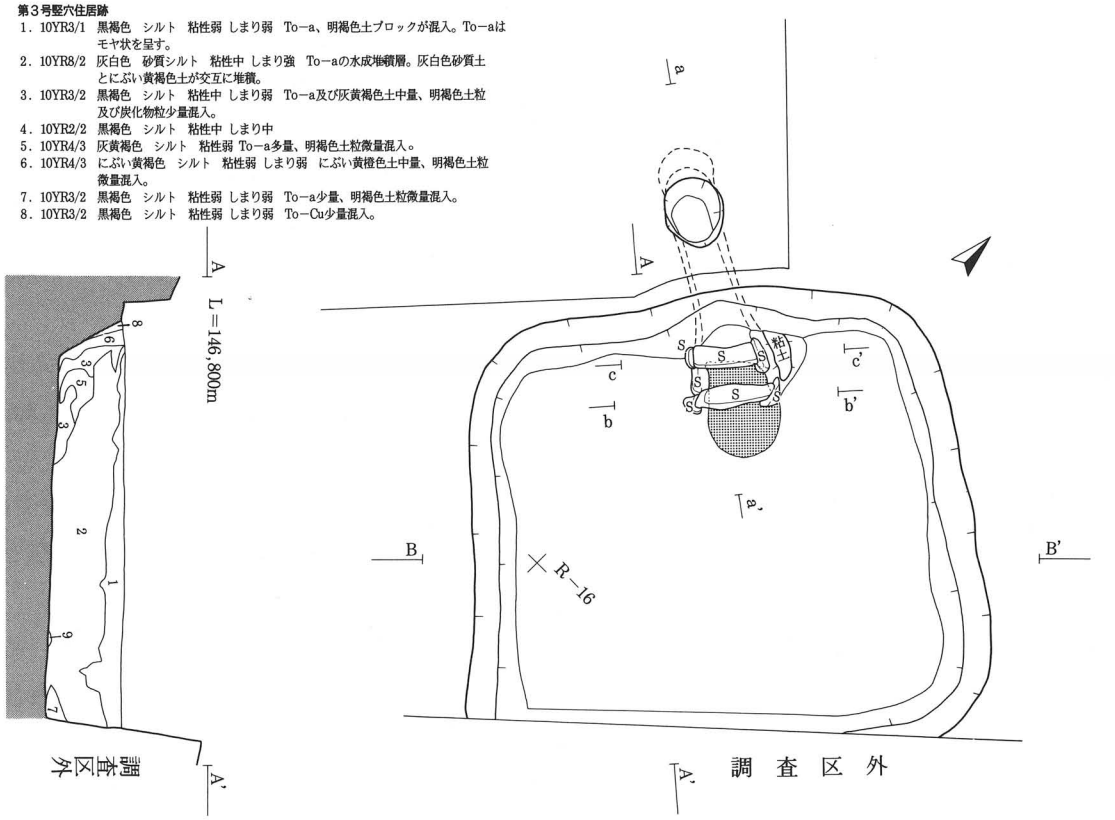
［覆土］　９層に分層された。但し、前述のように上部から20cm程度は掘り過ぎのため欠如しているものと思われる。

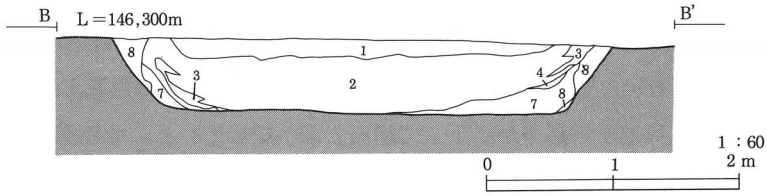
ほとんどの層にTo－aが混入している。ほぼ純粋なTo－aの層は、他の遺構の場合覆土上位か中位付近に堆積していることが多いが、本遺構では床面直上に存在しており、住居本体だけでなくカマド内や煙道部にも厚く堆積し、前述のように床面下にも多量に浸透している。同層はラミナが顕著に見られることからも、水成の再堆積層だと考えられる。そのためこの住居跡の廃棄時期とTo－a降下年代の間にはあまり時間差がなく、一次堆積及び水成の再堆積によって床面及び煙道部に染み込んだものと考えられる。

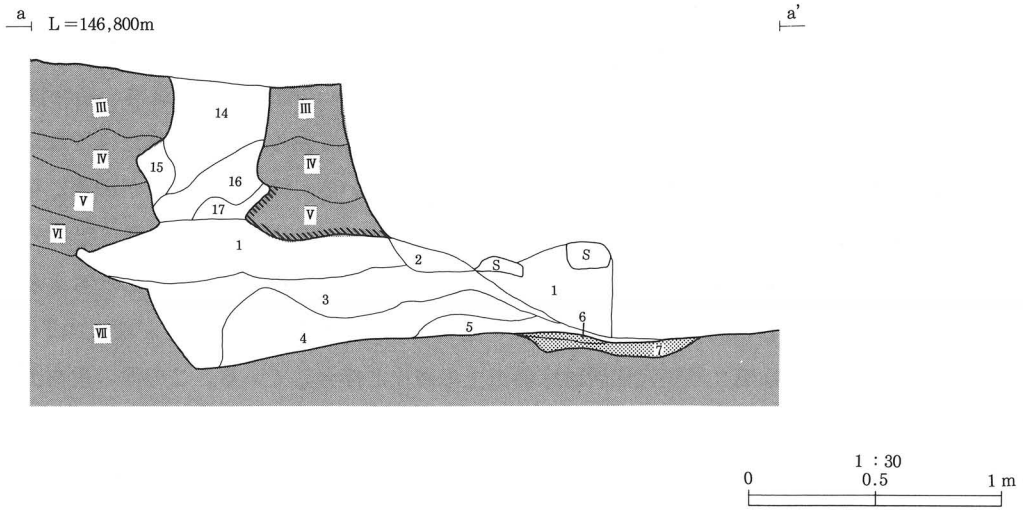
［遺物］　床面東側から台石１点が出土。また、土師器の長胴甕片、球胴甕片が覆土のTo－aより下層から出土したが、これらは第２号竪穴住居跡床面出土の破片と接合している。この他の遺物出土はない。

第３号竪穴住居跡

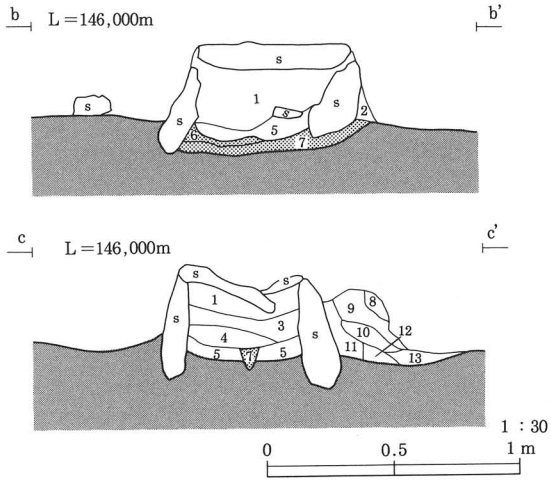
1. 10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－a、明褐色土ブロックが混入。To－aはモヤ状を呈す。
2. 10YR8/2　灰白色　砂質シルト　粘性中 しまり強　To－aの水成堆積層。灰白色砂質土とにぶい黄褐色土が交互に堆積。
3. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり弱　To－a及び灰黄褐色土中量、明褐色土粒及び炭化物粒少量混入。
4. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中
5. 10YR4/3　灰黄褐色　シルト　粘性弱 To－a多量、明褐色土粒微量混入。
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　にぶい黄橙色土中量、明褐色土粒微量混入。
7. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－a少量、明褐色土粒微量混入。
8. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu少量混入。

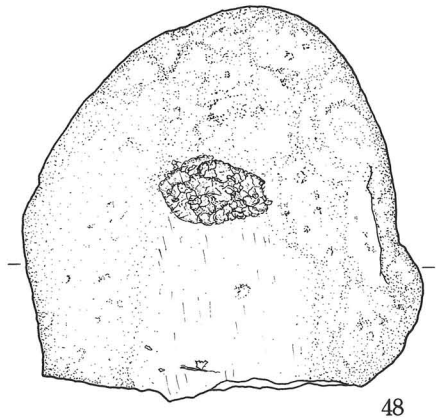


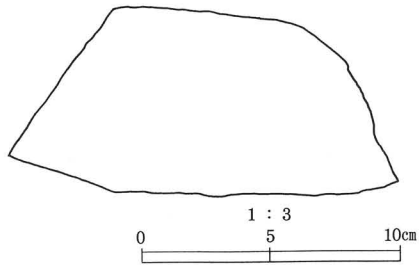




第20図　第３号竪穴住居跡(1)







第３号竪穴住居跡カマド

1. 10YR8/2 灰白色 火山灰 粘性中 しまり強 To−aの水性堆積層。To−aとにぶい黄褐色粘土質が交互に堆積。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまり弱
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 To−Nb少量混入。
5. 7.5YR5/8 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 焼土粒混入。
6. 5YR5/8 明赤褐色 シルト 粘性中 しまり中 焼土。部分的に明赤褐色を呈す。
7. 10YR3/6 暗赤色 シルト 粘性中 しまり中 若干被熱しており、To−Nbが赤色化している。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまり強 To−Nb少量混入。カマド構築土。
9. 7.5YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり強 To−Nb少量混入。カマド構築土？
10. 7.5YR4/4 褐色 粘土 粘性強 しまり弱 To−Nb少量混入。カマド構築土。
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまり強 黄色粘土粒が少量混入。カマド構築土。
12. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中 To−Nb中量混入。
13. 10YR2/2 黒褐色 粘性弱 粘性強 しまり中 To−Nb中量混入。
14. 10YR3/3 黒褐色 シルト 粘性中 しまり強 To−Nb少量混入。
15. 10YR3/3 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり強 粘質のTo−aが中量、To−Nbが少量混入。
16. 10YR3/3 黒褐色 粘土 粘性強 しまり強 第15層とにぶい黄褐色土の混土。
17. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまり強 粘質のTo−aが中量混入。

No.	出土地点	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)
48	Q２床面	台石	安山岩	15.1	14.5

厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	産地	備考
8.6	2315.15	完形	奥羽山脈	表面に擦痕有

第21図　第３号竪穴住居跡(2)

第４号竪穴住居跡　（第22～23図、写真図版10・25）

［位置・検出状況］　Ｊ～Ｋ－21～22の４グリッドに跨って立地する。検出面は第II層上位で、Ｔｏ－ａの楕円形状の広がりによって確認した。同面における本遺構周辺の地形は南東方向に約５～８°の下り傾斜となっている。なお、本遺構の北側約８ｍには第３号土坑がある。

［規模・平面形・方位］　規模は、北西壁477㎝、北東壁412㎝、南東壁464㎝、南西壁420㎝を測り、平面形は隅丸方形を呈する。床面積は17.34㎡、主軸方向はＮ－57°－Ｗである。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は、北西壁50㎝、北東壁50㎝、南西壁48㎝、南東壁35㎝で、壁面は四壁とも外傾している。北西壁及び南東壁は上半部が更に外傾するが、崩落した可能性が高い。また、北西壁は最上部で極緩斜度の広がりを持ち張り出し状を呈しているが、意図的に構築したものかどうかは不明である。但し、北西壁は斜面上部に当たることから流水等による浸食の影響を最も強く受けているものと考えられ、ある程度削られているのは確実である。

住居構築時の掘り込みは第Ｖ層まで行われており、Ｑ３とＱ１北西壁付近を除く全面にはＴｏ－Ｃｕを含む黒褐色土によって厚さ10㎝弱の貼り床が構築されている。床面は全体的に硬くしまっているが、Ｑ４の中央部は特に硬い。特に顕著な凹凸は見られないが、周辺の傾斜と同じく南東側が低くなっている。

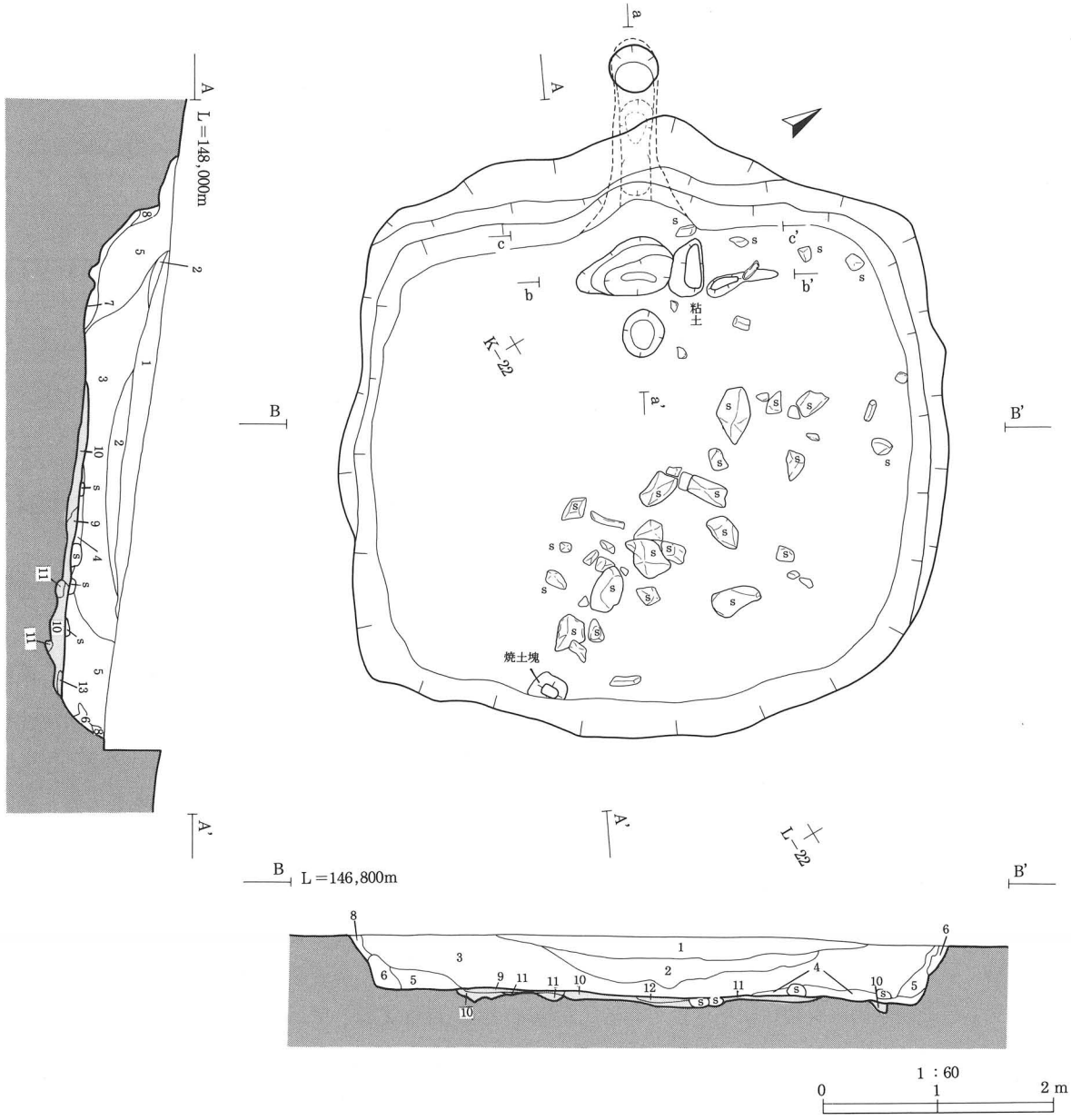
［カマド］　北西壁の中央部に構築されている。左袖部付近には構築材と思われる粘質土が平たく堆積し、同じく構築材と思われる軟質の凝灰岩が２個存在しているが、燃焼部付近は窪んだ状態を呈しており、はっきりとした焼土は確認できない。Ｑ２・Ｑ３・Ｑ４の床面に同質の凝灰岩及び比熱によって硬質化した粘土塊が多数散在していることから、このカマドは破却された可能性が高く、燃焼部付近の窪みは破却時の掘り込みだと思われる。また、散在している凝灰岩の量があまりに多いため、この種の礫がカマド構築材以外に

も使用されていた可能性が考えられる。煙道部は刳り貫き式の構造で、その底面は最初緩やかに下り、煙出し孔直下手前で上り勾配に変わる。北西壁からの煙道長は95cmを測る。煙出し孔は径40×42cmの楕円形で、検出面からの深さは82cmである。

［柱穴・ピット］　検出されなかった。

［覆土］　８層に分層された。下位から大別して、To－Cuを少量含む黒褐色土、To－ａを粒状に含む黒色土、ラミナの顕著なTo－ａの順に堆積している。攪乱の痕跡も無く、上位２層はレンズ状に堆積しており自然堆積である。

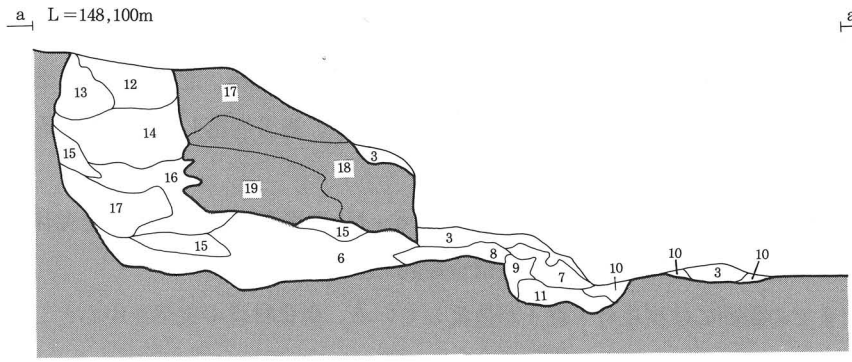
［遺物］　床面北東部から土師器の長胴甕片が出土した。また、この付近からは前記のように凝灰岩礫が多量に出土している。他部分及び覆土中からの遺物出土はほとんどない。

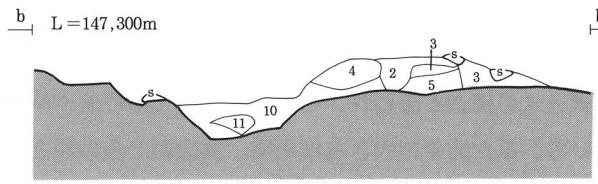


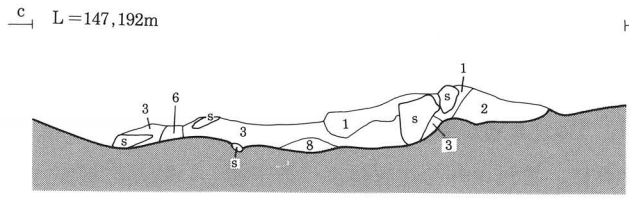
第22図　第４号竪穴住居跡(1)

第４号竪穴住居跡

1．10YR8/1　灰白色　火山灰　粘性微弱 しまり中　To－aの水性堆積層。
2．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－a粒が少量、To－Cu、To－Nbが微量混入。
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu、To－Nbが微量混入。
4．10YR5/8　黄褐色　シルト　粘性中 しまり弱　黒褐色土との混土。
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu微量混入。
6．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu微量混入。
7．7.5YR3/4 暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　褐色土ブロックが少量混入。
8．7.5YR3/2 黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中
9．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり強　To－Cuが全体に淡く混入。ブロック状の部分も有。To－Nb少量混入。硬くしまっている。貼り床。
10．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり強　第９層に似るが軟質。貼り床。
11．2.5YR6/8　明黄褐色　軽石　粘性微弱 しまり中　To－Cuと黒褐色土との混土。貼り床。
12．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中 しまり強　黒褐色土との混土。貼り床。
13．10YR6/3　にぶい明橙色　粘土　粘性強 しまり強　明黄褐色土との混土。黒褐色土少量混入。貼り床。



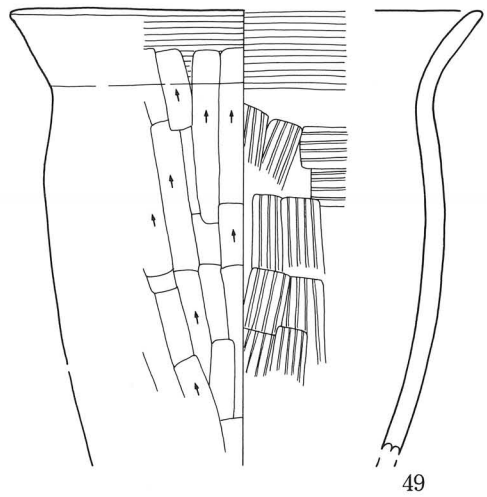




1 : 30
0　0.5　1 m

第４号竪穴住居跡カマド

1．10YR4/6　褐色　シルト　粘性中 しまり弱　黒色土ブロック少量混入。
2．10YR1.85/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　小粒のTo－Cu少量混入。
3．10YR4/6　褐色　粘土　粘性強 しまり強　To－b少量混入。
4．10YR5/8　黄褐色　シルト　粘性中 しまり中　To－b、焼土粒微量混入。
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり強 To－b微量混入。
6．2.5YR4/6　オリーブ褐色　砂質シルト　粘性微弱 しまり弱　粗粒。
7．10YR3/4　褐色　シルト　粘性中 しまり強　To－b、焼土粒微量混入。
8．7.5YR3/4 暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　大粒（５～10㎜）の焼土粒が中量混入。
9．7.5YR4/6 褐色　シルト　粘性弱 しまり中　小粒のTo－Nbが中量、及び焼土粒が微量混入。
10．7.5YR4/6 褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり強　色調、混入物とも第９層に似るが粘質強い。
11．7.5YR5/8 明褐色　シルト　粘性弱 しまり中　混入物は第９層と同様。
12．10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト　粘性弱 しまり強　にぶい黄褐色土及び暗褐色土との混土。被熱による変質、硬化顕著。
13．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり強　にぶい黄褐色土及び黒 褐色土との混土。被熱による変質、硬化顕著。
14．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが少量、焼土粒が微量混入。
15．10YR5/8　黄褐色　軽石　粘性無 しまり弱　To－Cu。黒色土ブロック少量混入。
16．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　褐色土との混土。To－Cu微量混入。
17．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが中量、焼土粒が微量混入。



1 : 3
0　5　10cm

No.	出土地点	種類	器種	外面調整
49	床面直上	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ

内面調整	法量(cm)			その他
	口径	底径	器高	
〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	(18.7)		−18.1	

第23図　第４号竪穴住居跡(2)

第５号竪穴住居跡　（第24～26図、写真図版11・25）

［位置・検出状況］　Ｔ－13グリッド付近に位置する。本遺跡内で唯一の焼失住居である。検出面は第II層中位で、Ｔｏ－ａの環状の広がりによって確認した。同面における本遺構付近の地形はほぼ平坦である。なお、本遺構の北東側約１ｍには第６号竪穴号住居跡が、西側約７ｍには第１号方形溝状遺構がある。

［規模・平面形・方位］　規模は、南東壁474㎝、南西壁405㎝、北西壁480㎝、北東壁375㎝を測り、平面形は北東～南西に長い隅丸長方形を呈する。床面積は17.17㎡、主軸方向はＮ－133°－Ｅである。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は、南東壁50㎝、南西壁55㎝、北西壁41㎝、北東壁47㎝を測る。壁面は一様に床面に対して120°前後の角度で外傾しているが、幾分崩落して角度が大きくなっているものと思われる。

住居構築時の掘り込みは第Ⅵ層中まで行われており、その上部にＴｏ－Ｎｂを多量に含む黒色土を主体とした貼り床が３～20㎝の厚さでほぼ全面に施されている。同面は全般的に堅緻である。

なお、床面及び床上15㎝程度までの範囲には炭化材・焼土が散乱している。炭化材は中央部を中心として放射状に存在するようである。

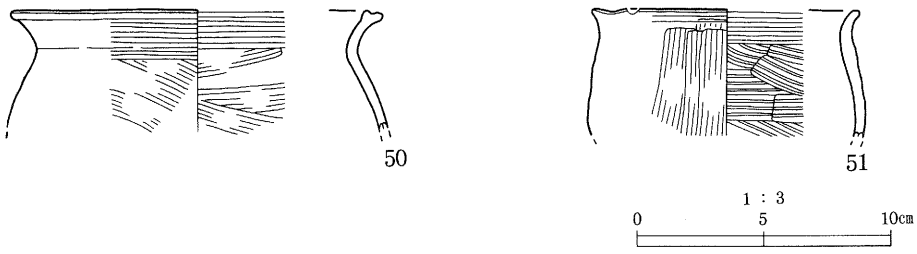
［カマド］　他の住居跡と異なり、南東壁右側に構築されている。カマド付近には燃焼部の焼土と被熱している軟質の凝灰岩が数個散在しているのみで、袖部等は全く残存していない。粘土塊や同質の凝灰岩が床面に散在していることから本カマドは破却された可能性が高い。燃焼部には66×39～51㎝・最大厚10㎝の不整楕円形を呈する焼土が形成されている。煙道部は刳り貫き式の構造と思われ、その底面は中央部で若干低くなるが顕著な凹凸は無い。煙出し孔は調査区外まで続いているためその大きさは不明。検出面からの深さは約80㎝前後であったと思われる。

［柱穴・ピット］　床面から２個のピットを検出した。Ｐ１は65×70㎝で深さ57㎝、Ｐ２は88×105㎝で深さ15㎝である。Ｐ１は主柱穴痕の、Ｐ２はカマドに関係するピットの可能性がある。

［覆土］　14層に分層された。床面付近には炭化物や焼土が散在しており、中央部より周縁部に厚く堆積している。これより上層は全て自然堆積と思われるが、Ｔｏ－ａ層が第３号竪穴住居跡と同様に下位に存在し、中央部では床面と接している。第３号竪穴住居跡と共に、これ以外の住居跡より若干新しい時期に構築された可能性がある。

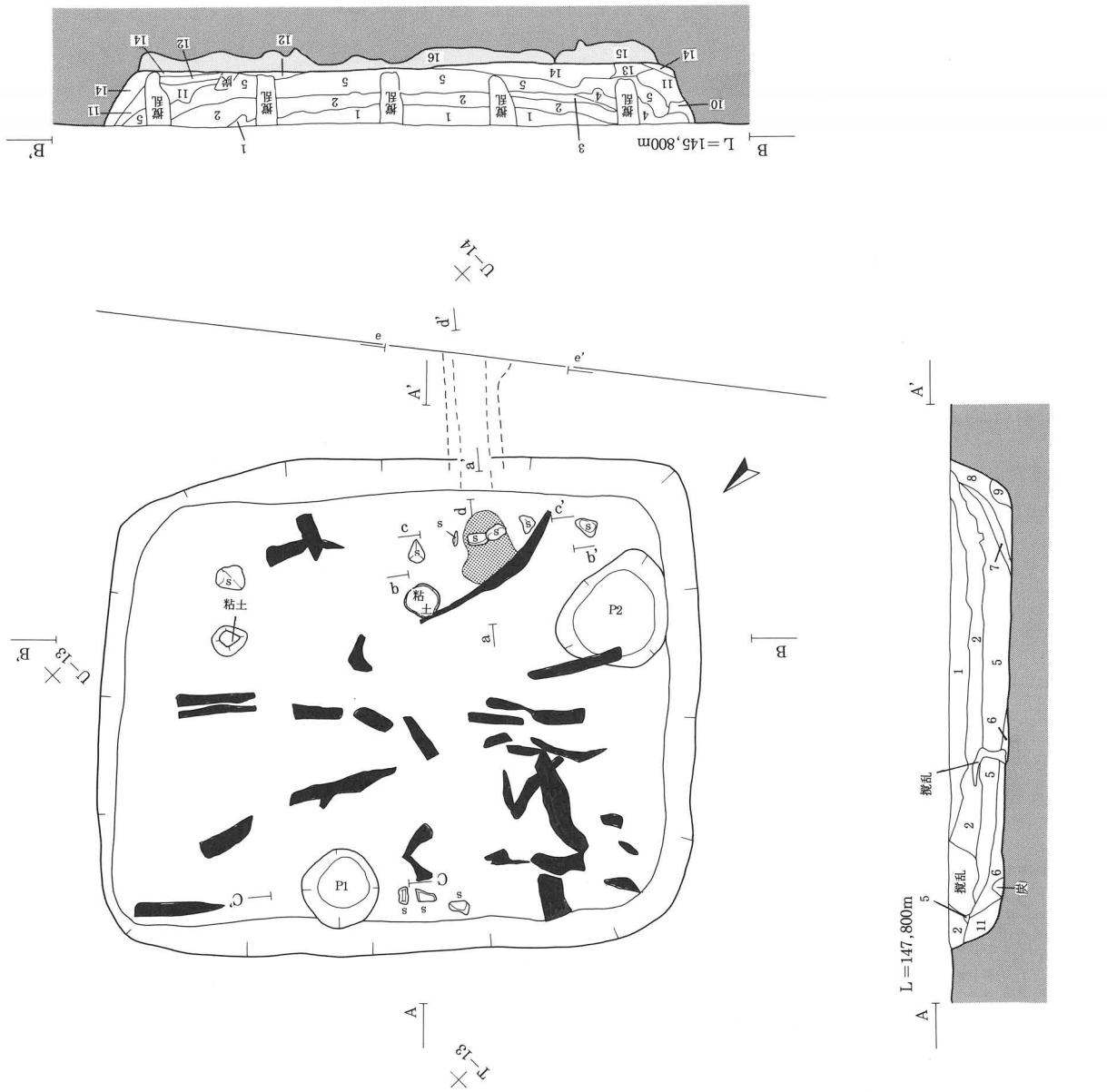
なお、本遺構床面南西側出土炭化材及び北西壁際床面上５～10㎝出土の炭化材（藁状のもの）の樹種同定を行った。詳細はⅥの自然科学的分析を参照していただきたい。

［遺物］　出土遺物は土師器甕のみで、全て破片である。ほとんどが覆土中からの出土で、貼り床内からわずかに１点出土しているが、床面からの出土はない。



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(㎝) 口径	底径	器高	その他
50	床面直上	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.7)		−4.8	
51	覆土	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	(10.6)		−5.0	

第24図　第５号竪穴住居跡(1)



第５号竪穴住居跡

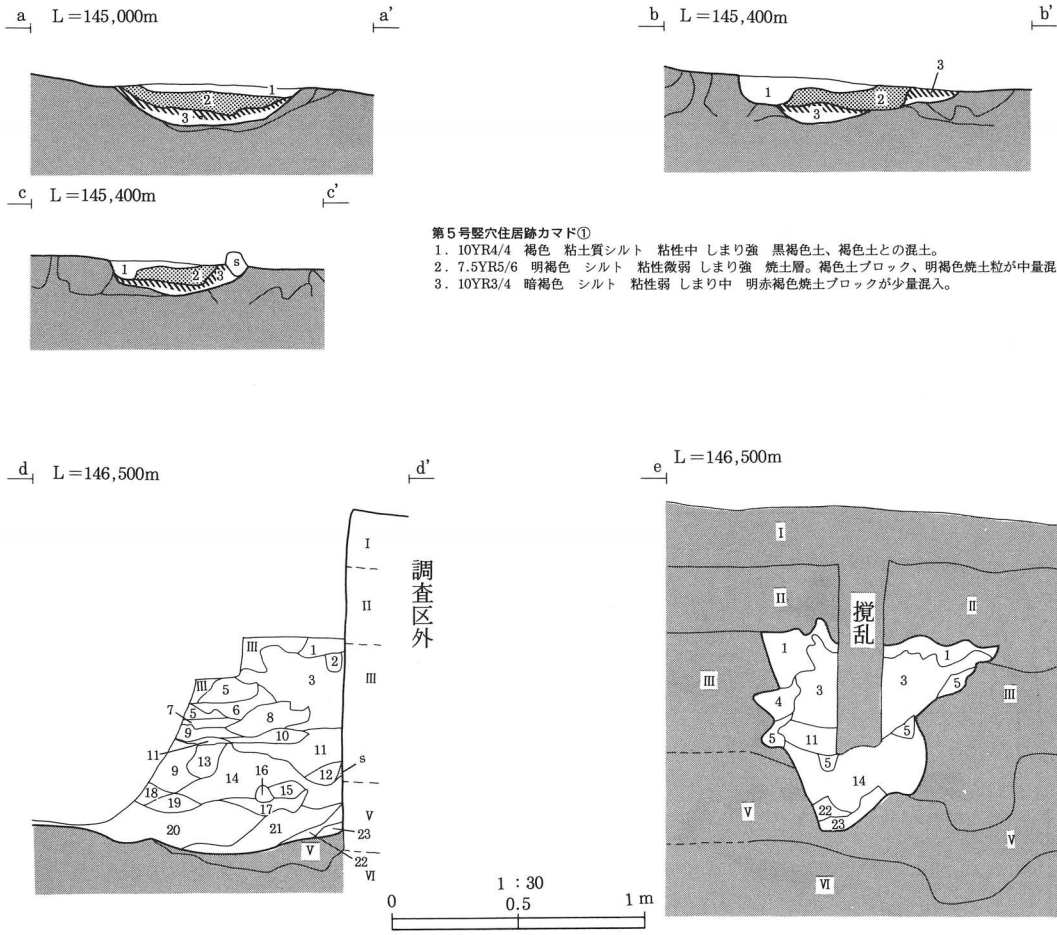
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒色土との混土。明黄褐色土ブロック中量混入。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色土　シルト　粘性弱 しまり弱　褐色土、黒色土との混土。明黄褐色土ブロック少量混入。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－aとの混土。
4．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
5．10YR8/1　灰白色　火山灰　粘性微弱 しまり中 To－aの水成堆積層。ラミナ顕著。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性弱 しまり弱　第２層に似るが、焼土粒や炭化物粒が多量に混入。
7．10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒褐色土との混入。
8．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　にぶい黄褐色土との混土。To－Cu中量、To－aブロック少量混入。
9．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　明黄褐色土ブロックが少量混入。
10．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu少量混入。
11．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu及び炭化物粒少量混入。
12．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　炭化物粒少量混入。
13．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－aとの混土。
14．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　明褐色土との混土。
15．10YR2/1　黒色　シルト　粘性微弱 しまり中　炭化物粒、To－Cu、To－Nbが少量混入。貼り床。
16．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり強　To－Nb、黒褐色土粒が多量に混入。貼り床。

第５号竪穴住居跡柱穴１

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　明赤褐色土粒、暗赤褐色土粒が少量混入。
2．10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒褐色土との混土。明赤褐色土粒が少量混入。
3．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中 しまり中

1：60
0　1　2 m

第25図　第５号竪穴住居跡(2)

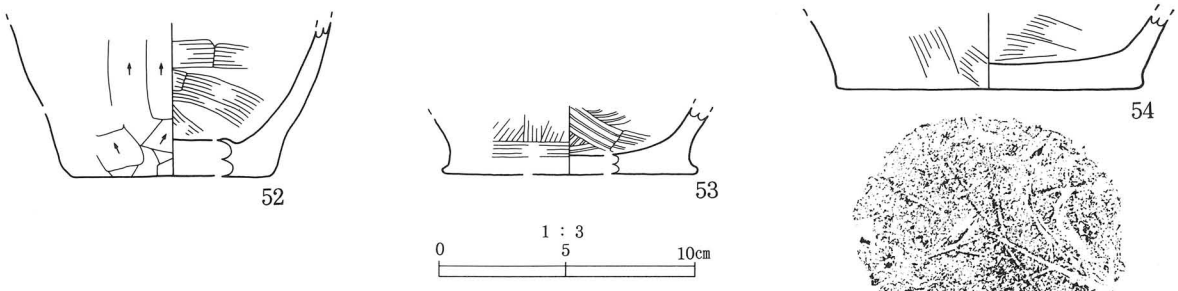


第５号竪穴住居跡カマド①

1．10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり強　黒褐色土、褐色土との混土。
2．7.5YR5/6　明褐色　シルト　粘性微弱 しまり強　焼土層。褐色土ブロック、明褐色焼土粒が中量混入。
3．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　明赤褐色焼土ブロックが少量混入。

第５号竪穴住居跡カマド②

1．10YR2/2.5 黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－b少量、To－Cu微量。及びTo－aが淡く全体に混入。
2．10YR2/2.5　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱
3．2.5YR6/3　にぶい黄色　火山灰　粘性微弱 しまり中　To－aの再堆積層。黒褐色土ブロックが混入。
4．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－aブロック及びTo－Cuブロックが中量、To－bが少量混入。
5．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱 To－b及びTo－Cuが微量、To－aがモヤ状に混入。
6．2.5YR6/3　浅黄色　砂質シルト　粘性弱 しまり弱　To－aと砂の混土。
7．2.5YR6/3　にぶい浅黄色　火山灰　粘性弱 しまり中　To－aの再堆積層。
8．10YR1.7/1 黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－b及びTo－Cuが微量、To－aが淡く全体に混入。
9．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu少量混入。
10．10YR1.7/1 黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－aとの混土。To－Cuが微量混入。
11．10YR5/3　黄褐色　火山灰　粘性弱 しまり強　To－aの水成堆積層。黄橙色粘質土層、砂層が数本交互に堆積
12．10YR4/3　にぶい黄色　粘土質シルト　粘性中 しまり中　To－Cuが少量混入。
13．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが少量、To－aがモヤ状に混入。
14．7.5YR1.85/1.5黒～黒褐色　シルト　粘性弱 しまり微弱　To－Cuが少量混入。
15．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　To－Cuが中量、To－aがモヤ状に混入。
16．10YR5.5/3　にぶい褐色～にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性中 しまり中　To－Cuが少量混入。
17．10YR2/2.5 黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが中量混入。
18．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが中量混入。
19．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　To－Cuブロックが少量混入。
20．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cuが少量混入。
21．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu及び暗褐色土ブロックが中量混入。
22．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが多量に混入。
23．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　被熱したTo－Cuが少量混入。



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
52	Q３床面直上	土師器	甕	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ		(7.9)	−6.1	
53	貼り床内	土師器	甕	〔体～底〕ナデ	〔体～底〕ハケメ		(10.0)	−2.7	
54	Q１覆土	土師器	甕	〔体〕ナデ	〔体～底〕ナデ		12.0	−2.9	底部木葉痕有り

第26図　第５号竪穴住居跡(3)

第６号竪穴住居跡　（第27～30図、写真図版12～13・25～26）

［位置・検出状況］　Ｕ－12～13、Ｖ－12グリッドに位置する。南東側の約半分程が調査区外にはみ出しているため、この部分については不明である。検出面は第Ⅱ層下位～第Ⅲ層上位で、Ｔｏ－ａの半楕円形状の広がりによって確認した。同面におけるこの付近の地形は南東方向に約２°下傾するのみで、ほぼ平坦である。なお、本遺構の南西側約１ｍには第５号竪穴住居跡が、北東側約４ｍには第２号及び第４号土坑が、北側約６ｍには第１号土坑がある。

［規模・平面形・方位］　規模は、北西壁で535㎝を測る。南東側が未発掘のため全容は不明であるが、おそらく平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向はＮ－42°－Ｗである。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は、北西壁85㎝、北東壁90㎝、南西壁88㎝で、各壁共に近似値となっている。他の住居跡に比べ壁高値が高い。床面との傾斜角は125°前後で外傾しているが、幾分崩落しているものと思われる。

住居構築時の掘り込みは第Ⅵ層下位～第Ⅶ層上位まで行われており、その上部に第Ⅶ層やＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土を主体とした貼り床が、５～20㎝の厚さでほぼ全面に施されている。同面は全体的に堅緻である。

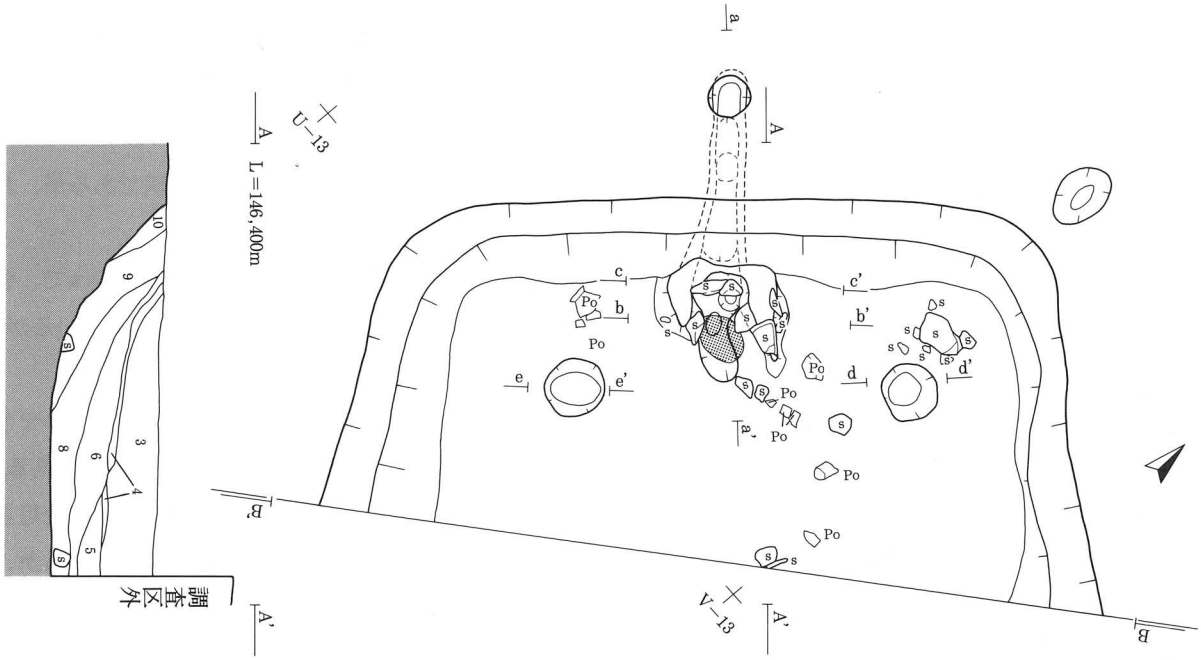
［カマド］　北西壁の中央部に構築されている。残存状態は比較的良い。両袖部には、他の住居跡で使用されているものと同様な凝灰岩が芯材として用いられている。床面下10㎝程度まで入っているものもあるが、やはり同様に掘り方が見られず貼り床に密着していることから、貼り床構築と同時に設置したものと考えられる。この芯材の周りに黄褐色・にぶい黄橙色主体の粘質土を貼り付けて袖部を構築している。また、この黄褐色粘質土は天井部にも使用していたらしく、燃焼部の上にも多量に堆積しており、潰れたような状態を呈している。燃焼部には径42×30㎝・厚さ10㎝の明赤褐色焼土が形成されている。この火床面は、周辺の貼り床と同レベルであるが貼り床とは異なる土で構築されており、焼土下の２層も貼り床構築土とは異なる。煙道部は刳り貫き式で、底面中央部付近に深さ15㎝程度の窪みがある他は概ね平坦である。北西壁からの煙道長は118㎝を測る。煙出し孔は35×31㎝の楕円形で、同孔検出面からの深さは約97㎝である。なお、カマド内覆土第７層から獣骨１点が出土している。

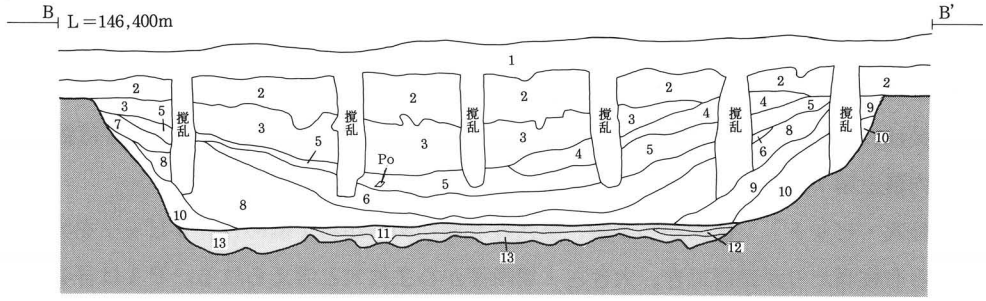
［柱穴・ピット］　床面から２個、竪穴外北側約30㎝から１個の合計３ピットを検出した。床面の２個はどちらも柱当たりが確認でき、大きさ・場所等から主柱穴と考えられる。Ｐ１は径45×43㎝の楕円形で深さ87㎝、柱当たり径約20㎝、Ｐ２は径48×46㎝の楕円形で深さ81㎝、柱当たり径約20㎝を測る。竪穴外北側のものは径54×38㎝の長楕円形で深さは26㎝、性格は不明である。

［覆土］　８層に分層された。第１層及び第３層以下は自然堆積と考えられる。第１層はラミナの顕著なＴｏ－ａで、覆土の中位付近からレンズ状に堆積しており、最深部で42㎝を測る。第８層は壁面の崩落土である可能性が高い。第２層には砕けたＴｏ－Ｎｂ及び褐色土ブロックが混入しており、他の層とは様相が異なる。Ｔｏ－Ｎｂの混入量が下層の第５・６層に比べてかなり多くしかも顕著に砕けていること、他の層には見られない土のブロックが混入していること、色調が他と全く異なることなどから、人為的に投げ込まれたものと考えられる。なお、同層が南西側にしか堆積していないこと、直上がＴｏ－ａであることから、南西側１ｍにある第５号竪穴住居跡を構築した際の排土である可能性がある。

［遺物］　床面から、土師器坏片1点、小型甕1点、甕片１点、球胴甕片３点、台石１点が出土した。全てＱ１及びＱ４のもので、№60の小型甕は左袖部からの出土である。この他、カマド燃焼部から獣骨１点が、煙道部底面からは炭化したクルミの種子が１点出土している。獣骨は、鑑定の結果クマの指である可能性が高いということであった。また、覆土Ｔｏ－ａより下位からは土師器坏片３点、甕片３点、砥石１点、小円礫

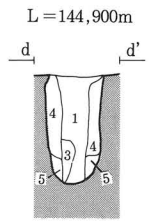
1点、二次調整のない剝片1点が出土している。

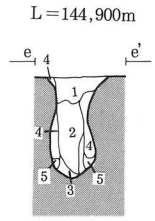




第6号竪穴住居跡

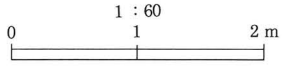
1. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり弱 耕作土。基本層序の第Ⅰ層。
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 基本層序の第Ⅱ層。
3. 10YR8/2 灰白色 火山灰 粘性微弱 しまり中 To−a層。
4. 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり中 褐色土ブロック及び砕けたTo−Nb中量混入。
5. 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中 To−Nb微量混入。
6. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性強 しまり中 To−Nb微量混入。
7. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり中
8. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり強 To−Nb少量混入。
9. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 To−Nb少量混入。
10. 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 To−Cuブロック状に混入。
11. 10YR4/4 褐色 粘土 粘性中 しまり強 第Ⅳ層と黒褐色土の混土。砕けたTo−Nb（1～5㎜）少量混入。貼り床構築土。
12. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性弱 しまり中 黒褐色土ブロック及び砕けたTo−Nb（1～3㎜）微量混入。貼り床構築土。
13. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 しまり強 黒色土との混土。To−Nbが多量に混入。貼り床構築土。



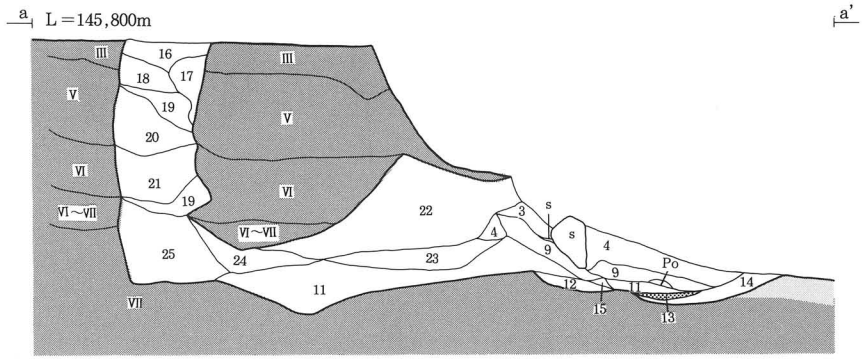


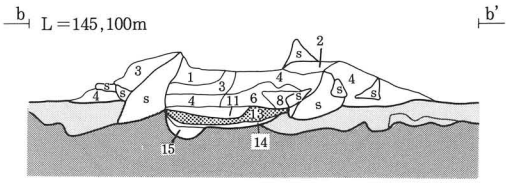
第6号竪穴住居跡柱穴

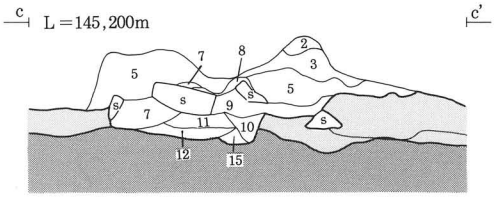
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり中 To−Nbが少量混入。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中 しまり微弱 褐色土との混土。
3. 10YR6/8 明褐色 シルト 粘性強 しまり中
4. 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性強 しまり極強 To−Nbが微量混入。
5. 10YR7/6 明褐色 粘土 粘性強 しまり強

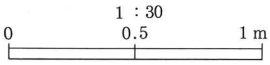


第27図 第6号竪穴住居跡(1)



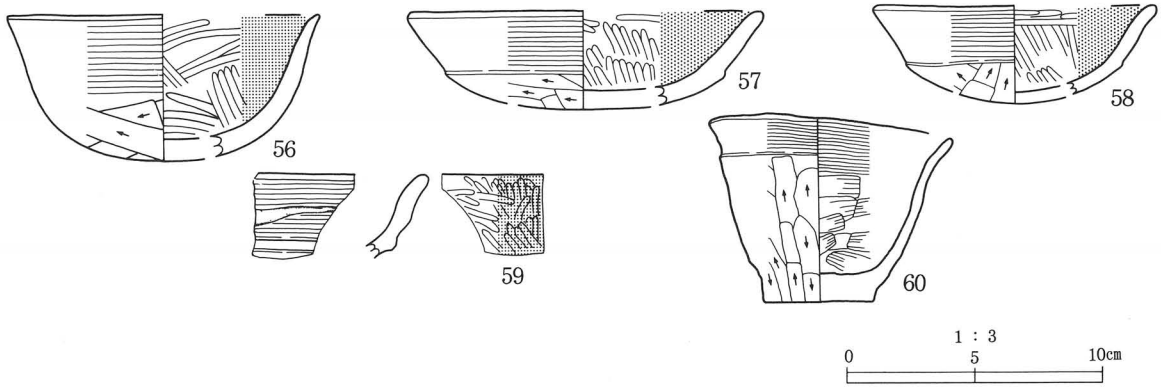






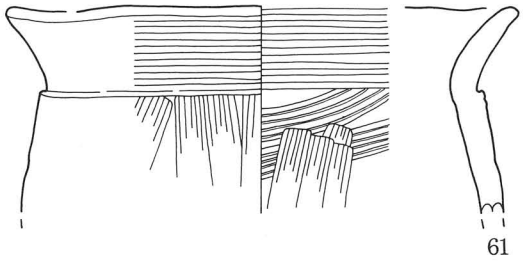
第６号竪穴住居跡カマド

1. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり中　To−Cu少量混入。
2. 10YR7/1　灰白色　粘土　粘性強 しまり強　天井部崩落土。
3. 2.5YR5/3 黄褐色　粘土　粘性強 しまり強　明褐色土粘質土が斑紋状に少量混入。カマド構築土。
4. 10YR3.5/2 黒褐～灰黄褐色　粘土　粘性強 しまり強　小粒のTo−Nb、焼土粒、炭化物粒混入。カマド構築土。
5. 10YR6/3　にぶい黄橙色　粘土　粘性強 しまり強　カマド構築土。
6. 10YR5/6　黄褐色　粘土質　粘性強 しまり強　にぶい黄褐色粘土との混土。カマド構築土。
7. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　炭化物粒、To−Cu少量混入。獣骨出土。
8. 5YR3/2　暗赤褐色　粘土質シルト　粘性中 しまり強　被熱している。カマド構築土。
9. 7.5YR3/3　暗褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　炭化物粒、To−Nb少量混入。
10. 2.5YR3/3　暗オリーブ褐色　シルト　粘性弱 しまり中　炭化物粒、To−Cu微量混入。
11. 7.5YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中 しまり弱　炭化物粒、被熱したTo−Nb微量混入。
12. 10YR3/3 暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　小粒のTo−Nb少量混入。
13. 5YR5/8　明赤褐色　シルト　粘性微弱 しまり中　焼土層。
14. 7.5YR1.7/1 黒色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　被熱したTo−Nb微量混入。
15. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　小粒のTo−Nb中量混入。
16. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性弱 しまり強　To−Cu少量混入。
17. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　炭化物粒、To−Cu微量混入。
18. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり弱　炭化物粒、To−Cu微量混入。
19. 7.5YR4/4 褐色　シルト　粘性中 しまり中　10～30㎜の炭化物少量混入。
20. 7.5YR3/2 黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　焼土粒、To−Cu微量混入。
21. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　焼土粒、10～30㎜の炭化物、To−Cu微量混入。
22. 10YR1.85/1 黒色　シルト　粘性微弱 しまり弱　焼土粒、被熱したTo−Cu及びTo−Nb中量混入。煙道上面の崩落土。
23. 2.5YR6/3 にぶい黄色　火山灰　粘性中 しまり強　To−aの水成堆積。
24. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　混入物は第22層と同様だが、焼土粒及びTo−Nb少ない。
25. 10YR2/1　黒色　シルト　粘性微弱 しまり弱　焼土粒多量、被熱したTo−Nb微量混入。

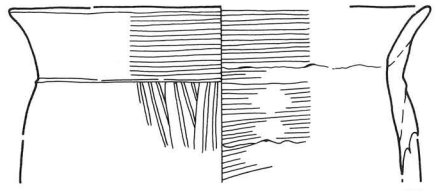


No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
56	Q１床面	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ケズリ	〔口～底〕ミガキ	(12.3)		(5.8)	内面黒色処理
57	覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ケズリ	〔口～底〕ミガキ	(14.0)		(3.9)	内面黒色処理
58	覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ケズリ	〔口～底〕ミガキ	(11.0)		(3.9)	内面黒色処理
59	覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ	〔口〕ミガキ	(13.2)		−3.3	内面黒色処理
60	カマド左袖	土師器	小型甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ→ケズリ〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体～底〕ナデ	9.5	4.3	7.6	

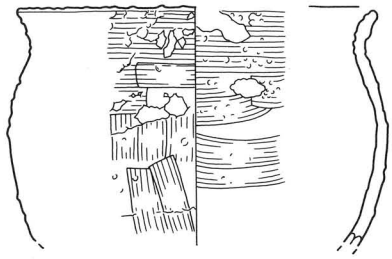
第28図　第６号竪穴住居跡(2)



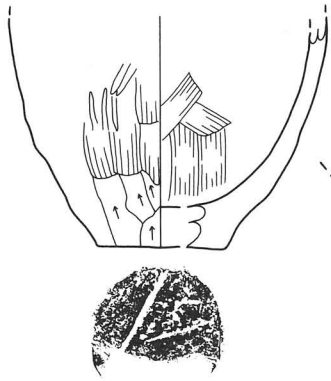
61



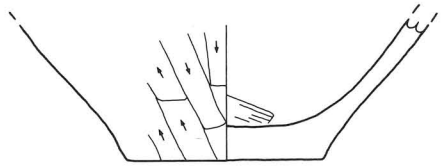
62



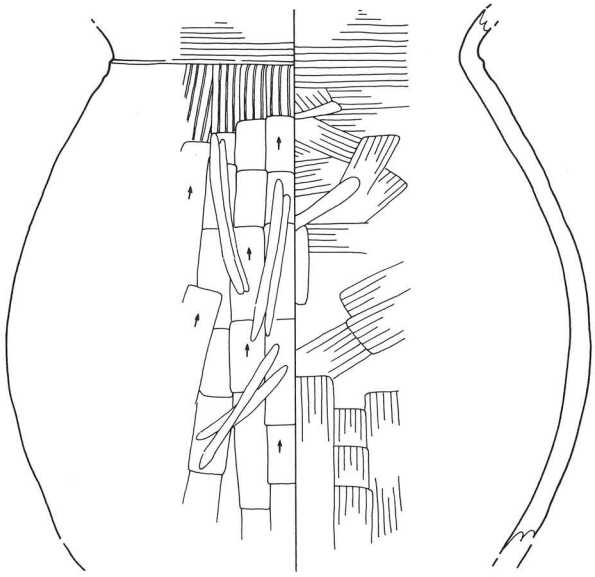
63



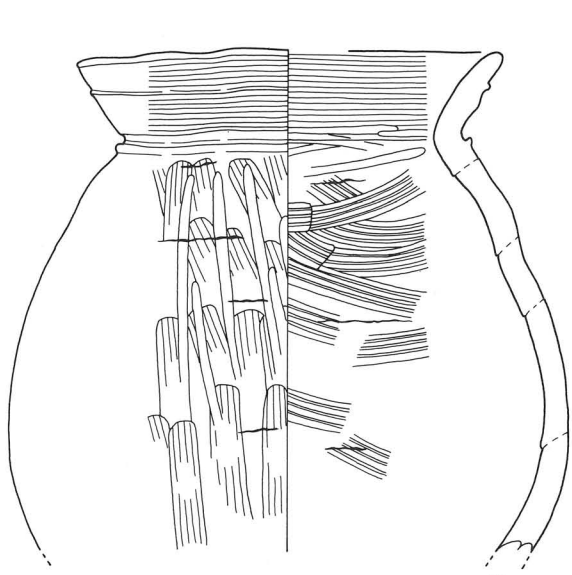
64



68



66



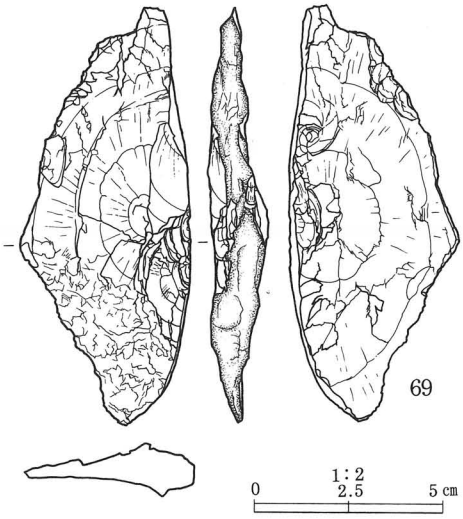
65

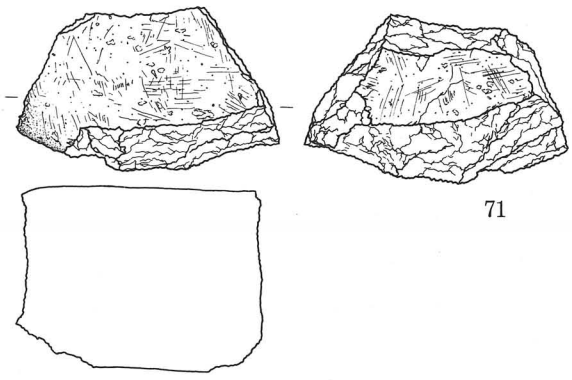
1 : 3

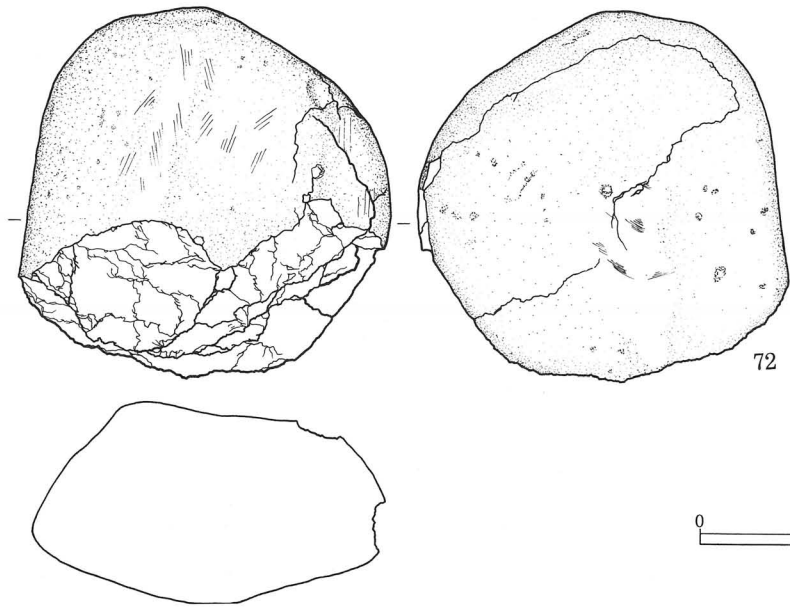
0 5 10cm

No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量（cm）			その他
						口径	底径	器高	
61	Q１覆土	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ケズリ	(20.0)		−8.3	
62	覆土下位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	16.4		−6.9	
63	Q４覆土下位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(14.0)		−9.2	被熱による焼け弾け多数
64	Q４覆土下位 Q１床面	土師器	甕	〔体〕ケズリ→ナデ→ミガキ	〔体～底〕ナデ		(5.2)	−9.1	底部木葉痕有り
65	Q４床面	土師器	甕	〔体〕ヨコナデ 〔体〕ナデ→一部ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ	16.6		−19.7	
66	Q１床面	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ→ ケズリ→ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ナデ→ミガキ			−21.5	
67	覆土下位他	土師器	甕	〔口〕ナデ	〔体〕ハケメ→ナデ			−11.5	写真のみ掲載
68	Q１床面	土師器	甕	〔体～底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ		7.8	−6.4	

第29図　第６号竪穴住居跡(3)







1：2
0 2.5 5 cm

1：3
0 5 10cm

No.	出土地点	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	産地	備考
69	覆土下位	剝片	珪質頁岩	10.3	4.5	1.5	48.55	完形	北上山地	明瞭な調整痕なし
70	覆土中位	小円礫	安山岩	3.4	3.3	—	23.92	完形	奥羽山脈	一部に敲打痕有 写真のみ掲載
71	覆土中位	台石	花崗岩	5.6	9.5	7.2	624.39	2/3以上欠損	北上山地	表裏面とも平坦
72	床面中央	台石	安山岩	13.6	13.3	7.9	2017.62	完形	奥羽山脈	表面摩滅

No.	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	備考
55	カマド煙道部	炭化種子	2.1	1.4	0.6	0.61	破片	クルミ　写真のみ掲載
73	カマド燃焼部	獣骨	3.8	1.1	0.8	2.68	1/2欠損	指関節部分　クマの可能性高い　写真のみ掲載

第30図　第６号竪穴住居跡(4)

第７号竪穴住居跡　（第31～34図、写真図版14～15・27～28）

［位置・検出状況］　Ｙ－７グリッド付近に位置する。南東壁の大半が調査区外にはみ出しており、この部分については未調査のため不明である。検出面は第Ⅱ層中位で、Ｔｏ－ａの略楕円形状の広がりによって確認した。同面におけるこの付近の地形は南東方向に４°程の下り傾斜を持つ。なお、本遺構の南西側約２ｍには第１号竪穴住居跡が、南側約４ｍには第１号竪穴住居状遺構がある。

［規模・平面形・方位］　規模は、北西壁490㎝、南西壁525㎝を測る。南東側が未発掘のため北東壁、南東壁の長さは不明であるが、おそらく平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向はＮ－52°－Ｗである。

［壁・床面］　第２号竪穴住居跡と同様に壁面が中位から棚状に張り出すタイプである。各壁中央部における床面からの壁高残存値（床面～張り出し開始部分・張り出し開始部分～検出面）は、北西壁102㎝（54㎝・48㎝）、北東壁89㎝（52㎝・37㎝）、南西壁68㎝（46㎝・22㎝）を測り、床面～張り出し開始部分は各壁とも床面に対して110°前後の角度で立ち上がる。また、張り出し部の幅は50～80㎝を測る。

住居構築時の掘り込みは第Ⅵ層まで行われている。その上部にＴｏ－Ｃｕ及びＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土を主体とした貼り床がほぼ全面に施されており、最厚部で20㎝を測る。凹凸は殆ど無いが、若干北東部が低くなっている。同面は全体的に堅緻である。

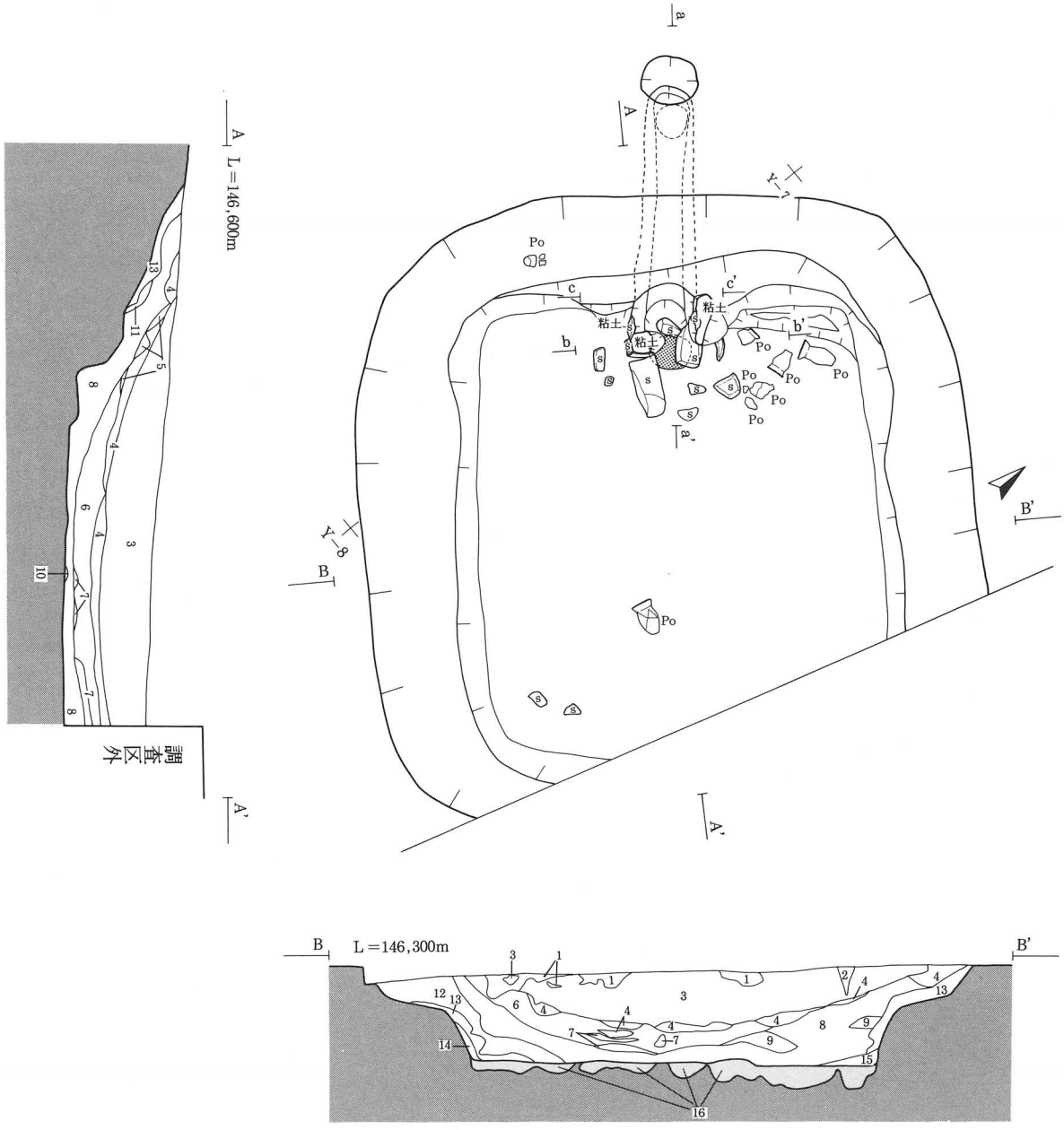
［カマド］　北西壁の中央部に構築されている。残存状態は比較的良好である。本遺構でも芯材には加工した凝灰岩が使用されており、その周囲に黄色粘土を貼り付けて本体を構築している。天井部も若干残存しており、火床面の40㎝弱上方に厚さ10㎝程度の黄色粘土が見られる。芯材周辺には掘り方が見られず、貼り床に密着していることから、やはり貼り床構築と同時に設置したものと考えられる。また、燃焼部奥や手前には同種の凝灰岩が数点散らばっており、左袖部前から出土したものは51×23㎝・厚さ10㎝弱と大形で、第３号竪穴住居跡に残っていた天井石に相当する物の可能性がある。燃焼部は床面より若干窪んでおり、径30×36㎝・最大厚８㎝の明褐色焼土が形成されている。本焼土の混入物が貼り床構築土のものと同一であることから、床面構築時の面をそのまま使用していたものと思われる。煙道部は刳り貫き式で、その底面は最初緩やかに下り、煙出し孔直下手前で上り勾配に変わる。煙道長は、内側壁面からで162㎝、張り出し部壁面からでは70㎝を測る。煙出し孔は径40×50㎝の楕円形で、検出面からの深さは121㎝である。

なお、焚口付近から炭化材が良好な状態で出土したことから、この樹種同定分析を行った。詳細はⅥの自然科学的分析に記してある。

［柱穴・ピット］　柱穴及びピットは検出されなかったが、北西壁右側から壁溝状の窪みが検出された。幅25㎝前後で深さ10㎝程度である。

［覆土］　15層に分層された。全て自然堆積と考えられる。下位から大別して、Ｔｏ－Ｃｕ及びＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土、Ｔｏ－ａを斑に含む黒色土、ラミナの顕著なＴｏ－ａの順に堆積している。第２号及び第４号竪穴住居跡と同様に、厚いＴｏ－ａ（第３層）の下層にＴｏ－ａを斑状に含む層（第４・６層）が存在する。第４及び第６層は住居跡内平坦部で25㎝程度堆積している。

［遺物］　カマド寄りの床面及び床面直上から土師器坏２点・坏片２点、長胴甕３点・甕片３点が出土した。また、北西壁左側の棚状張り出し部からは土師器甕１点及び甕片５点が出土し、後者は床面・床面直上出土の同破片と接合している。覆土Ｔｏ－ａより下層からは土師器甕１点、球胴甕１点、小円礫１点等が出土した。この他図示していないが、覆土中から土師器片が多量に出土している。

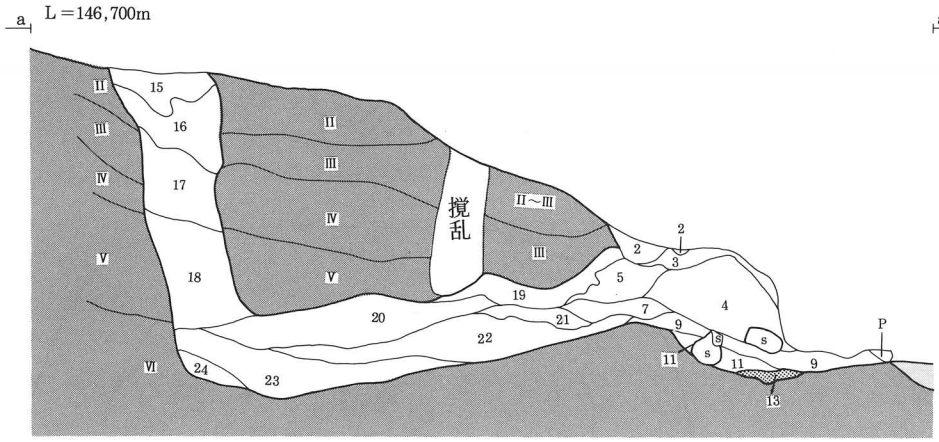


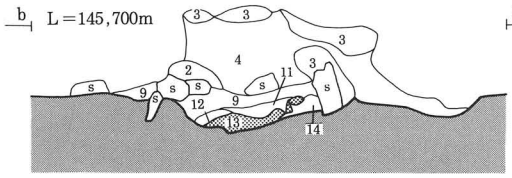
第７号竪穴住居跡

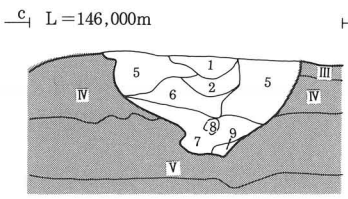
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　灰黄褐色火山灰（To－a）との混土。
2．2.5YR6/4 にぶい黄色　火山灰　粘性弱 しまり中　黒黄褐色土少量混入。
3．10YR8/2　灰白色　火山灰　粘性中 しまり強　To－aの水成堆積層。灰黄色シルト、浅黄褐色砂、にぶい黄褐色粘土が交互に堆積。
4．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中 しまり弱　To－aが中量、To－Cuが微量混入。To－aは斑紋状を呈す。
5．10YR2/1.5 黒～黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱
6．8.75YR1.7/1 黒色　シルト　粘性中 しまり弱　To－a、To－Cuが少量混入。To－aは斑紋状を呈す。
7．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中 しまり弱　To－a、To－Cu微量混入。
8．7.5YR2/2 黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱
9．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu中量、To－Nb微量混入。
10．2.5YR6/8 明黄褐色　軽石　粘性無 しまり微弱　To－Cu層。
11．10YR2/1　黒色　シルト　粘性中 しまり弱　To－Cu微量混入。
12．7.5YR2/1 黒色　シルト　粘性弱 しまり強　To－Cu少量混入。
13．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu少量、To－Nb微量混入。
14．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To－Cu中量混入。
15．7.5YR2/1 黒色　シルト　粘性中 しまり強　To－Nb微量混入。
16．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり強　１～５㎝の黄褐色土ブロック少量、To－Cuブロック多量混入。貼り床。

1：60
0　1　2 m

第31図　第７号竪穴住居跡(1)



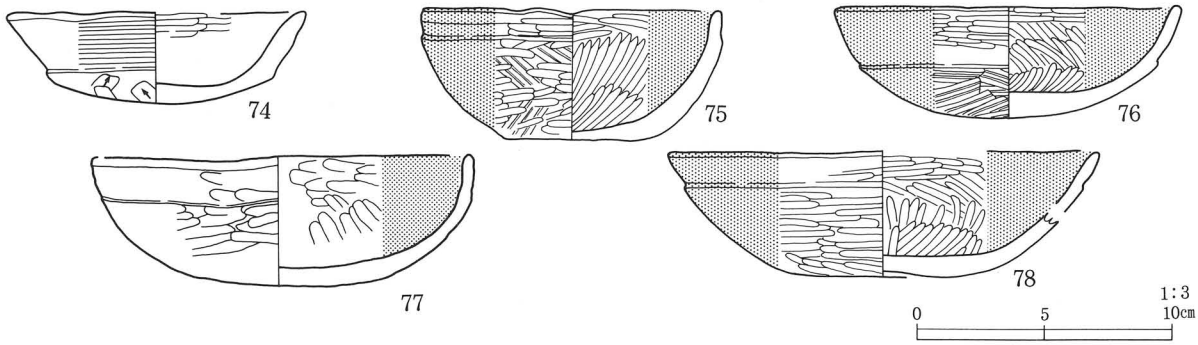




第７号竪穴住居跡カマド

1. 10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－b微量混入。
2. 10YR1.7/1 黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　黄色粘土質との混土。
3. 2.5YR7/8 黄色　粘土　粘性強 しまり強
4. 10YR1.85/8 黒色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－b、To－Cu少量混入。
5. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－b微量、To－Cu少量混入。
6. 10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu微量混入。
7. 10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu少量混入。
8. 2.5YR7/6　明黄褐色　粘土　粘性強 しまり強
9. 10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　にぶい黄色粘土ブロック微量、及びTo－Cu少量混入。
10. 7.5YR3/3 暗褐色　シルト　粘性中 しまり弱　赤色焼土粒、被熱したTo－Cu少量混入。
11. 7.5YR4/6 褐色　シルト　粘性中 しまり弱　炭化物粒少量、To－Cu中量混入。
12. 10YR6/3　にぶい黄橙色　シルト　粘性弱 しまり微弱　被熱層。
13. 7.5YR5/8 明褐色　シルト　粘性無 しまり中　To－Cu中量混入。焼土。
14. 10YR1.7/8 黒色　シルト　粘性無 しまり強　小粒のTo－Nb少量混入。
15. 10YR6/6　明黄褐色　粘土　粘性強 しまり強　焼土粒、炭化物粒少量混入。
16. 10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　焼土粒微量、To－b少量混入。
17. 10YR3/3　暗褐色　粘土　粘性強 しまり強　焼土粒微量、明黄褐色粘質ブロックが少量混入。

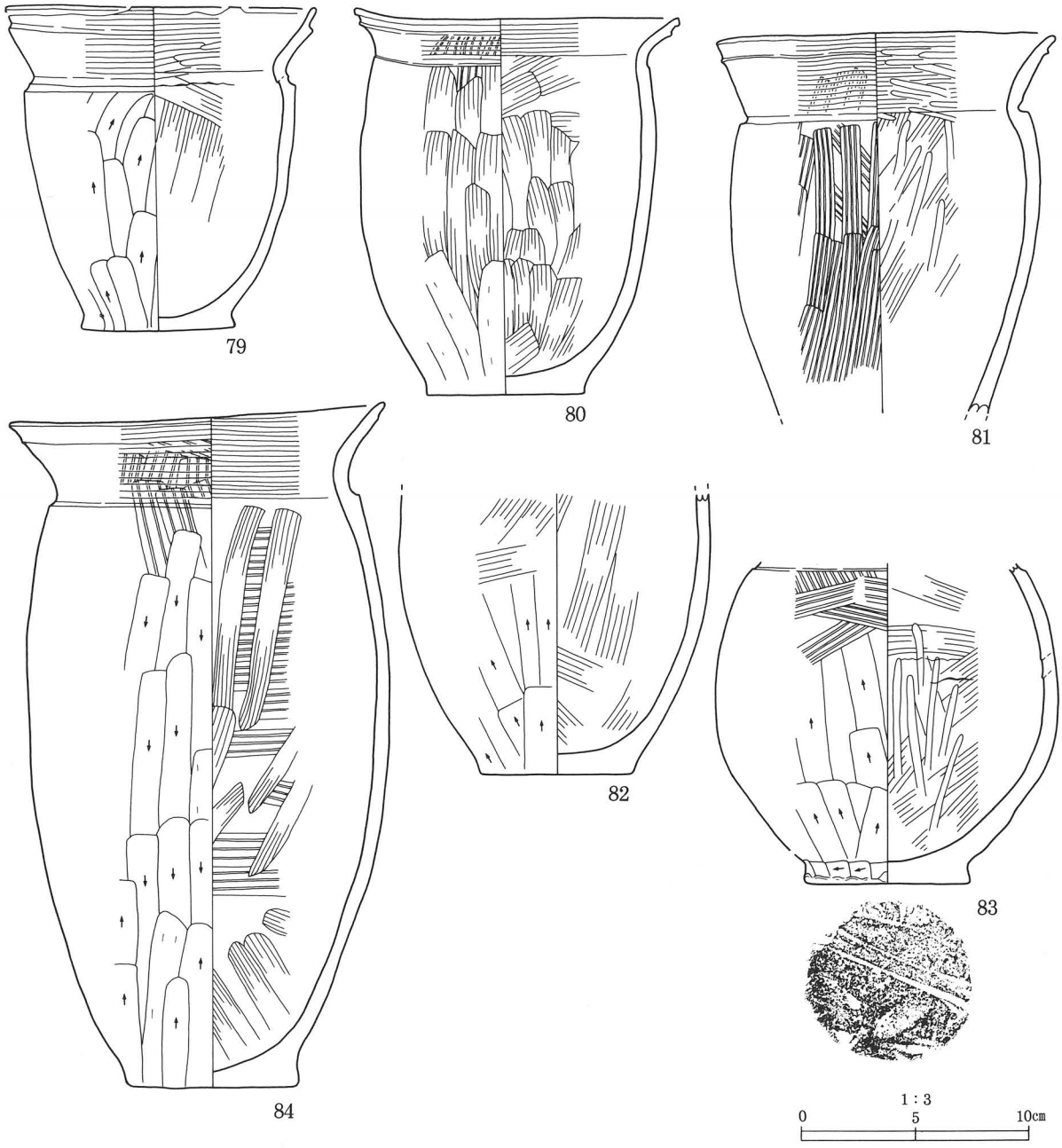
1：30
0　0.5　1m



1:3
0　5　10cm

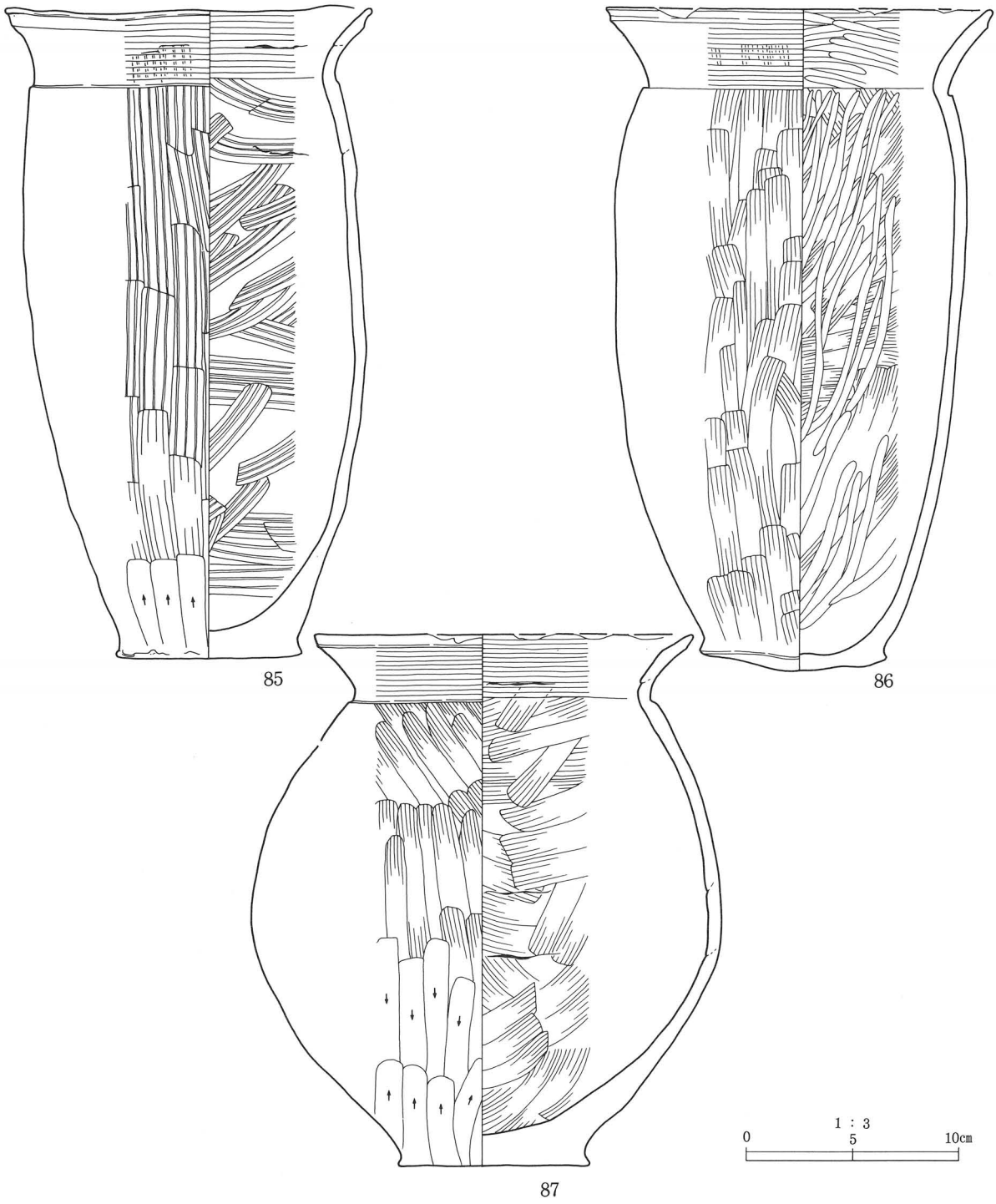
No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
74	Q１床面	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ？ 〔体〕ミガキ	(11.8)		3.6	内面黒色処理？ ミガキごく弱い
75	カマド右袖前	土師器	坏	〔口〕ミガキ 〔体〕ハケメ→ミガキ	〔口～体〕ミガキ	11.8	5.6	5.2	内面黒色処理
76	Q１床面壁際	土師器	坏	〔口〕ミガキ 〔体～底〕ハケメ	〔口～底〕ミガキ	13.6		(4.5)	内面黒色処理
77	Q１・Q４ 覆土下位	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ→ミガキ 〔体〕ミガキ〔底〕ケズリ	〔口～底〕ミガキ	(15.0)		(5.2)	内面黒色処理
78	Q１床面直上	土師器	坏	〔口～底〕ミガキ	〔口～底〕ミガキ	(16.8)	6.0	(4.9)	内外面黒色処理

第32図　第７号竪穴住居跡(2)



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
79	Q４張り出し他	土師器	小形甕	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ？ 〔体～底〕ナデ	13.7	6.8	14.4	
80	Q１覆土下位	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ナデ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ナデ	14.4	7.0	17.1	
81	Q１床面直上壁際 Q４張り出し	土師器	甕	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕→ミガキ	14.9		−17.0	
82	Q４張り出し Q４床面他	土師器	甕	〔口〕ナデ→ケズリ 〔底〕ケズリ	〔体～底〕ナデ		6.7	−12.5	
83	Q１床面	土師器	甕	〔体〕ケズリ→ハケメ 〔底〕ケズリ	〔体〕ナデ→ミガキ		7.1	−14.3	
84	カマド	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ	〔口〕ヨコナデ	16.6	7.4	35.0	

第33図　第７号竪穴住居跡(3)



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
85	Q4床面直上	土師器	小形甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ナデ→ケズリ 〔底〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ	17.1	8.7	30.6	
86	Q1床面直上壁際	土師器	甕	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体〕ナデ	〔口〕ミガキ 〔体〕ナデ→ミガキ	18.1	8.7	31.4	
87	Q1・Q4覆土中位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ナデ→ケズリ	〔口〕ナデ→ヨコナデ 〔体〕ナデ→一部ミガキ	17.7	10.0	25.3	

No.	出土地点	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	産地	備考
88	覆土	小円礫	安山岩	3.1	2.2	—	25.89	完形	奥羽山脈	写真のみ記載

第34図　第7号竪穴住居跡(4)

(2) 竪穴住居状遺構

第１号竪穴住居状遺構（第35図、写真図版15・28）

［位置・検出状況］　Ｙ－８～９グリッド付近に位置する。南東側の一部が調査区外にあたっており、この部分についての詳細は不明である。また、本遺構付近からは広範囲にわたって重機による攪乱を受けた痕跡が確認されており、遺構の大半が削られていた。残存していたのは床面から３㎝上程度までである。本来の遺構構築開始面は、調査区境界に設定した断面から推定して第Ⅱ層中位～下位であったと考えられる。本遺構付近における同層は南東方向に３～５°傾斜している。なお、本遺構の北西側約２ｍに第１号竪穴住居跡が、北側約４ｍには第７号竪穴住居跡がある。

［規模・平面形］　残存部から推定して、平面形は隅丸方形であったと考えられる。北西壁の床面長はおよそ170㎝である。

［壁・床面］　断面の観察から、壁高は約50㎝程度あったものと思われる。壁面は外傾している。

住居構築時の掘り込みは第Ⅲ層下位～第Ⅳ層上位まで行われており、その上部にＴｏ－Ｃｕを含む暗褐色土によって厚さ２～22㎝の貼り床が部分的に構築されている。

［柱穴・ピット］　検出されなかった。

［覆土］　５層に分層された。大別して、黒褐色土、Ｔｏ－ａをブロック状に含む黒褐色土、ラミナの顕著なＴｏ－ａ、黒褐色土の順に堆積している。上部の攪乱以外は全て自然堆積と考えられる。

［遺物］　床面から土師器甕片２点、球胴甕片１点が出土した。内、甕片１点と球胴甕片１点は第２号竪穴住居跡出土遺物と接合している（第16・19図、写真図版22・23のNo.15・38）。その他は覆土中から土師器片が数点見られたのみである。

第２号竪穴住居状遺構（第35～36図、写真図版16・28）

［位置・検出状況］　Ｓ－９～10グリッドに位置する。検出面は第Ⅱ層上位で、Ｔｏ－ａの環状の広がりによって確認した。同面における本遺構周辺の地形は南東方向に約10°傾斜している。なお、本遺構の南西側約８ｍに第１号土坑が、南側約10ｍには第５号土坑がある。

［規模・平面形］　検出面における平面形は楕円形に近い隅丸方形で、床面は隅丸方形を呈する。北西壁380㎝、北東壁350㎝、南東壁385㎝、南西壁375㎝を測り、床面積は3.82㎡である。

［壁・床面］　各壁中央部における床面からの壁高残存値は、北西壁145㎝、北東壁100㎝、南東壁74㎝、南西壁102㎝である。各壁とも、床面から10～20㎝程度までは床面に対してほぼ垂直に近い角度で立ち上がるが、それより上位は外傾している。特に南東壁が顕著である。

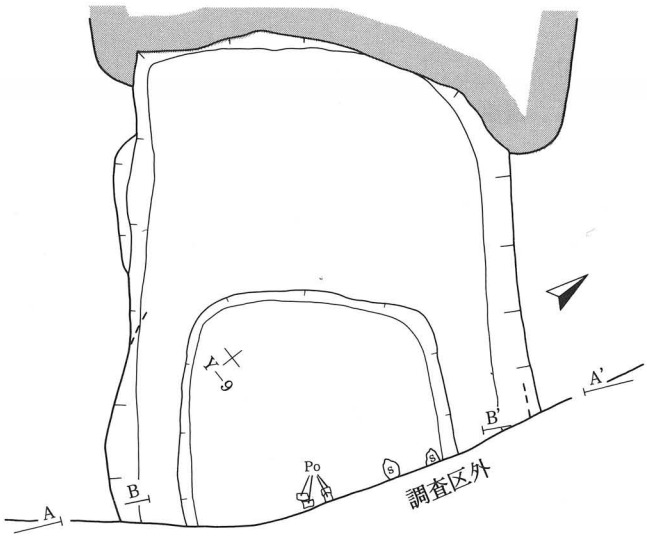
住居構築時の掘り込みは第Ⅴ層上位まで行われており、その上部に第Ⅴ層やＴｏ－Ｃｕを含む暗褐色土を使用して貼り床を構築している。貼り床はほぼ全面に施されており、厚さは５～15㎝を測る。同面は全体的に堅緻である。

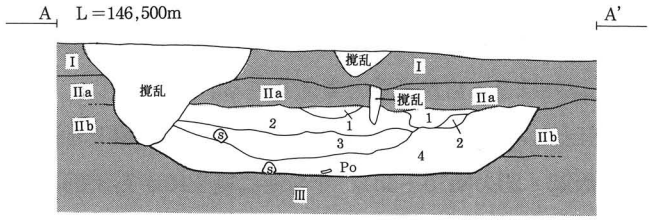
［柱穴・ピット］　壁面上位の北隅・南隅・西隅から計３個検出した。３個とも外側下方へ向かって斜めに入っており、開口部は16×20㎝程度の楕円形を呈し、深さは27～37㎝である。

［覆土］　10層に分層された。大別して、Ｔｏ－Ｃｕ及びＴｏ－Ｎｂを含む黒褐色土、Ｔｏ－Ｃｕを含む黒褐色土及び暗褐色土、Ｔｏ－ａをモヤ状及びブロック状に含む黒褐色土、ラミナの顕著なＴｏ－ａ、Ｔｏ－ａを少量含む褐灰色土の順に堆積している。全て自然堆積と考えられる。

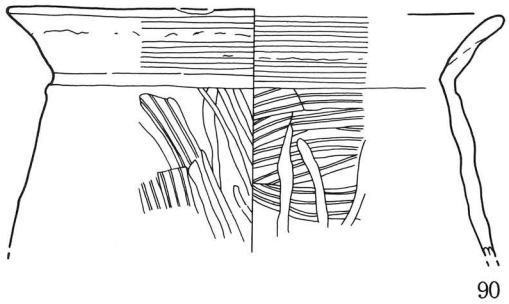
［遺物］　床面から土師器甕の底部片が1点出土している。これ以外には、覆土下位から長胴甕片が１点出

第１号竪穴住居跡

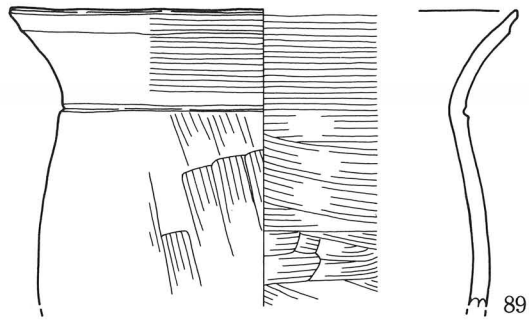




第１号竪穴住居状遺構
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
2．2.5YR3/2 黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱
3．10YR3/2　灰白色　火山灰　粘性微弱 しまり中　To−aの水成堆積層。
4．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−aブロックが中量混入。
5．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱



90

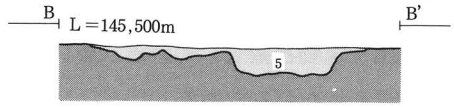


89

1:3
0　5　10cm

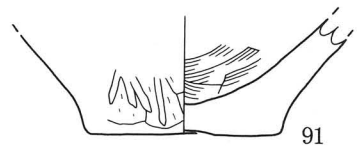
No.	出土地点	種類	器種	外面調整
89	床面	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ

内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	(20.0)		−11.8	



第１号竪穴住居状遺構貼り床
1．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cuブロックが中量混入。

1：60
0　1　2 m

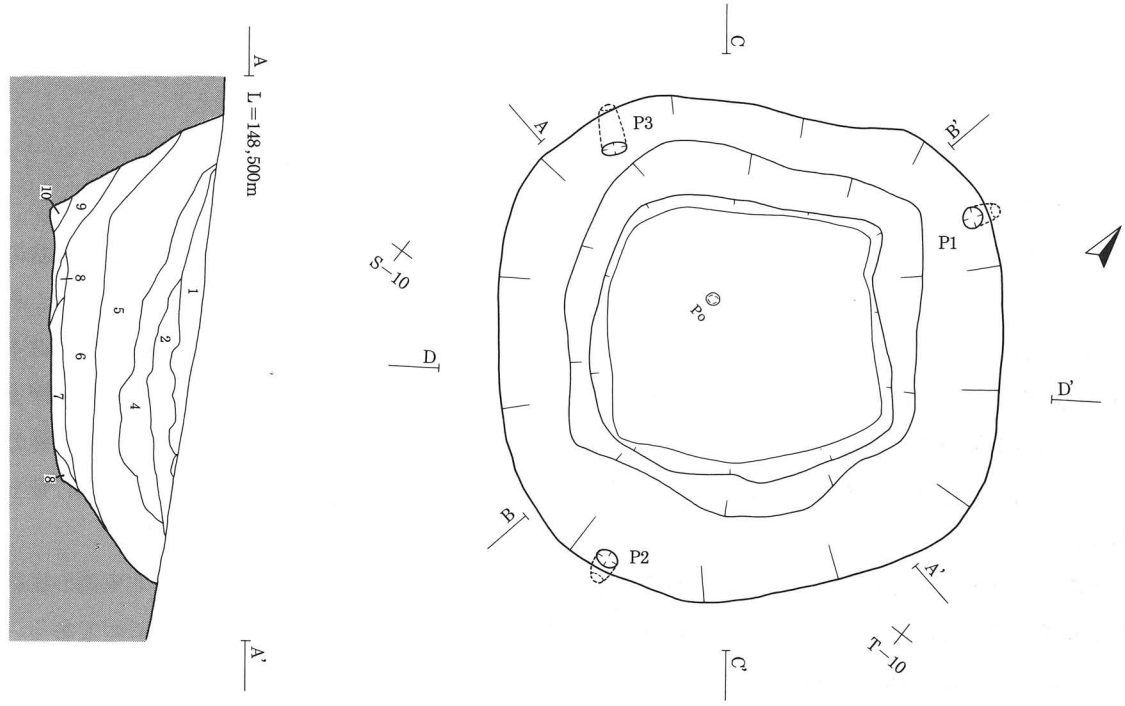


91

1：3
0　5　10cm

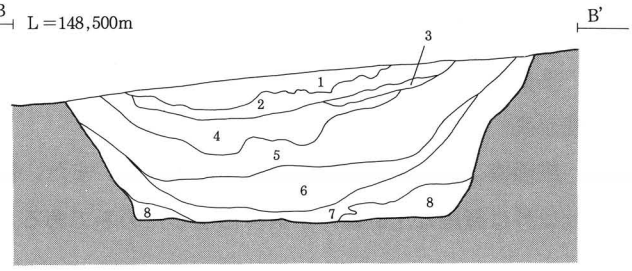
No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
90	覆土下位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ→一部ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔体〕ハケメ→ミガキ	(19.6)		−9.6	
91	床面	土師器	甕	〔体〜底〕ケズリ→ミガキ	〔体〜底〕ナデ		7.8	−4.6	

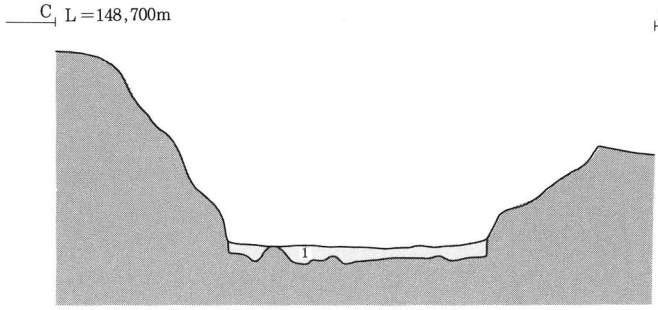
第35図　第１号竪穴住居状遺構・第２号竪穴住居状遺構(1)



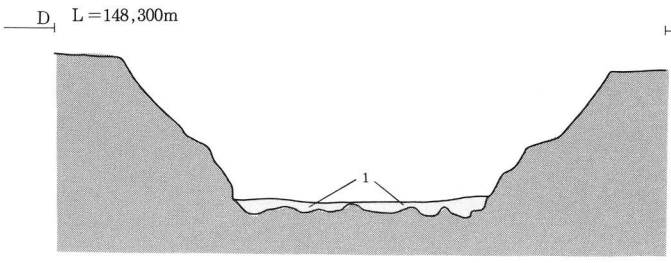
第２号竪穴住居状遺構　ピット観察表

No.	径(cm)	深さ(cm)	覆土
P1	19×17	28	7.5YR1.85/1.5　黒色　シルト　粘性微弱 しまり無　To−b少量混入。フワフワ。
P2	16×18	27	上部５cm…10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱 下部…7.5YR1.85/1.5　黒色　シルト　粘性微弱 しまり無　To−b少量混入。フワフワ。
P3	18×20	37	7.5YR1.85/1.5　黒色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cu少量混入。





第２号竪穴住居状遺構
1．10YR5/1　褐灰色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−aとの混土。To−Cuが微量混入。
2．10YR8/2　灰白色　火山灰　粘性微弱 しまり弱　To−aの水成堆積層。第１層が少量混入。
3．10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−aとの混土。
4．10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが微量混入。フワフワで柔らかい。
5．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが微量混入。
6．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが微量混入。
7．7.5YR2/1 黒色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cu及びTo−Nbが微量混入。
8．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cuが多量、To−Nbが微量混入。
9．7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが微量混入。
10．7.5YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中 しまり中　To−Nbが中量混入。



第２号竪穴住居状遺構貼り床
1．10YR2/1　黒色　シルト　粘性弱 しまり強　暗褐色土との混土。To−Cu及びTo−Nbが少量混入。基本層序の第Ⅳ・Ⅴ層の混土と思われる。

1：60
0　1　2 m

第36図　第２号竪穴住居状遺構(2)

土したのみである。

第３号竪穴住居状遺構（第37図、写真図版16・29）

［位置・検出状況］　W～X－10グリッドに位置する。検出面は第Ⅲ層中位で、黒褐色土の楕円形状の広がりによって確認した。しかしこの後、W－10杭保護のため残しておいた土台の断面を再観察したところ、検出面より65㎝程度上位まで住居覆土状の堆積が続いていたことが判明した。そのため、第Ⅲ層中位は本遺構構築開始面ではなく、本来の開始面は65㎝前後上位の第Ⅱ層上位～中位であったと思われる。第Ⅱ層上位面における本遺構周辺の地形は南東方向に若干下っており、その傾斜角は約４°である。なお、本遺構の西側約２ｍに第５号土坑が、南側約2.5ｍに第２号土坑、同約4.5ｍに第４号土坑が、南西約５ｍに第1号土坑がある。

［規模・平面形］　検出面における平面形は隅丸方形で、各壁長共に215～220㎝を測る。北東側の住居構築開始面残存部から推定して、各壁長は255～280㎝程度あったものと思われる。床面積は3.21㎡である。

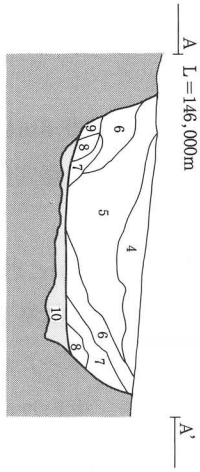
［壁・床面］　北東壁中央部における床面からの壁高残存値は125㎝である。他の３壁もこれに類似する値であったと思われる。各壁ともに110～120°の角度で外傾して立ち上がる。

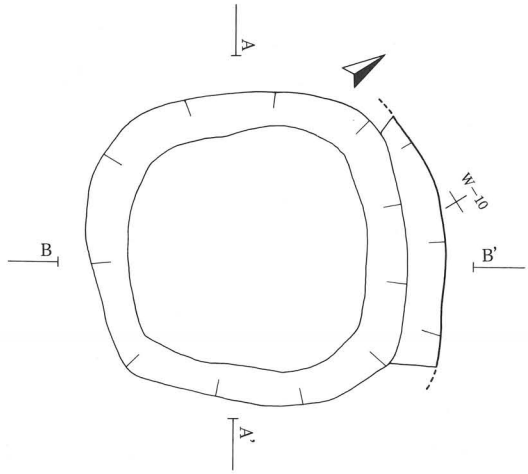
住居構築時の掘り込みは第Ⅴ層中位まで行われている。斜面上半部よりも下半部の方が深く、特に北東部が深い。その上部に第Ⅴ層やＴｏ－Ｃｕを含む黒褐色土を使用して貼り床を構築している。貼り床は全面に施されており、厚さは５～25㎝を測る。同面は全体的に堅緻である。

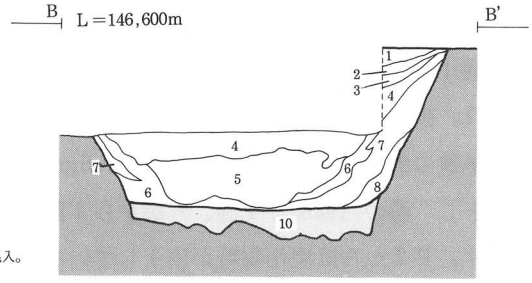
［柱穴・ピット］　検出されなかった。

［覆土］　９層に分層された。Ｔｏ－Ｎｂを含む黒～黒褐色土が主体である。第８及び９層は壁面崩落土である可能性が高い。全て自然堆積と考えられる。

［遺物］　床面直上から土師器坏片が１点出土した。また、覆土下位からは刀子１点、坏片１点が出土している。これ以外は微細な土師器片が数点出土したのみである。



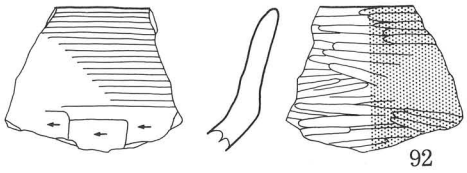


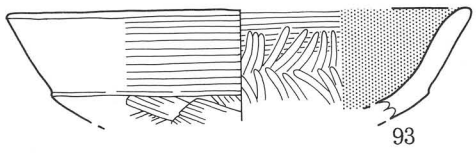


1：60
0 1 2m

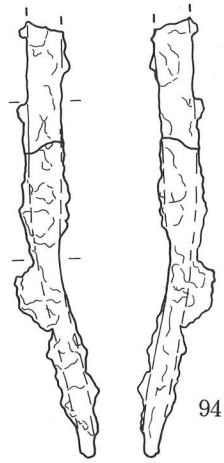
第３号竪穴住居状遺構

1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中 しまり強　To−aブロック及び焼土粒少量混入。
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中 しまり強　To−aが少量混入。
3．10YR8/2　灰白色　火山灰　粘性弱 しまり中　To−aの水成堆積層。
4．7.5YR2/2 黒褐色　シルト　粘性中 しまり強　To−Nbが少量混入。
5．7.5YR2/1 黒色　シルト　粘性中 しまり強　To−Nbが少量混入。
6．7.5YR3/2 黒褐色　シルト　粘性微弱 しまり微弱　To−Cuが多量、To−Nbが微量混入。
7．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中 しまり中　To−Nbが少量混入。
8．10YR4/4　褐色　シルト　粘性中 しまり中　To−Cuが少量混入。
9．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが多量混入。
10．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強 しまり中　To−Cu及びTo−Nbが少量混入。貼り床。





1：2
0 5 10cm



1：2
0 2.5 5cm

No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
92	床面直上	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ			−5.7	内面黒色処理
93	覆土	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ 〔体～底〕ヨコナデ	〔口～底〕ミガキ？	(18.4)		−4.4	内面黒色処理 器内面はナデのような ごく弱いミガキ

No.	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	状態	備考
94	覆土下位	刀子	11.6	0.9	0.5	10.36	一端一部欠損	

第37図　第３号竪穴住居状遺構

(3) 方形溝状遺構

第１号方形溝状遺構 （第38～39図、写真図版17・29）

［位置・検出状況］　Q～R－13グリッドを中心に存在する。検出面は第II層下位～第III層上位である。同面における本遺構付近の地形は、南東方向に約５°の下り傾斜となっている。

［重複］　南側の一部が第６号土坑と重複しているが、本遺構の方が古い。なお、南側約0.8mに第７号土坑、同約５mに第３号竪穴住居跡、東側約７mに第５号竪穴住居跡、南西側約10mに第２号竪穴住居跡がある。

［規模・形態］　外周はおおよそ「コ」の字状を呈する。検出当初は方形～台形状を呈するかと思われたが、北東側には南東側からの続きが1.6m検出されたのみで、他には検出されなかった。本遺構構築当時にこの部分が存在したかどうかは推測の域を出ない。但し、北東側には現代の耕作痕（トレンチャー）が顕著に入り、また検出面はTo－Cuが多量に混入している層であり非常に脆弱であることから、失われた可能性が考えられる。規模は、北西側約4.3m、南西側約８m前後、南東側約4.2m前後（南西側及び南東側は第６号土坑に切られているため推定）、幅20～40cm、深さは最深部で約20cmを測る。

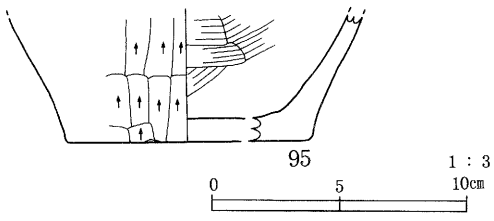
南東側及び南西側溝には、両溝とほぼ垂直な角度で内側に向かう溝がそれぞれ３ヶ所・２ヶ所構築されており、特に両溝中央部から構築されているものが長い。その長さは南東側のもので約4.3m、南西側のもので約２mを測り、後者の途中からはさらに南東方向へ約0.3m、北西方向へ約1.9mの溝が派生している。また、北側には単独の溝が２本存在し、両者とも1.5m程である。

［柱穴・ピット］　溝の内側から４個、外側から４個検出された。確実に柱穴となり得るものはない。Ｐ５からは土師器片、Ｐ７からは炭化物粒が出土している。

溝の底面からは、平均径約15×12cm・深さ６～10cmを測る小ピットが多数検出された。構築時の工具痕と思われる。大半が溝に対して直行方向に最大径をもっており、同方向に２個並列しているか、または鋸歯状に並んでいる部分が多い。中には若干広径のものもあり、柱穴が存在した可能性も考えられるが、その判別は非常に困難であり言及できない。

［覆土］　９層に大別された。下位に褐色系土、上部に黒褐色土が堆積している場合がほとんどである。上位は自然堆積であろうが、下位は不明である。

［遺物］　R－14グリッドから土師器甕の底部片が1点出土した。他に遺物は出土していない。



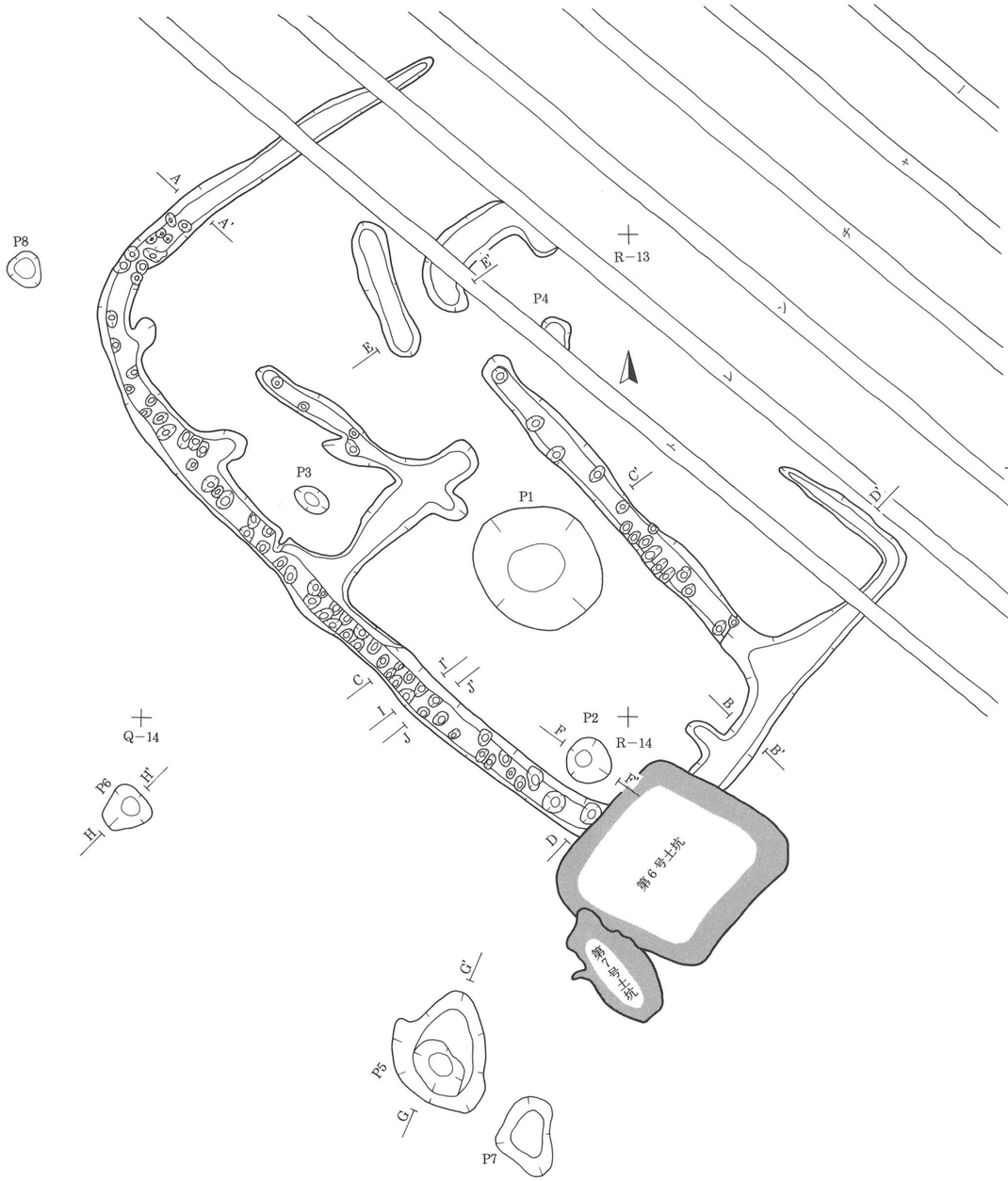
No.	出土地点	種類	器種	外面調整
95	R－14 II層下位～III層上位	土師器	甕	〔体～底〕ケズリ

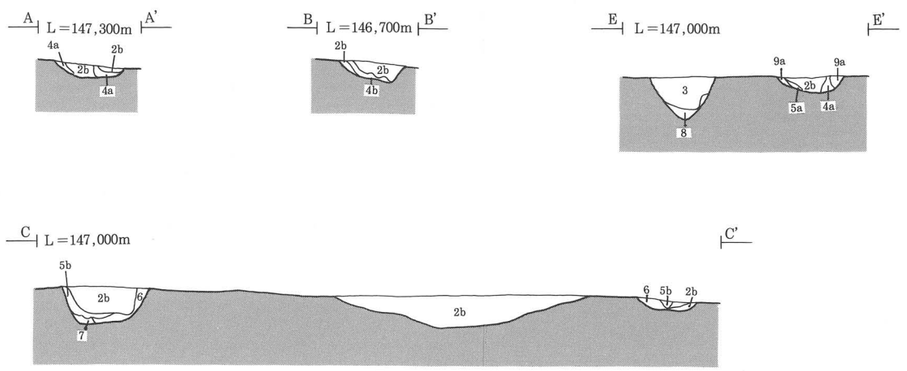
内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
〔体～底〕ナデ		(9.6)	(－5.0)	

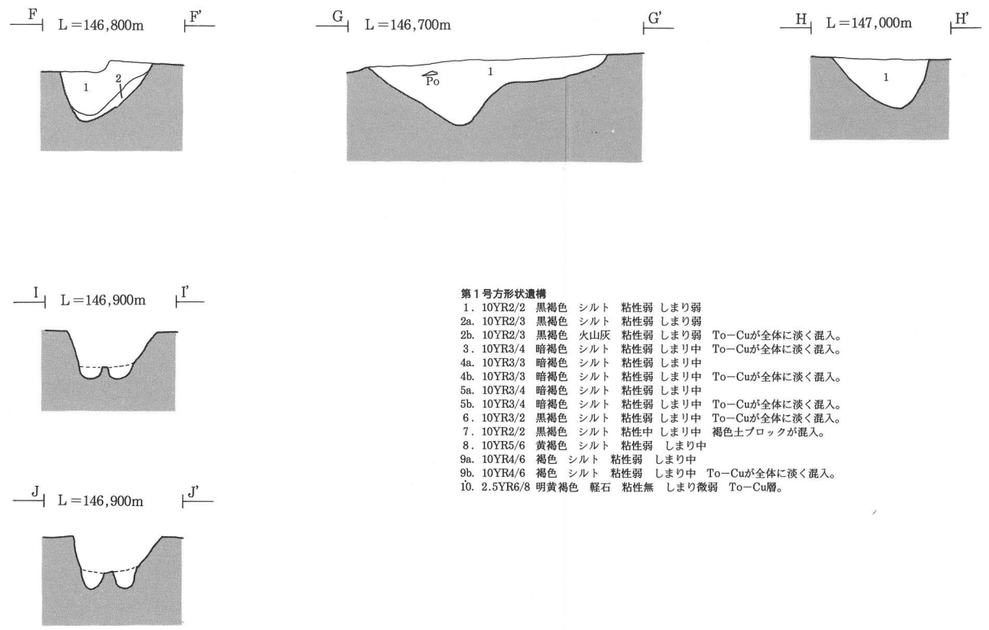
方形溝状遺構周辺ピット観察表

No.	径(cm)	深さ(cm)
P1	138×123	15
P2	45×45	30
P3	39×25	8
P4	40×0	5
P5	117×98	32
P6	48×47	24
P7	83×56	11
P8	37×34	7

第38図　第１号方形溝状遺構(1)







第1号方形状遺構

1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱
2a．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱
2b．10YR2/3　黒褐色　火山灰　粘性弱　しまり弱　To−Cuが全体に淡く混入。
3．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To−Cuが全体に淡く混入。
4a．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中
4b．10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To−Cuが全体に淡く混入。
5a．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中
5b．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To−Cuが全体に淡く混入。
6．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To−Cuが全体に淡く混入。
7．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　褐色土ブロックが混入。
8．10YR5/6　黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中
9a．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり中
9b．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱　しまり中　To−Cuが全体に淡く混入。
10．2.5YR6/8　明黄褐色　軽石　粘性無　しまり微弱　To−Cu層。

1：60
0　1　2m

1：30
0　0.5　1m

第39図　第1号方形溝状遺構(2)

(4) 土坑

第１号土坑（第40・41図、写真図版18・29）

［位置・検出状況］　Ｕ－10～11グリッドに位置する。検出面は第II層下位で、黒褐色土の楕円形状の広がりによって確認した。同面における南東方向への傾斜角は５～７°である。北東側約2.5mに第５号土坑、南東側約4.5mに第２号土坑、東側約５mに第３号竪穴住居状遺構がある。

［規模・平面形］　長軸230cm、短軸202cmの突辺隅丸台形である。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。壁高は北西壁が18cm、南東壁が７cmである。構築時の掘り込みは第Ⅳ層下位～第Ⅴ層上位まで行われており、床面は中央部が若干高くなっている他は概ね平坦である。深さは21cmを測る。

［覆土］　黒褐色土１層のみの堆積である。炭化物を微量含んでいる。

［遺物］　底面から土師器坏片１点、覆土中位から砥石１点が出土している。

第２号土坑（第40・41図、写真図版18・29）

［位置・検出状況・重複］　Ｖ～Ｗ－11グリッドに位置する。検出面は第II層上位で、斑状のＴｏ－ａと黒褐色土の半楕円形状の広がりによって確認した。南東部が調査区外まで続いているためこの部分については不明。検出面における南東方向への傾斜角は６～７°である。なお、本遺構下５～10cmからは第４号土坑が検出されている。また、北側約2.5mに第３号竪穴住居状遺構、南西側約４mに第６号竪穴住居跡がある。

［規模・平面形］　現状から推測して楕円形になるものと思われる。軸長は北東～南西で457cmである。

［壁・底面］　各壁ともやや外傾している。壁高は、北西壁が18cm、南東壁が７cmである。構築時の掘り込みは第II層下位まで行われており、南東部がより深い。これ以外の凹凸はほとんどなく、深さは北西部で25cm、南東部で38cmを測る。

［覆土］　４層に分層された。第３層は移地性の焼土で、遺構西部の第２層中位から検出された。この層位から、遺構構築後相当の時間が経過してから廃棄されたものと思われる。その他は自然堆積である。

［遺物］　覆土から土師器甕口縁部片１点・底部片１点、球胴甕胴部下半片１点が出土した。

第３号土坑（第40・42図、写真図版18・29）

［位置・検出状況］　Ｋ－19～20グリッドに位置する。検出面は第II層上位で、橙色焼土の環状の広がりによって確認した。同面における南東方向への傾斜角は５～７°である。南側約８mに第４号竪穴住居跡がある。

［規模・平面形］　長軸101cm、短軸78cmの楕円形である。

［壁・底面］　各壁ともやや外傾している。壁高はおよそ10～13cmである。構築時の掘り込みは第III層上位まで行われている。床面は椀状を呈し、深さは15cmを測る。

［覆土］　４層に分層された。検出時、橙色焼土が環状に確認されたことから焼土遺構になるかと思われたが、ブロック状・粒状に混入するのみであったため廃棄されたものと考えられる。焼土粒は全層に混入している。人為堆積と思われる。

［遺物］　微細な土師器破片が約50点出土した。全て被熱しており、焼け弾けた痕跡が認められる。

第４号土坑（第40・42図、写真図版18・29）

［位置・検出状況・重複］　Ｖ～Ｗ－11グリッドに位置する。検出面は第II層中位で、灰黄褐色土の楕円形状の広がりによって確認した。同面における南東方向への傾斜角は約２°である。なお、本遺構付近の第II層上位からは第２号土坑が検出されている。南西側約４ｍに第６号竪穴住居跡、北側約4.5ｍに第３号竪穴住居状遺構がある。

［規模・平面形］　長軸218㎝、短軸136㎝の長楕円形である。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。壁高はおよそ20～22㎝である。構築時の掘り込みは第III層中位まで行われており、床面は概ね平坦で、目立った凹凸はない。深さは25㎝を測る。

［覆土］　６層に分層された。全層ともＴｏ－Ｃｕが多く混入しており、ブロック状を呈する部分もある。不自然な混入の仕方であるため人為堆積の可能性がある。

［遺物］　覆土から土師器のミニチュア土器が１点出土した。

第５号土坑（第40・42図、写真図版19）

［位置・検出状況］　Ｕ～Ｖ－10グリッドに位置する。検出面は第II層中～下位で、黒褐色土の楕円形状の広がりによって確認した。同面における南東方向への傾斜角は３～４°である。なお、東側約２ｍに第３号竪穴住居状遺構、南西側約2.5ｍに第１号土坑がある。

［規模・平面形］　長軸243㎝、短軸220㎝の楕円形である。南半分はさらにもう一段階低くなっており、長楕円形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも外傾している。壁高は北西側で約10㎝、南東側で約35㎝である。構築時の掘り込みは第Ｖ層上位まで行われており、前記のように床面は南側が一段深くなっている。その他に目立った凹凸はないが、全般に南東方向へ傾斜している。深さは北部で15㎝、南部で42㎝を測る。

［覆土］　２層に分層された。両層とも黒褐色土で、下層にはＴｏ－Ｎｂが、上層にはＴｏ－Ｃｕがそれぞれ少量混入している。自然堆積と思われる。

［遺物］　なし。

第６号土坑（第40・42図、写真図版19・29）

［位置・検出状況・重複］　Ｑ～Ｒ－14グリッドに位置する。検出面は第II層下位で、隅丸方形の暗褐色土の広がりによって確認した。同面における南東方向への傾斜角は３～４°である。

北部が第１号方形溝状遺構と、南西部が第７号土坑とそれぞれ重複している。本遺構は前者より新しく、後者より古い。なお、南側５ｍには第３号竪穴住居跡がある。

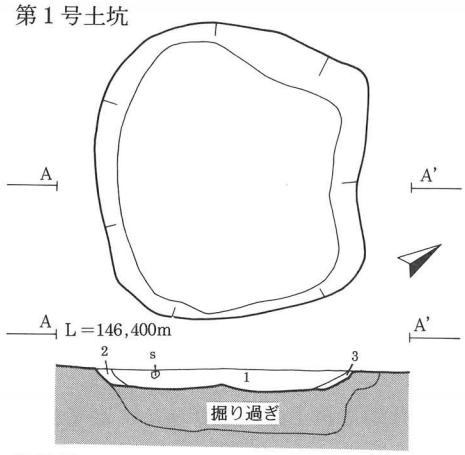
［規模・平面形］　北西壁183㎝、北東壁178㎝、南東壁172㎝、南西壁177㎝の隅丸方形を呈する。

［壁・底面］　各壁とも下部はほぼ垂直な角度で立ち上がり、上半部がやや外傾している。壁高は各壁ともおよそ45～50㎝を測る。構築時の掘り込みは第Ｖ層下位まで行われており、床面は外側が中央部より若干低い。全般に堅緻である。

［覆土］　５層に分層された。黒褐色土にＴｏ－Ｎｂが混入する中～下層と、褐～暗褐色土にＴｏ－Ｃｕが混入する上層の２種に大別される。上層は第７号土坑の影響を受けており、焼土粒が微量混入している。中～下層は自然堆積と思われる。

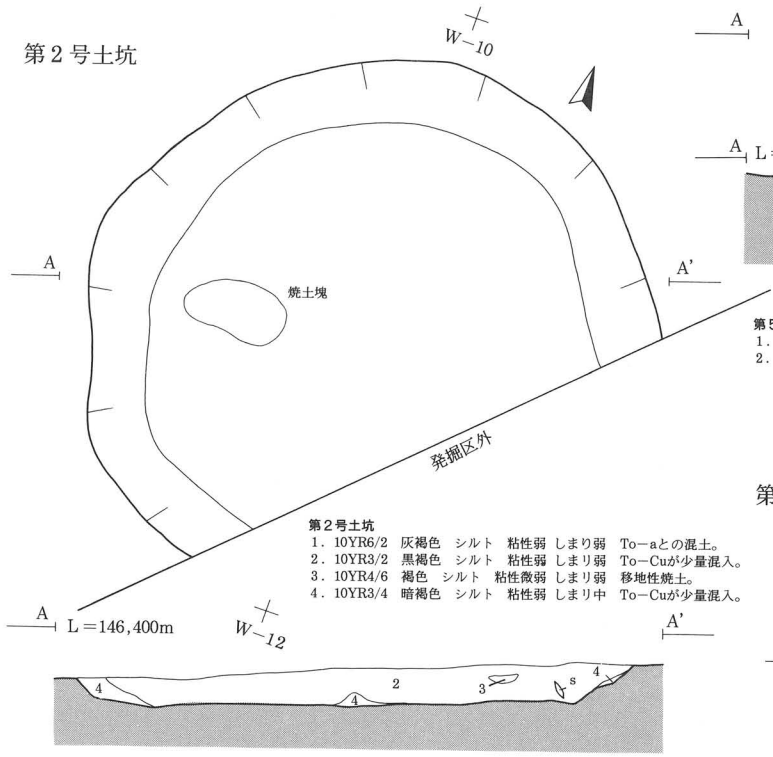
［遺物］　覆土中から土師器坏片が１点出土した。

第１号土坑



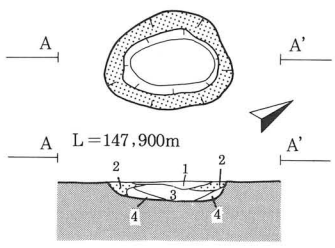
第１号土坑
1．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　炭化物粒が微量混入。
2．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが中量混入。
3．10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが多量混入。

第２号土坑



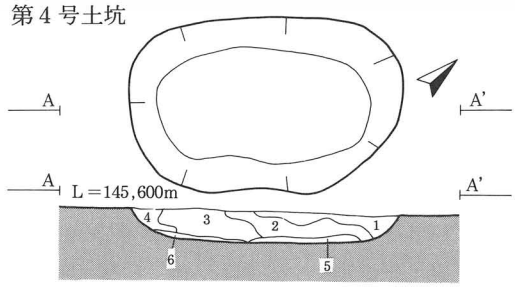
第２号土坑
1．10YR6/2　灰褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−aとの混土。
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが少量混入。
3．10YR4/6　褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　移地性焼土。
4．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cuが少量混入。

第３号土坑



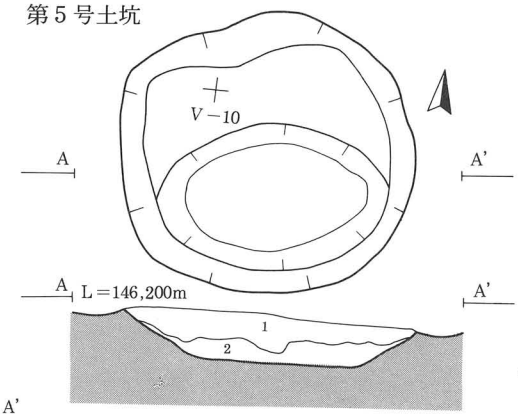
第３号土坑
1．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　焼け弾けた土師器破片が多量に出土。
2．5 YR6/8　橙色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒褐色土との混土。炭化物粒が少量混入。
3．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黄褐色焼土粒が微量混入。
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黄褐色焼土粒が微量混入。

第４号土坑



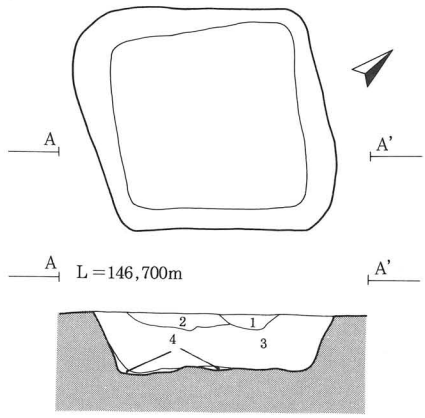
第４号土坑
1．10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが中量混入。
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが中量混入。
3．10YR4/4　褐色　シルト　粘性微弱 しまり弱　To−Cuが中量混入。
4．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　黒褐色土との混土。To−Cuが中量混入。
5．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが多量混入。
6．10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To−Cuが多量混入。

第５号土坑



第５号土坑
1．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Cuが少量混入。
2．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中　To−Nbが少量混入。

第６号土坑



第６号土坑
1．10YR4/6　褐色　シルト　粘性弱 しまり中
明赤褐色土粒、To−Cu、To−Nbが少量混入。
2．10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱 しまり中
To−b、To−Cu、To−Nbが少量混入。
3．10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中
To−Nbが少量混入。
4．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり中
To−Nbが中量混入。

0　1　2 m
1：60

第40図　土坑(1)

第７号土坑（第41・42図、写真図版19・29）

［位置・検出状況・重複］　Q～R－14グリッドに位置する。検出面は第II層中位で、不整形の焼土及び多量の土師器破片検出によって確認した。同面における南東方向への傾斜角は７～８°である。

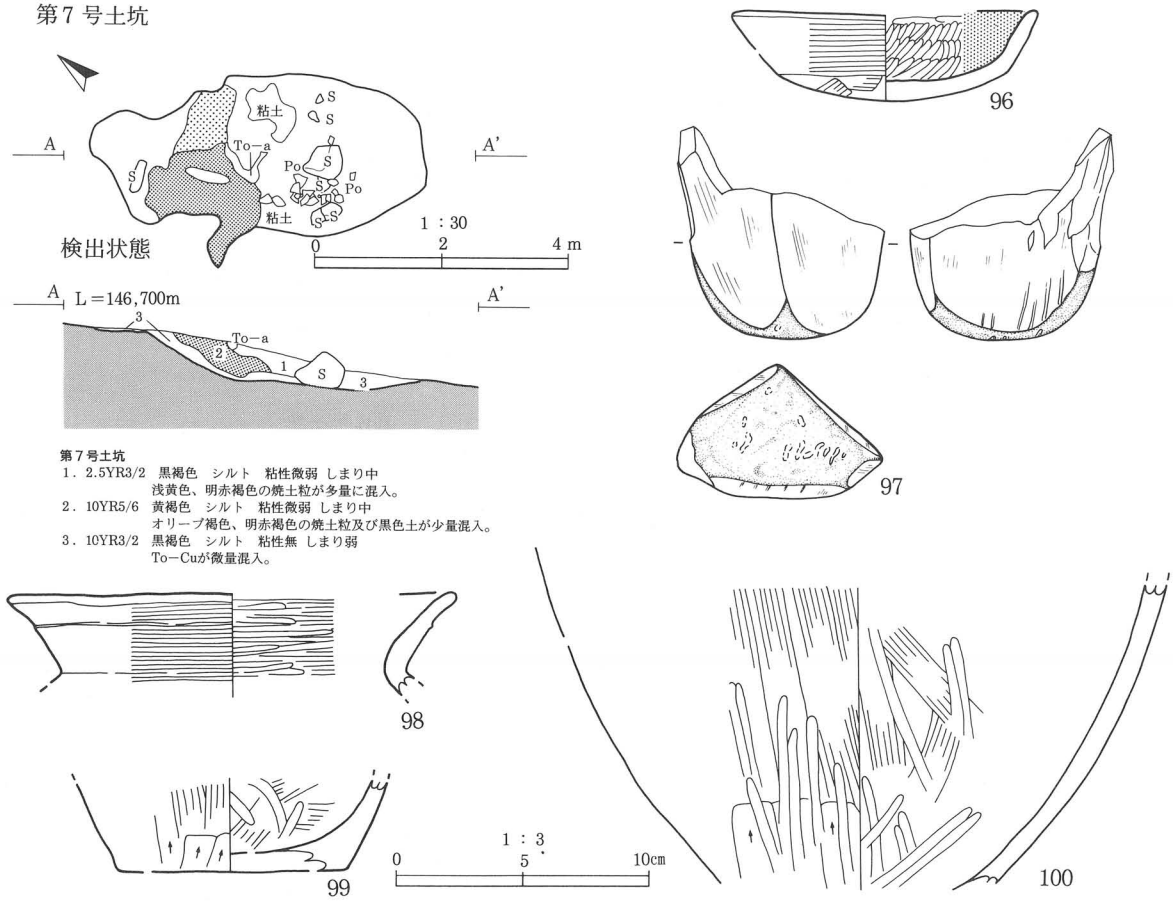
北東部が第６号土坑と重複している。本遺構の方が新しい。なお、北側約0.8mには第１号方形溝状遺構、南側約５mに第３号竪穴住居跡がある。

［規模・平面形］　長軸133cm、短軸60cmの不整長楕円形を呈する。

［壁・底面］　壁の立ち上がりは非常に緩やかである。構築時の掘り込みは第II層下位～第III層上位まで行われており、底面に凹凸はほとんどない。深さは15cmである。

［覆土］　３層に分層された。第１及び２層は焼土混入層である。第２層は焼土の比率が極めて高く、現地性の焼土かとも思われたが、別色調の焼土や黒色土の小ブロックが混入していることから移地性と考えられる。本遺構は人為堆積である可能性が強い。

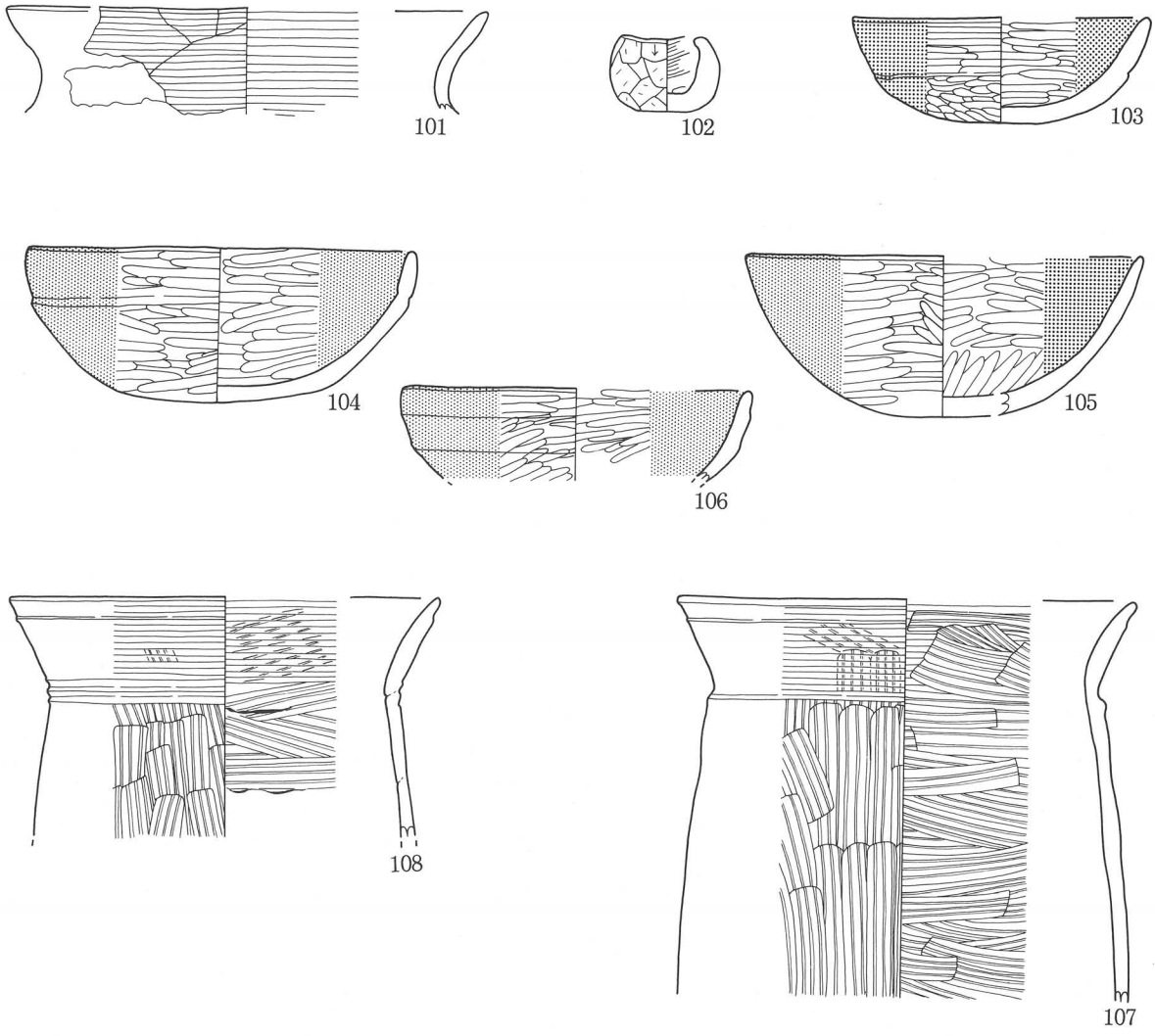
［遺物］　表面の焼土堆積付近から多数の土師器片が出土している。この内、土師器坏全点と比較的接合状態の良い長胴甕片２点の計５点を図示した。



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
96	第１号土坑底面	土師器	坏	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～底〕ミガキ	(12.0)		3.6	内面黒色処理
98	第２号土坑覆土	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ	〔口〕ナデ→ミガキ	(17.6)		−4.1	
99	第２号土坑覆土	土師器	甕	〔口〕ナデ→ケズリ	〔口〕ナデ→ミガキ		(9.0)	−3.7	
100	第２号土坑覆土	土師器	甕	〔口〕ナデ→ケズリ→ミガキ	〔口〕ナデ→ミガキ			−12.0	

No.	出土地点	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	産地	備考
97	第１号土坑覆土中位	砥石	砂岩	9.1	7.5	5.6	304.44	一端欠損	奥羽山脈	被熱し赤色化

第41図　土坑(2)



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm)			その他
						口径	底径	器高	
101	第3号土坑 覆土上位	土師器	甕	〔口〕ヨコナデ	〔口〕ヨコナデ	(19.4)		−4.7	被熱により焼け弾けている
102	第4号土坑覆土	土師器	ミニチュア	〔体〕ユビナデ	〔体〕ユビナデ	3.3	2.6	3.0	
103	第6号土坑覆土	土師器	坏	〔口〜底〕ミガキ	〔口〜底〕ミガキ	(12.0)		4.3	内外面黒色処理
104	第7号土坑 覆土上位	土師器	坏	〔口〜底〕ミガキ	〔口〜底〕ミガキ	15.7		6.4	内外面黒色処理
105	第7号土坑 覆土上位	土師器	坏	〔口〜体〕ミガキ	〔口〜体〕ミガキ	(16.0)		−6.5	内外面黒色処理
106	第7号土坑 覆土上位	土師器	坏	〔口〜体〕ミガキ	〔口〜体〕ミガキ	(14.1)		−3.7	内外面黒色処理
107	第7号土坑 覆土上位	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ→ハケメ	(18.4)		−16.2	
108	第7号土坑 覆土上位	土師器	甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ→ハケメ 〔体〕ハケメ	(18.4)		−16.2	
109	O−17　II層	土師器	ミニチュア	〔体〕ナデ→ケズリ	〔口〕ナデ→ケズリ	2.1	2.0	2.4	
110	O−13　遺構外	須恵器	甕	〔体〕タタキメ	〔体〕ナデ			−4.6	

第42図　土坑(3)

(5) To－a溝状堆積範囲 （第43図、写真図版20）

［位置・検出状況］　O～P－12、M～Q－13～14グリッドに位置する。検出面は第II層上位で、To－aの堆積によって確認した。同面における南東方向への傾斜角は7～8°である。なお、南側約2mに第2号竪穴住居跡、北東側約1mに第1号方形溝状遺構がある。

［規模・平面形］　範囲は東西約18m、南北約9mの東西に長い帯状を呈し、To－aが北西～南東方向に伸びる細い筋状に幾条も堆積している。個々の条がはっきりと分かれて均等に存在するわけではなく、黒褐色土と混合して斑な太い条状になっている部分も多い。細い条状を呈する部分の幅は20～30cmで、条間の幅も20～30cmを測る。

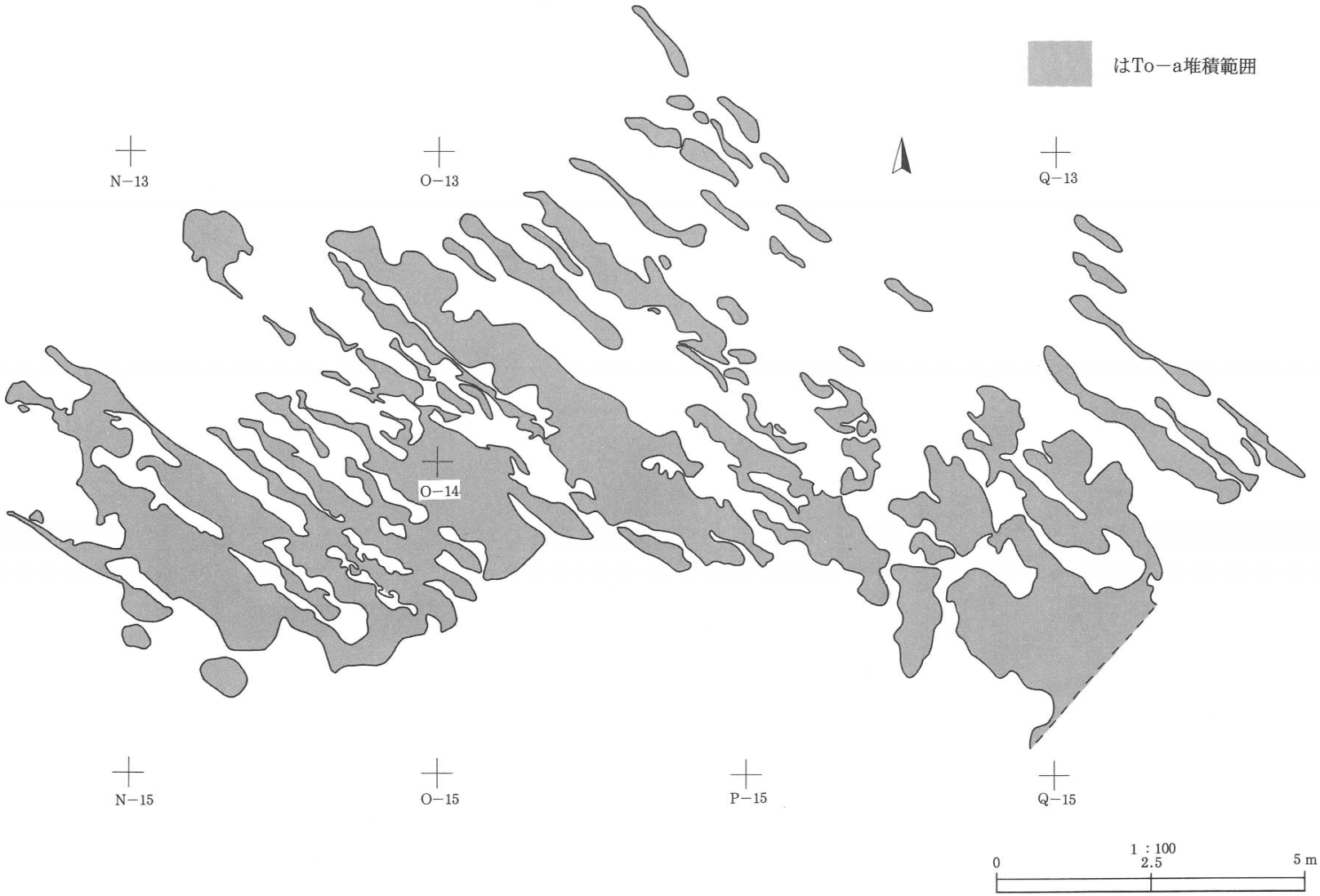
［覆土］　表面には厚さ0～3cmほどのTo－aが不整幅・不整間隔で堆積している。黒褐色土と混ざっている部分が多い。その下10cm程度の間には、To－aが大小ブロック状に混入している。

［出土遺物］　なし。

［小結］　To－aが筋状に存在することから、当初は畠の畝間にTo－aが堆積したものか、或いは本範囲全体に堆積していたTo－aがトレンチャー等を使用した現代の耕作行為によって攪乱を受けた状態ではないかと考えていた。しかし、第1号方形溝状遺構より南西側にはトレンチャー痕がほとんど入っておらず、しかもトレンチャーは幅20cm・トレンチャー痕の間隔70～80cmであるため本遺構の溝とは全く間隔が合わない。このため現代の耕作痕によって生じた可能性は低い。近代の耕作等によって生じた痕跡とも仮定できるが、周辺からは攪乱等が全く見られないためこの可能性も考えにくい。近接する第2号竪穴住居跡で検出されたTo－aにも、このような痕跡は全く確認されなかった。

また、前記のように、To－aは検出面表面において不整幅の溝状を呈するような状態で厚さ0～3cmの不均等な堆積を見せているが、一定の間隔で断面が波状に堆積するという状態は呈しておらず、土中に大小のブロック状で混入している部分がかなり多く見受けられる。畝間にTo－aが堆積しただけであればこのような状態にはなり得ない。何らかの人為的作用を受けたものと考えられる。

現状では、この範囲の性格が何であるか言及することが非常に難しいが、平安時代（To－a堆積後、あまり時間を置かず）に行われた何らかの行為による痕跡であることは間違いないものと思われる。To－aが土中にブロック状に混入しているという状態から、これを撹拌するような行為が行われていたという点だけ指摘しておきたい。



第43図　To－a溝状堆積範囲

2．縄文時代

縄文時代の遺構は、陥し穴状遺構が１基検出されたのみである。

(1) 陥し穴状遺構

第１号陥し穴状遺構（第44図、写真図版20）

［位置・検出状況］　Ｎ－18グリッドに位置する。検出面は第Ⅱ層中位で、Ｔｏ－Ｃｕを含む黒褐色土の溝状範囲検出によって確認した。本遺構付近も他と同様に南東方向へ下る緩斜面となっており、検出面における傾斜角は３～４°である。

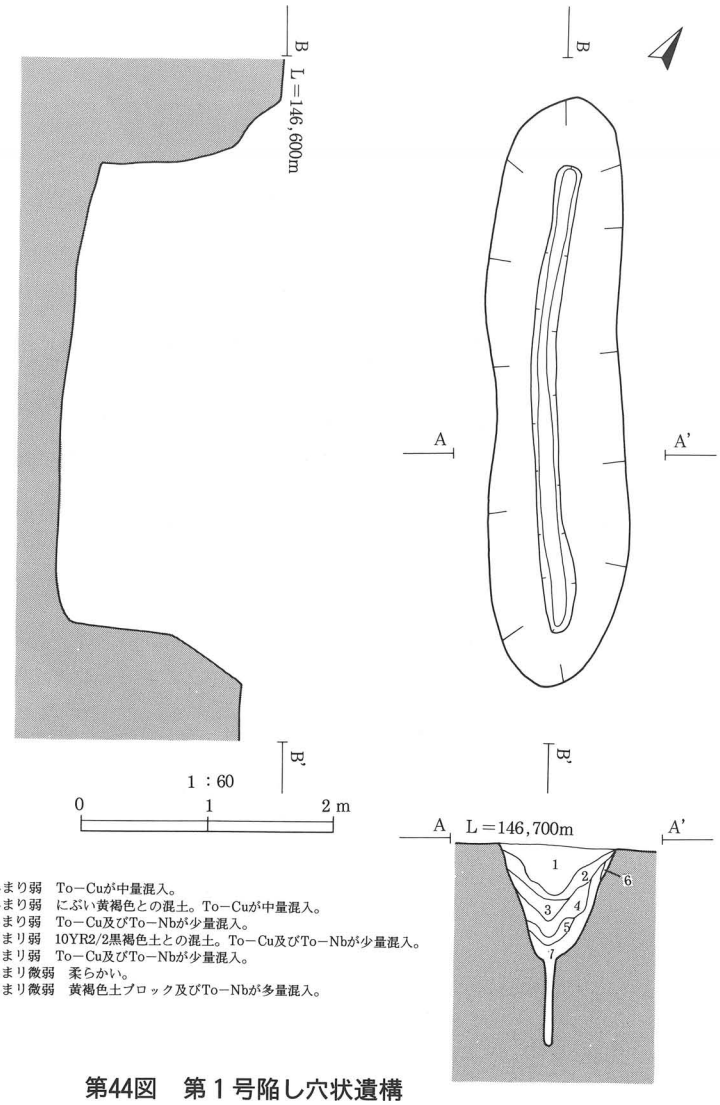
［規模・平面形］　長軸・短軸値は、開口部で469×102㎝、底面で362×10㎝を測る。平面形は極長楕円形で、底面は幅10㎝前後で非常に細長く掘り込まれている。

［深さ・断面形］　深さは中央部で156㎝、短軸断面形は漏斗状を呈する。

［底面］　およそ平坦で、逆茂木痕等はない。

［覆土］　７層に分層された。最下層である第７層にはＴｏ－Ｎｂが、第６層以外にはＴｏ－Ｃｕが混入している。全て壁面及び構築面からの崩落土と考えられる。

［出土遺物］　なし。



第１号陥し穴状遺構
1．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cuが中量混入。
2．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　にぶい黄褐色との混土。To－Cuが中量混入。
3．10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu及びTo－Nbが少量混入。
4．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　10YR2/2黒褐色土との混土。To－Cu及びTo－Nbが少量混入。
5．10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり弱　To－Cu及びTo－Nbが少量混入。
6．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり微弱　柔らかい。
7．10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱 しまり微弱　黄褐色土ブロック及びTo－Nbが多量混入。

第44図　第１号陥し穴状遺構

3．　遺構外出土遺物

(1)　古代の出土遺物

土師器（第45図、写真図版30　No.109）

O－17グリッド第II層中位からミニチュア土器が出土した。同様の遺物は第4号土坑覆土中にも見られる。これ以外にも35×40×20㎥のコンテナ1箱分程度の土師器が出土しているが、期間と紙面の関係上省略させていただいた。これらは全て微細な破片で、甕類が多いようである。出土場所は第2号竪穴住居跡付近のものが多い。

須恵器（第45図・写真図版30　No.110）

O－13グリッド第II層上位から出土した。須恵器は第2号竪穴住居跡覆土上位から出土したものと本遺物の2点のみである。

(2)　縄文時代の出土遺物

土器（第46図、写真図版30　No.111～118）

35×40×20㎥のコンテナ半箱分出土した。時期は様々である。南西部を除く調査区全域で散見されたが、L－20グリッド付近から比較的まとまって出土している。これらの土器はいずれも地紋縄文の隆帯、綾繰文などを主体とし、胎土に繊維を含んでいる。時期は前期前葉に位置付けられている円筒下層式に比定されるものと考えられる。また、No.118は第2号竪穴住居状遺構覆土からの遺物であるが、ここで紹介することとした。大木10式相当と思われる。

石器（第45図、写真図版30　No.119～120）

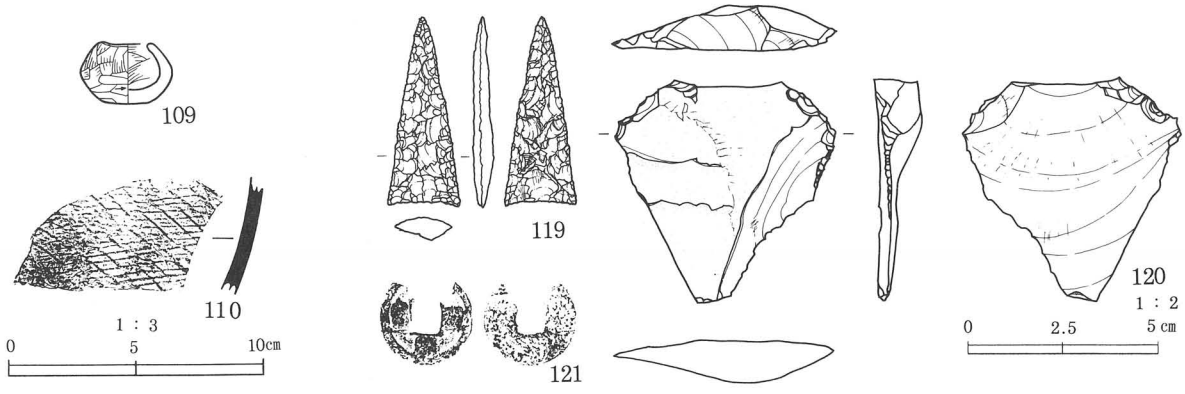
石器は2点出土している。1つは石鏃で、L－20グリッド第III層上位から出土した。もう1つは背面に節理面を残す剥片で、右側縁上部に二次加工らしきものが見受けられる。J－21グリッド第III層上位からの出土である。

これら縄文時代の遺物は、出土位置がバラバラであること、本遺跡に該期の遺構が陥し穴状遺構1基しか存在しないこと、調査区中央部～南東部には背後の丘陵から続く沢状の落ち込みが形成されていることなどから、斜面上部から流れ込んだ可能性が高い。斜面上部には以前発掘調査された寺久保遺跡があり、ここで同時期の遺物が出土しているため、寺久保遺跡付近で使用されたものと考えられる。

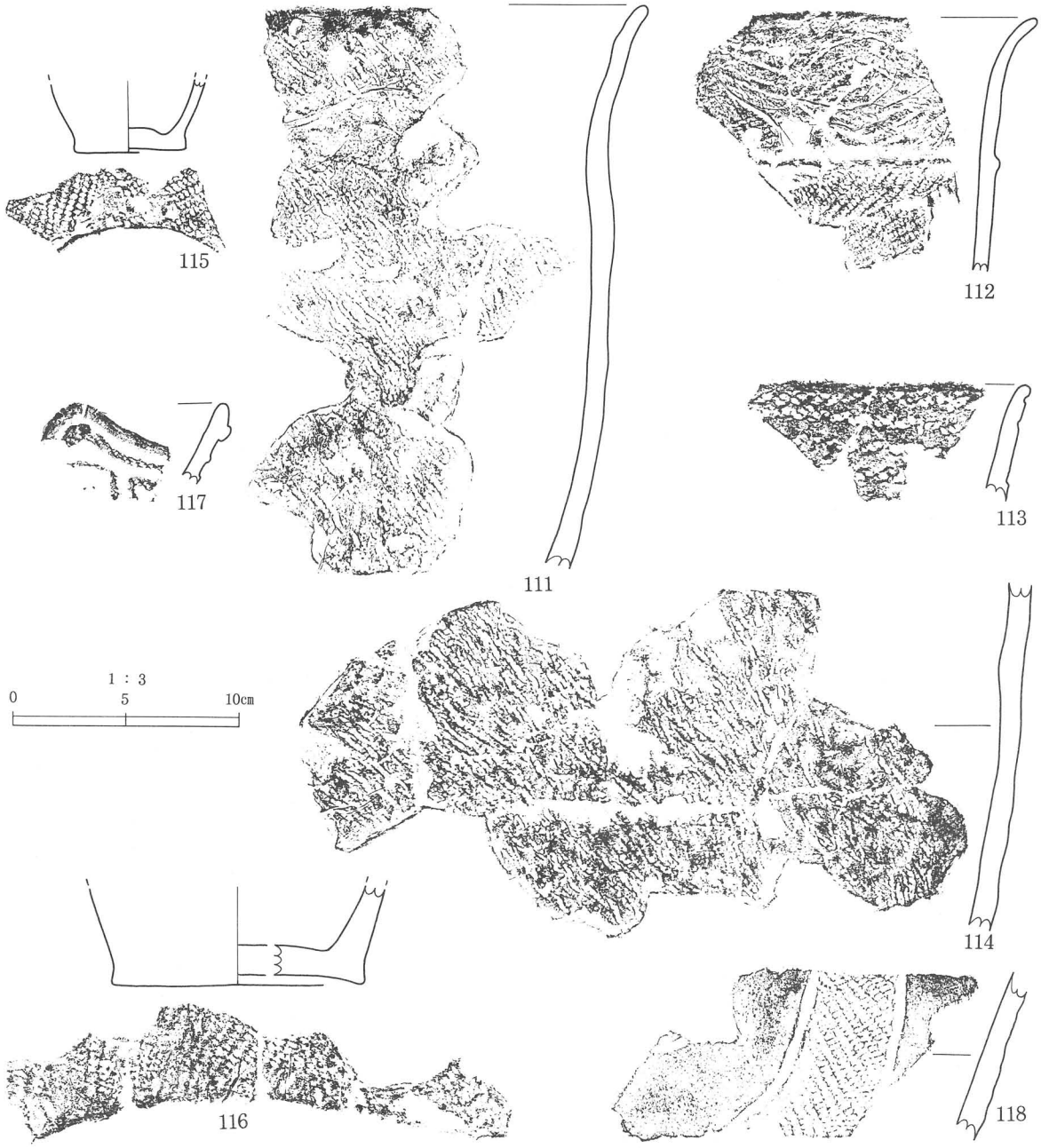
(3)　その他

銭貨（第45図、写真図版30　No.121）

全体的に摩滅しており、左側が「寶」である他は判断できない。出土位置・層位は不明である。



第45図　遺構外出土遺物(1)



No.	出土地点	種類	器種	外面調整	内面調整	法量(cm) 口径	底径	器高	その他
109	O−17II層中位	土師器	ミニチュア	〔体〕ナデ→ケズリ	〔口〕ナデ→ケズリ	2.1	2.0	2.4	
110	O−13II層上位	須恵器	甕	〔体〕タタキメ	〔体〕ナデ			−4.6	

No.	出土地点	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	備考
111	L−20他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	口縁〜胴部	結節回転文（LR）頸部の区画隆帯剝落	口縁部決節回転文胴部ナデ	
112	U−12他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	口縁部	口縁部：側面圧痕（LR）胴部：LRヨコ	ナデ	
113	L−20他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	口縁部	側面圧痕（RL）	ナデ	
114	L−20他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	胴部	結節回転文（LR）	口縁部結節回転文胴部ナデ	
115	Y−7他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	胴下〜底	LRヨコ	ナデ	
116	L−20他　第II層下位〜第III層上位	深鉢	胴下〜底	LRヨコ	ナデ	
117	N−17他　第II層下位	深鉢	口縁部	隆帯貼り付け→RLヨコ	ナデ	
118	覆土下位	深鉢	胴部	LRタテ→沈線→摩消	ナデ	

No.	出土地点	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	産地	備考
119	L−20　第II層下位	石鏃	頁岩	4.9	1.9	0.5	3.54	完形	北上産地	
120	J−21　第II層下位	削器	頁岩	5.8	5.6	1.2	28.22	完形	北上産地	背面に節理残る

No.	出土地点	種別	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状態	備考
121	不明	銭貨	2.5×2.5	0.1	1.82	1/4欠損	摩滅激しい　左側は「寶」

第46図　遺構外出土遺物(2)

V　調査成果・まとめ

1．　竪穴住居跡について

今回の調査で検出された竪穴住居跡7棟（以下、住居跡）について、項目毎に若干のまとめを述べてみたい。

規模と平面形　住居本体部分が全域検出されたのは第2号・第4号・第5号住居跡の計3棟である。この内、第2号・第4号住居跡は隅丸方形を、第5号住居跡は隅丸長方形を呈する。残り4棟については、一部が調査区外まで続くかもしくは破壊されていたため全体形が不明であるが、検出部分は全て隅丸であった。おそらく隅丸方形であるものと考えられる。

規模は、床面積で比較することが出来ないため、カマド構築壁の床面長で比較してみた。それによると、第1号住居跡…275cm、第2号住居跡…700cm、第3号住居跡…290cm、第4号住居跡…395cm、第5号住居跡…415cm、第6号住居跡…410cm、第7号住居跡…310cmとなる。大別すると、大形（第2号住居跡）、中形（400cm前後のもの…第4号・第5号・第6号）、小形（300cm前後のもの…第1号・第3号・第7号）となる。但し、全てが同時期存在とは考えにくいため、これをもって住居のセット関係とすることは無理と思う。時期の考察については後に多少述べることとする。

カマド　カマド構築の方法については、焼土しか検出されなかった第5号住居跡を除き全て近似した様子が窺えた。芯材及び天井石には、板状或いはブロック状に加工した軟質の凝灰岩を用い、その周囲に黄褐色系の粘土等を貼り付ける、という手法である。このような構築材を使用したカマドは本遺跡に限らず、これまでに調査された二戸市域の遺跡でもよく見られるものである。また、煙道部は全て刳り貫き式であり、この点も類似している。

柱穴・ピット　住居内でピットが確認された遺構は、第1号・第2号・第5号・第6号住居跡の4棟である。この内、床面から主柱穴が規則的に検出されたのは第2号・第6号住居跡の2棟のみで、2棟とも本遺跡内では住居規模が比較的大きめである（第6号住居跡は推定）。第6号住居跡では北隅外側から長楕円形のピットが1個検出されているが、竪穴の外に柱穴を持つ例が二戸周辺では長瀬C遺跡（岩手県埋蔵文化財センター1981）、中曽根II遺跡（二戸市教育委員会　1981）、寺久保遺跡（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1996）等で確認されている。第3号・第4号・第7号住居跡からは全くピットが検出されなかった訳であるが、中曽根II遺跡では、小～中形の住居跡（明記されていないが、1辺約5m以下・床面積約25㎡以下クラスを指すと思われる）には柱穴がないものが非常に多かったと報告しており、このことについて報告者の関氏は、居住空間を得るため竪穴の外側に柱穴を設けたか、柱穴を掘り込まずに内部に柱を立てたかのどちらかだろうという見解を示している。寺久保遺跡では大1棟・中～小2棟・不明1棟、計4棟の竪穴住居跡が検出されているが、床面から柱穴がはっきりと確認されたものはなかったとしている。竪穴外に柱穴を持つ例は北海道の擦文時代前半期住居にも見られ、恵庭市、千歳市など石狩低地帯南部にある遺跡からの検出が多いようである（恵庭市教育委員会　1988）。

また、第1号住居跡では壁面中からピットが検出されている。東隅にあり、45°程度の角度で斜め下に入っている。1個のみであるが、同遺構で検出された4個の中で最も深く、柱穴である可能性が高い。同様のピットは第2号竪穴住居状遺構にも見られ、こちらでは北隅・南隅・西隅に各1個の計3個が検出されている。こういった場所に構築されたピットは、竪穴外側に構築された柱穴と類似する性格を持つものと考えられそ

うである。このような類例は軽米町皀角子久保Ⅵ遺跡のⅣＡ－１住居跡にも見られる（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988）。

壁柱穴　第２号住居跡で確認された。規則的に配置されており、壁の土留めとしての役割も持っていたと考えられる。当該期の遺構で、壁溝に柱穴状の小ピットが見られる例は多々あるが、はっきり柱穴痕と断定できる程の深さを持ち、尚且つ規則的に配置されたものは少なく、大形住居跡に散見される程度である。

壁溝　どの住居跡からも壁溝らしきものはほとんど検出されず、第１号及び第７号住居跡の北隅部分に若干見られたのみであった。

出入り口　検出された７棟中、出入り口の施設らしきものが検出されたのは第２号住居跡のみである。同住居跡では、南東壁の南隅付近床面に白色粘土が堆積していたＰ58や、張り出し部に３個のピットが存在しており、竪穴外には小ピットが密集している。また、周辺を囲むＴｏ－Ｃｕ混入土もこの付近には堆積しておらず、開口部となっている。このため、本付近に出入り口状施設があった可能性が高い。

棚状の張り出し部を有する住居跡について　第２号・第７号住居跡は明瞭な棚状の張り出し部を有している。第７号住居跡は、調査区外まで及ぶ南側以外の北西・北東・南西の３方向が張り出す。第２号住居跡は全周囲に張り出し部を持つ。このような例は中曽根Ⅱ遺跡の173号址、及び平安時代の遺構ではあるが青森県八戸市風張（１）遺跡の第25号竪穴住居跡（八戸市教育委員会　1990）で確認されており、後者は増改築時に構築されたものと報告されている。また、部分的に存在する例は中曽根Ⅱ遺跡の41号址、寺久保遺跡の第15号住居跡等で確認されており、寺久保遺跡報告者の金子氏は棚状の施設ではないかと推定している。実際、本遺跡第７号住居跡の北西壁西側張り出し部からは土師器が２個体出土した。また、床面北隅壁際からはほぼ完形の土師器甕が３点出土したが、あたかも同付近張り出し部から落下したような状態を呈している。後者は推論でしかないが前者は確実であることから、棚状の施設であった可能性が高い。

張り出し部を持つ住居跡も北海道の擦文文化期住居跡に類例を求めることができる。赤沢威氏は、昼はベンチ、夜はベッドとして使用したのではないかと推測している（赤沢威　1967）。

床溝について　第２号住居跡床面から間仕切り溝状の溝が３条検出されている。床溝を持つ例は、二戸市、久慈市、滝沢村など県北部でも散見されるが、青森県八戸市付近の遺跡に検出例が多く、根城跡（八戸市教育委員会　1983）、湯浅屋新田遺跡（同　1984他）、田面木平（１）遺跡（同　1989）、田面木遺跡（同　1989）、弥次郎窪遺跡（青森県教育委員会　1989）、風張（１）遺跡（八戸市教育委員会　1991）、百石町根岸（２）遺跡（百石町教育委員会　1994）等で確認されている。しかしこれらの例は、本遺構のように主柱穴間に構築され壁面に並行する形ではなく、壁溝から主柱穴等に向かって伸びる、壁面に直行する形のものが大半を占める。根岸（２）遺跡の第７号住居跡では、東西の壁溝から左右対称に４条ずつ、計８条構築されているが、報告者の橋本・小向両氏は仕切られた空間を寝間としている。また、同住居跡からは挂甲の小札が137枚と蕨手刀１振等が出土しており、住居の規模・構造及びこれら出土遺物から蝦夷の族長の家屋ではないかと推測している。

本遺構例の場合、溝の配置位置上こういった個室的空間構築用とはならないが、壁側・棚状張り出し部空間と内部空間を仕切るためのものであろうことは想像できる。空間の使い分けがあったことは間違いないであろう。なお、本遺構例に類似する形態のものは二戸市上田面遺跡（岩手県埋蔵文化財センター　1981ｂ）、寺久保遺跡で確認されており、前者は主柱穴に沿って１本、後者はＬ字形を呈している。前者の溝底には深さ10cm程度の小穴が不規則に連なっており、本遺構と類似している。

Ｔｏ－Ｃｕ混入土堆積範囲について　第２号住居跡の周囲から検出した。非常に薄い堆積であるが、検出面が耕作土直下のためある程度の削平を受けている可能性が高い。検出面である第II層上位には、本来Ｔｏ－Ｃｕはほとんど混入せず、このような堆積範囲は本部分に限られるため人為堆積と考えて間違いないであろう。第２号住居跡はＴｏ－Ｃｕ混入層である第Ⅲ・第Ⅳ層を掘り抜いて構築されていることから、おそらくその排土を盛った、周堤のようなものだったのではないだろうか。その役割として、住居を囲むように存在すること、またその範囲が斜面上部に密で下部に粗であるという点から、例えば流土・流水等の土止め・水止め等が推測される。同じような形の周堤が伴う例は、青森県南部地方に比較的多く見られるが、時期は白頭山火山灰降下前後と新しく、六ヶ所村発茶沢(1)遺跡（青森市教育委員会　1988）などではこれに掘立柱建物跡が伴う例が報告されている。

周堤状盛り土の構築理由をさらに踏み込んで考えた場合、上屋構造が土屋根で、垂木を押さえるための周堤帯であったとも考えられる。本住居跡から土屋根の存在を示す痕跡は発見されていないが、焼失住居である第５号住居跡の床面直上～覆土中位からは、炭化材と炭化材の間に挟まれるような状態でススキ属に同定された炭化材が出土しており、土屋根が構築されていた可能性がある。

遺構構築時期の前後関係について　住居覆土中のＴｏ－ａ堆積層位から少し考えてみたいと思う。この堆積層位を大別すると、上位～中位に堆積しているもの…第１号・第２号・第４号・第６号・第７号住居跡、床面に接しているもの…第３号・第５号住居跡、の２パターンになる。よって、後者よりも前者の構築時期が早かったものと考えられる。これは、第６号住居跡の覆土中位南側に見られる人為的堆積が第５号住居跡構築時の排土ではないかという推測にもあてはまる。また、第１号住居跡と第７号住居跡は近接しているため、ここでも多少の時期差が考えられる。但し、どちらが先行するかは不明である。

Ｔｏ－ａの堆積状況について　ここで、Ｔｏ－ａの堆積状況についても少し述べてみたい。第２号・第４号・第７号住居跡に堆積しているレンズ状を呈するＴｏ－ａの下位には、Ｔｏ－ａがモヤ状・粒状・ブロック状に斑に混入している黒色土・黒褐色土層が存在する。これらの層厚は中央部で15～25㎝あり、第２号住居跡の北西壁付近に至っては約75㎝も堆積している。下位のような堆積状況が見られる例はこれまでにも多数報告されており、火山灰が上屋に堆積し、これが崩落することによって攪乱された状態になる場合と、住居構築以前に火山灰降下があり、構築の際周囲に除去した火山灰が住居廃絶後に流入した場合等のパターンが想定されている（高橋ほか　1983）。本遺跡の場合、傾斜地に立地することから斜面上方からの流れ込みも考えられよう。第４号・第７号住居跡の場合は、Ｔｏ－ａ堆積前にこれを含まない相当量の覆土が堆積しており、またＴｏ－ａをブロック状に含む層がレンズ状を呈しているため自然堆積と思われ、先の２パターンではなく斜面上方或いは周辺からから流入したものと思われる。ここで問題となるのが上位に堆積している厚いＴｏ－ａとの関係である。上位のＴｏ－ａが水成堆積であることを考えれば、上位層から下位に染込んだ結果とも推測されるが、粒状やブロック状を呈している部分が多いためこの可能性は薄い。上位のＴｏ－ａが短期間のうちに堆積したのは間違いないであろうが、このＴｏ－ａには砂質・シルト質・粘土質各層の堆積が交互に幾層も見られることから一度に堆積したとは思えず、短い期間ではあろうが堆積の空白期があったと考えられる。その間に動植物による攪乱があった可能性も否定はできない。しかし、植物痕のようなものは確認されておらず、Ｔｏ－ａのブロックが上位のＴｏ－ａとは全く接しない部分にまでほぼ均等に存在することからこの可能性も極低いものと思われる。

第２号住居跡の場合、下位の堆積は前記の２パターンによる可能性もある。但し、後者であると仮定した場合、本住居構築前にＴｏ－ａに類似した火山灰がすでに堆積しており、下位層が堆積するほどの時間が経

過した後に上位のＴｏ－ａが降下し、堆積したということになる。しかしこのような火山灰の存在は現在まで確認されておらず、また第４号・第９号住居跡の下位Ｔｏ－ａと本住居跡のそれは同一のものと思われるためこれは考えにくい。このため、本住居跡の場合は周辺から流入したものか、上屋の崩落によるものかのどちらかである可能性が高い。但し、ここでまた問題となるのが上位のＴｏ－ａとの関係である。周辺から流入したものと考えた場合、先の第４号・第９号住居跡と同じ問題が持ち上がる。下位は最厚で約75㎝も堆積している訳であるから植物痕や動物による攪乱はまず考えられない。また、上位はほぼＴｏ－ａの純層で下位は斑な混入であるため同一の火山灰が同じ状況で堆積したものではないことは明らかである。上屋の崩落であった場合でも疑問点が生じる。本住居跡では、下層のモヤ状・ブロック状のＴｏ－ａ混入層（第５～第８層等）と上位の厚いＴｏ－ａ層（第２層）との間にＴｏ－ａの混入がほとんど見られない黒褐色土層（第４層）が存在するという点である。この層は第５～第８層とは顔つきが異なり、土屋根等の上屋構造崩落に起因する堆積とは考えにくい。このことから、下位のＴｏ－ａ混入層と上位のＴｏ－ａが堆積する間には、第４層が堆積するだけのある程度の時間差があったと想定できそうである。

このように考えてくると、下層のＴｏ－ａと上層のＴｏ－ａは同一時のものではなく時期の異なるもの、もしくは別の火山灰ではないかという可能性が出てくる。但しそのような事実はまだ確認されておらず、現時点で言及することは不可能で、あくまでも推測である。この点については今後の類例の増加等を待って、さらに検討を加えていきたいと思う。

２．　まとめ

検出遺構

古代の竪穴住居跡７棟（主に奈良時代）、竪穴住居状遺構３基、方形溝状遺構１基、土坑７基、平安時代のＴｏ－ａ溝状堆積範囲１箇所、縄文時代の陥し穴状遺構１基が検出された。

出土遺物

古代の遺物は、土師器（坏・甕・小型甕・長胴甕・球胴甕・ミニチュア）、須恵器（大甕破片）、鉄製品（刀子・小札・釘）、土製品（紡錘車）、石器（砥石・台石・敲打器等）、植物種子（エノコログサ属の一種・カナムグラ等）、炭化クルミ、獣骨（クマの指？）が出土した。総量は40×35×30㎥のコンテナ約10箱分である。

縄文時代の遺物は、縄文土器片（深鉢）、石器３点（石鏃・削器・剝片）である。総量は35×40×20㎥のコンテナ約半箱分程度と少量であった。

まとめ

本遺跡の主体をなすのは奈良時代の遺構・遺物である。調査区域は南東向きの緩斜面で、大半の遺構は比較的平坦な斜面下位の南東部から検出された。第３号・第５号・第６号・第７号竪穴住居跡及び第１号竪穴住居状遺構は調査区境界に位置しており、調査区外に及ぶことから、遺跡はさらに南東側へ続いているものと思われる。

竪穴住居跡は概ね隅丸方形を呈している。カマドは７棟中６棟が北西壁に構築されており、第５号竪穴住居跡のみ南東壁に存在する。煙道部は全て刳り貫き式であった。芯材にはほとんどの場合加工痕の見られる軟質の凝灰岩が使用されている。床面からはっきりとした柱穴が確認された住居跡は２棟のみで、第３号・第４号・第７号竪穴住居跡からは全く検出されなかった。第１号・第６号竪穴住居跡のように壁面や竪穴外

に存在した可能性もある。第３号竪穴住居跡以外の住居跡及び第１号～第３号竪穴住居状遺構には、掘り込み時の排土を利用して貼り床が構築されている。また、第２号・第７号竪穴住居跡は周囲に棚状の張り出し部を有しており、第２号の同部からは小ピット数個が検出され、第９号では土師器片が出土している。

第５号竪穴住居跡からは多数の炭化材が出土しており、焼失家屋と思われる。樹種同定の結果、一部の炭化材はススキ属の一種であることが確認された。その出土状況から屋根に葺かれていた部材の一部と考えられ、分析者の高橋利彦氏は土屋根の存在を推測している。

第２号竪穴住居跡は１辺が８ｍ強の大形住居で、その内外部から様々な施設が確認された。４本の主柱穴、壁際に規則的に配列された壁柱穴、床溝３条、周囲を巡る棚状の張り出し部、周堤状の土層堆積範囲などである。１点だけではあるが小札も出土しており、この住居跡が当時この付近に存在した集落の中心的な役割を担っていたことが予想される。

出土遺物は９割以上が土師器であった。坏は丸底で体部外面に段を持つものが大半を占める。口縁部は直線的で外傾するものと曲線的で若干内湾するものとがあるが、調整は内外面ともにミガキが入り、内面は黒色処理が施してある。ロクロ使用の痕跡が見られるものは無い。甕は口縁部が長くはっきりと立ち上がり、上部に１条の沈線あるいは段が廻るものが多く、ヨコナデが顕著でやや外傾しながら直線的に立ち上がる。大半のものはケズリやナデ調整が主体であるが、一部の個体にはミガキが顕著に見られ、これの場合胴部の張り出しが若干強く、器厚が厚い。球胴甕は全体的に器厚が厚く入念なミガキ調整が施されている。このような特徴から、本遺跡出土土師器の大半は８世紀前～中頃に比定されるものと思われる。この他に須恵器片や縄文土器・石鏃等も少量出土したが、その出土地点や状態から本来本遺跡に伴っていたものではなく、傾斜上部の寺久保遺跡等から流入したものと考えられる。

引用・参考文献

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1981ａ　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第22集

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1981ｂ　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第23集

二戸市教育委員会　1981　『中曽根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1982　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第35集

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1982　『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第36集

後藤秀彦　1983　「十勝地域における擦文文化の調査」『考古学ジャーナル』213

㈶岩手県埋蔵文化財センター　1983　『荒谷Ａ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第57集

八戸市教育委員会　1983　『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅳ』文化財調査報告書第９集

高橋與右衛門・鈴木克彦・小林 克　1983　「東北地方北部の遺跡と火山灰の検討」『考古風土記』第８号

㈶北海道埋蔵文化財センター　1984　『美深町　楠遺跡』調査報告書第15集

八戸市教育委員会　1984　『湯浅屋新田遺跡』文化財調査報告書第13集

青森県教育委員会　1987　『前比良遺跡』文化財調査報告書第108集

滝沢村教育委員会　1987　『高柳遺跡』文化財調査報告書第７集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988　『皀角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第129集

恵庭市教育委員会　1988　『柏木川８遺跡　柏木川13遺跡』

久慈市教育委員会　1988　『中長内遺跡』文化財発掘調査報告書第８集

青森県教育委員会　1989　『発茶沢（１）遺跡Ⅳ』文化財調査報告書第120集

八戸市教育委員会　1989　『田面木遺跡』文化財発掘調査報告書第28集

八戸市教育委員会　1989　『見立山（２）遺跡』文化財調査報告書第38集

八戸市教育委員会　1989　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　－田面木平（１）遺跡－』文化財発掘調査報告書第34集

青森県教育委員会　1990　『弥次郎窪遺跡』文化財調査報告書第128集

㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1990　『馬場遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第137集

恵庭市教育委員会　1991　『南島松１遺跡　南島松４遺跡』

八戸市教育委員会　1991　『風張（１）遺跡Ⅱ』文化財調査報告書第42集

百石町教育委員会　1995　『根岸（２）遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第４集

八戸市教育委員会　1998　『八戸市内遺跡発掘調査報告書10』文化財調査報告書第74集

Ⅵ　自然科学的分析

1．　上台遺跡出土炭化材の樹種

高橋　利彦（木工舎「ゆい」）

1．　試料

試料はNo.1・2の2点である。No.1は第5号竪穴住居跡の壁際覆土中（床面上5～15cm）ら検出されたものである。この住居跡には覆土が25～30cm堆積し、その中位から床面にかけて多量の炭化材が検出されていることから焼失住居と考えられている。No.2は第7号竪穴住居跡のカマド焚き口付近の床面から検出されたものである。この住居跡には自然堆積とされる覆土が80～90cm堆積し、完形品を含む遺物の出土も多い。合わせて7棟検出された竪穴住居跡の大半は奈良時代（8世紀前半頃）のものとされるが、他の住居跡で覆土の上位～中位に堆積している十和田a降下火山灰が、第3号及び第5号住居跡では床面まで達していることから、他の住居跡よりやや新しい時期のものとされている。

2．　方法

試料を室内で自然乾燥させたのち木口・柾目・板目の3断面を作製、実体顕微鏡と走査型顕微鏡(加速電圧10kv)観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。電子顕微鏡観察に当たっては㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝致します。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

3．　結果

No.1はススキ属に、No.2はクマシデ属に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名・和名は『日本の野生植物　草本Ⅰ』（佐竹ほか　1982）・『同　木本Ⅰ』(佐竹ほか　1989）にしたがい、一般的性質などについては『木の事典　第5巻』(平井　1980）も参考にした。また、県内での自然分布については『岩手県植物誌』(岩手植物の会　1970）を参照した。

・　ススキ属の一種（ススキ？）[Miscanthus　cf. sinensis]　イネ科　No.1

茎（桿）の基本組織の中に維管束が散在する不斉中心最性をもつ。一見したところ桿は中空であったが、組織の残存状態から本来は中実のものであると判断した。

炭化材の中には稀にタケ亜科（タケ・ササ類）が含まれることがあるが、タケ亜科は中空の桿をもち、試料より硬質の炭化物となることからそれ以外の草本のものと考えた。イネ科草本の中で、試料のように径が大きく木質化した桿をもつものとしてはススキとヨシ（Phragmites　commnis）が思いつくが、ススキの桿は中実であるがヨシの桿は中空である。河畔や湿地に生育する同属のオギ（M. sacchariflorus）の可能性もあるため、ススキ属（ススキ？）としておく。

・　クマシデ属の一種（Carpinus　sp.）　カバノキ科　No.2

散孔材で、管孔は放射方向に2～10個以上が複合する。横断面では楕円形。階段穿孔をもち、段（bar）数は10以下、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高のものと

集合組織よりなる。年輪界はやや明瞭。

クマシデ属はサワシバ（Carpinus　cordata）・クマシデ（C．japonica）・イヌシデ（C．tschonoskii）・アカシデ（C．laxiflora）の4種が自生する。イヌシデは岩手県が分布北限地で沿岸部に生育する。他の3種は山野に普通に見られ、二次林の構成種でも有る。材は一般的にやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

4．　考察

No.1はススキ属（ススキ？）に同定された。タケ亜科以外のイネ科草本が検出された例はほとんどないが、稀な例として、市内米沢遺跡の平安時代のものとされる3竪穴住居址（ＳＩ06・ＳＩ07・ＳＩ08）から検出されたイネ科草本（ススキ？）がある[1)]。それらを検討する中で筆者は、ススキがどのように火を受け、また消火すれば炭化「材」として検出されるのかを考えてみたが、結論は得られなかった。

試料は覆土の中位から検出されていることから、床に敷かれていた敷き藁のようなものではない。その層準の上下からはこの住居を構築していた部材とみられる炭化材も検出されていることから、壁や屋根に使われていたススキ（茅）を想定したい。ススキであればそのほとんどは木材より早く火が回り灰になってしまうものと思うが、例えば、屋根に葺かれていたススキの一部に火がついた時点で土屋根[2)]がくずれ、空気から遮断された状況で炭化が進む蒸焼き状態になった、すなわち伏せ焼き（坑内製炭）法（岸本・杉浦　1980）による製炭と同様の状況が起こったとすれば、試料のような草本の炭化「材」も得られるかもしれない。その場合には、炭化「材」の周囲から検出される土は覆土ではないことになる。今後はこのような視点での調査・検討も必要ではなかろうか。

＜注＞

1）『米沢遺跡出土炭化材樹種同定報告書』（木工舎「ゆい」　1999）を参照のこと。

2）土屋根が明瞭に認められた発掘例はごく限られているが、筆者は群馬県渋川市の中筋遺跡（群馬県渋川市教育委員会　1988）や同子持村の黒井峯遺跡（子持村教育委員会　1987）での発掘調査に立ち会って以来、一般的な形態であったものと考えている。

引用文献

群馬県渋川市教育委員会　1988　『中筋遺跡　第２次発掘調査概要報告書』渋川市発掘調査報告書第18集　51pp.

平井　信二　1980　『木の事典　第５巻』かなえ書房.

岩手植物の会　1970　『岩手植物誌』703pp.

岸本　定吉・杉浦　銀治　1980　『日曜炭やき師入門』総合科学出版253pp.

子持村教育委員会　1987　『昭和61年度黒井峯遺跡発掘調査概要』子持村文化財報告第６集　18pp.

佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫編　1982　『日本の野生植物　草本Ⅰ』平凡社305pp.

佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫編　1989　『日本の野生植物　木本Ⅰ』平凡社321pp.

2．　上台遺跡出土種実の同定

高橋　利彦（木工舎「ゆい」）

1．　試料

試料は第2号竪穴住居跡Q4の貼床（床面下5㎝）から採取された土壌で、スチロールシャーレー（呼び径95㎜）に2杯分（およそ120*ml*）あった。この住居は奈良時代（8世紀前半頃）のものとされ、今回確認された住居跡の中では最も大きく（最大幅約9.5m）、中心的な役割を担っていたと考えられている。貼床の材料とされた土壌は竪穴部分にあったものではなく、他所から運び込まれたものとみられている。

2．　方法

土壌は乾燥していた。これを小量ずつ約1㎜の篩[1)]で静かにふるい、残った土壌中から種実と思われるものを実体顕微鏡下で拾い上げ、これらを精査・同定し計数した。写真図版も作製した（図版2）。分離された種実は岩手県立埋蔵文化財センターに保管されている。

3．　結果

以下の2分類群と種類不明の種実が確認できた。（　）内の数字は個体数で、破片も1個に数えた。学名・和名は『日本の野生植物　草本Ⅰ・Ⅱ』(佐竹ほか　1982）にしたがい、現生種の県内での分布については『岩手県植物誌』(岩手植物の会　1970）を参照した。

エノコログサ属の一種（Setaria　sp.）	イネ科	(139)
カナムグラ（Humulus　japonicus）	クワ科	(32)
不明		(30)

エノコログサ属はエノコログサ（S. viridis）・アキノエノコログサ（S. faberi）・キンエノコロ（S. glauca）の3種が自生する。この地に、エノコログサから育成されたとされる渡来種のアワ（S. italica）が古くから栽培され、またエノコログサとの間に雑種もあるという。いずれも草丈のやや高い1年草で、路傍や草地・畑地などに生育するが、アキノエノコログサは半日陰を好み林内にも生育する。

完形のものはなく、大半が果皮片であったが種子も4個あった。この種子はエノコログサより先端が丸みを帯び、アワの形状に似ているがアワより明らかに大きい。

カナムグラは林縁や路傍などに生育するつる性の1年草である。

ほぼ完形のものが数個あるが大半は種皮片で、不明とした中にもその種皮片と似ているものがあるが確定できなかった。

4．　考察

同定できた2つの分類群は、当時の人々がその種実や茎葉を（食用や薬用あるいは住居の構築材などとして）利用するために住居内に意図的に持ち込んだものとは考えにくい。エノコログサなどは種子（正しくは果実）をつけたままで立ち枯れていることもあるから、例えば焚き付けとして持ち込んだ枯草から床にこぼ

れたこともあったかもしれない。しかし、そのようなことがあったとしてもその数はごく僅かで、試料のように床面から5㎝下に多くの種実が集積するとは考えられない。やはり貼床の材料として運び込まれた土壌の中に元々含まれていたと考える方が妥当であろう。

両分類群とも、例えば居住域とその周囲の林地との境界や畑地の周辺、路傍など人間の生活域に隣接した「半自然」な立地に生育する草本（＝「人里植物」）で、種実の大半は母植物の周辺に散布される。したがって、異なった環境にある場所の土壌を混ぜ合わせて貼床としたということがなければ、この床材の土壌は、上記のような、人間の生活域に隣接した場所から採取してきたものと考えてよいだろう。

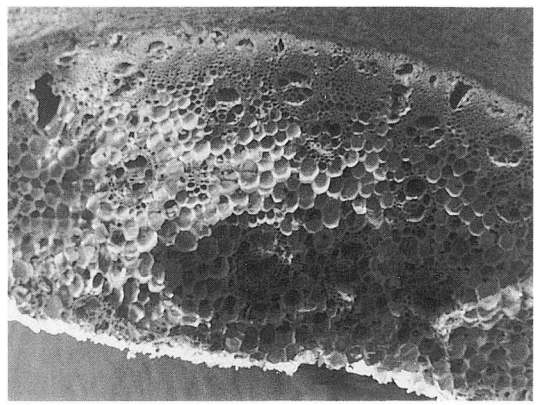
＜注＞

1）粒径分離を目的にしたものではなく、細かな土壌を除くための篩別であるため、市販の家庭用篩を使用した。

引用文献

岩手植物の会　1970　『岩手県植物誌』703pp.

佐竹　義輔・原　寛・亘理　俊次・富成　忠夫（編）　1982　『日本の野生植物　草本Ⅰ・Ⅱ』平凡社　305・318pp.



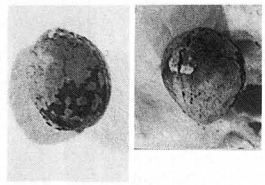
No.1　ススキ属の一種（ススキ？）　桿の横断面×40

木口×40　　柾目×100　　板目×100

No.2　クマシデ属の一種

図版1

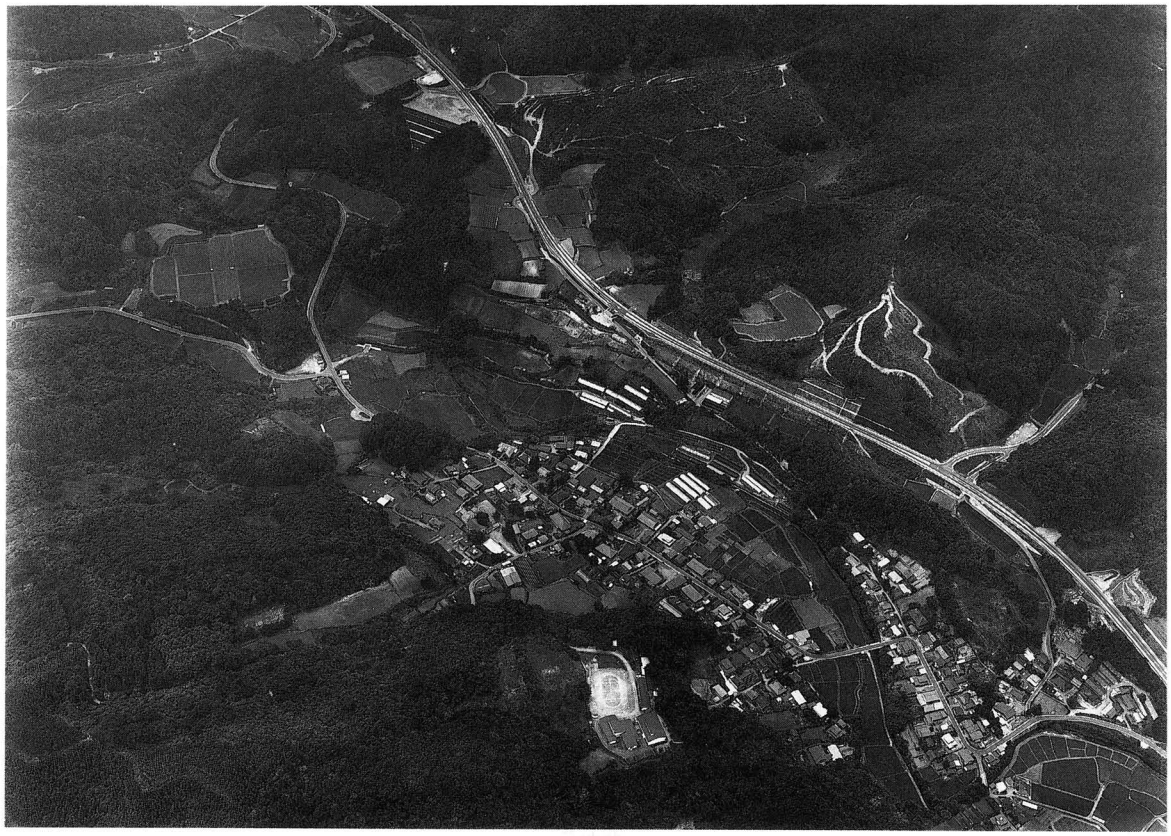
エノコログサの一種 左から果皮の背面（背軸面），同腹面（向軸面），種子の背面（別個体）×4



カナムグラ（同一固体）×4

図版2

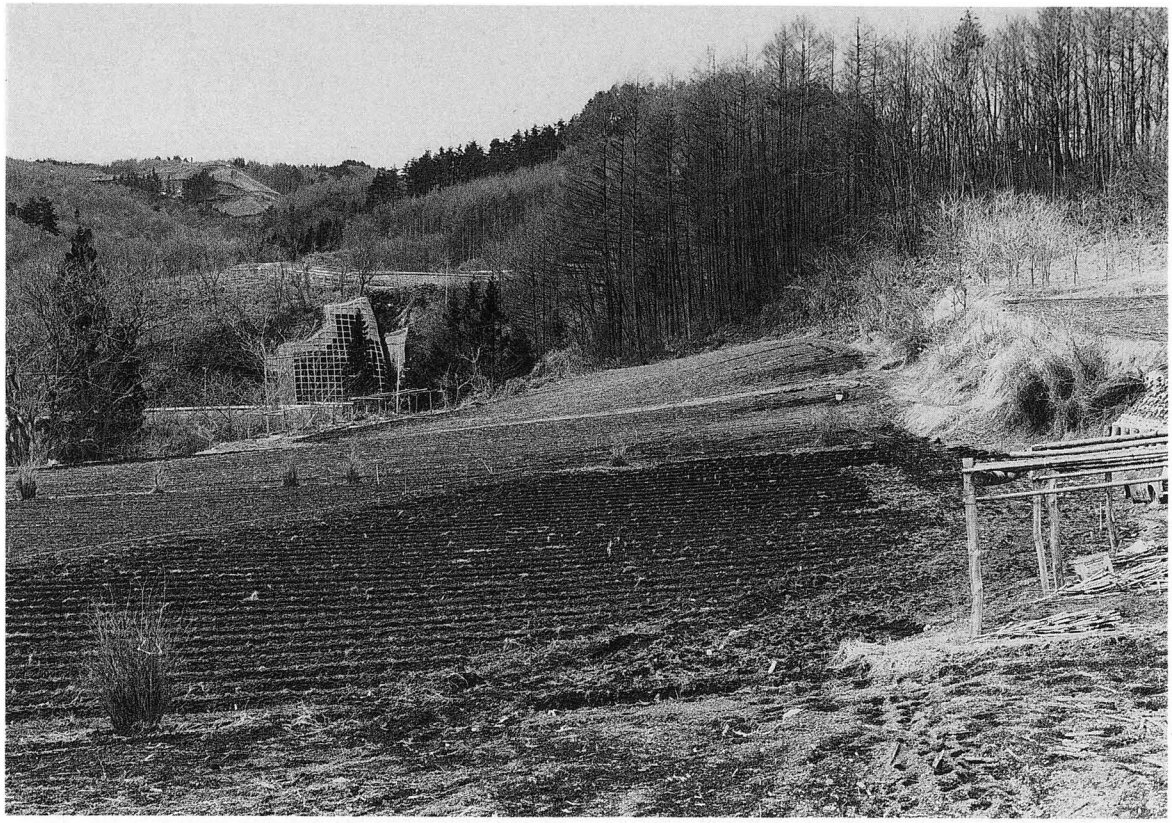
写　真　図　版



東から

東から

写真図版１　遺跡全景



北から

南から

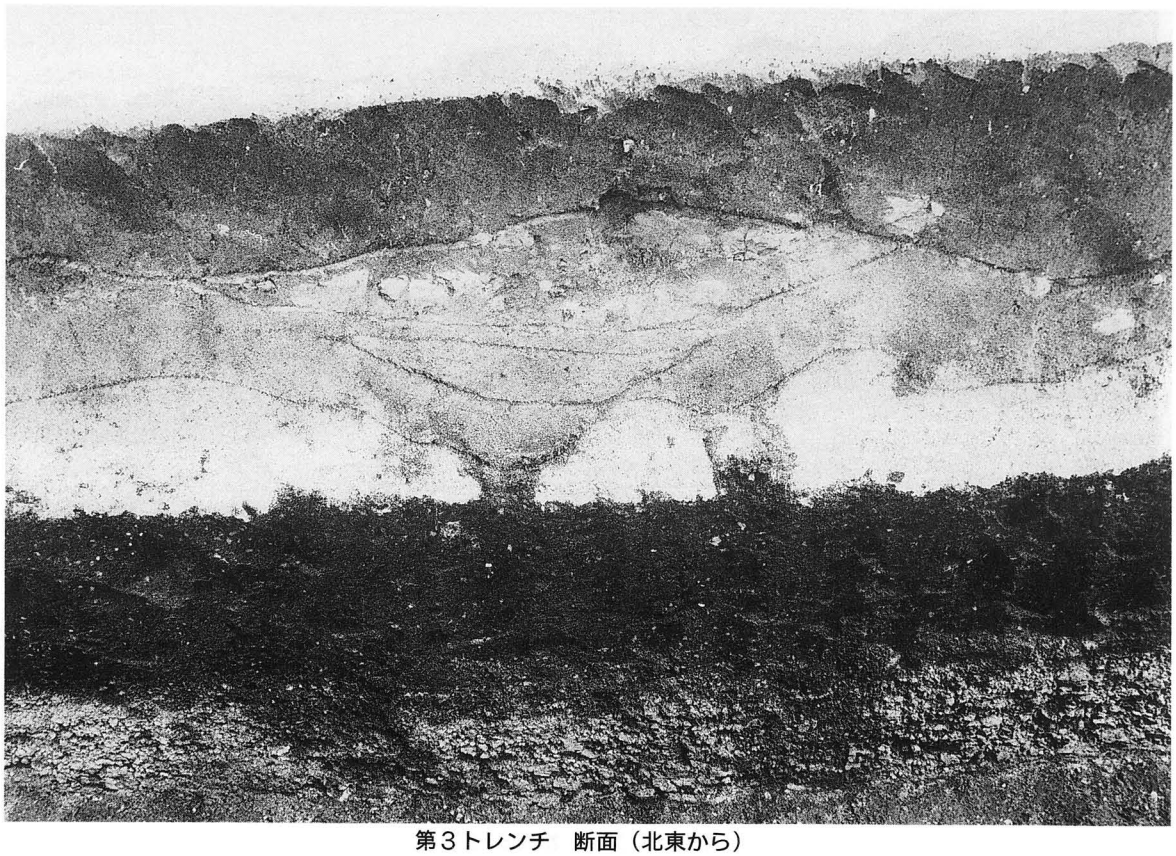
写真図版２　調査前風景

第１トレンチ　断面A－A’

第２トレンチ　断面B－B’

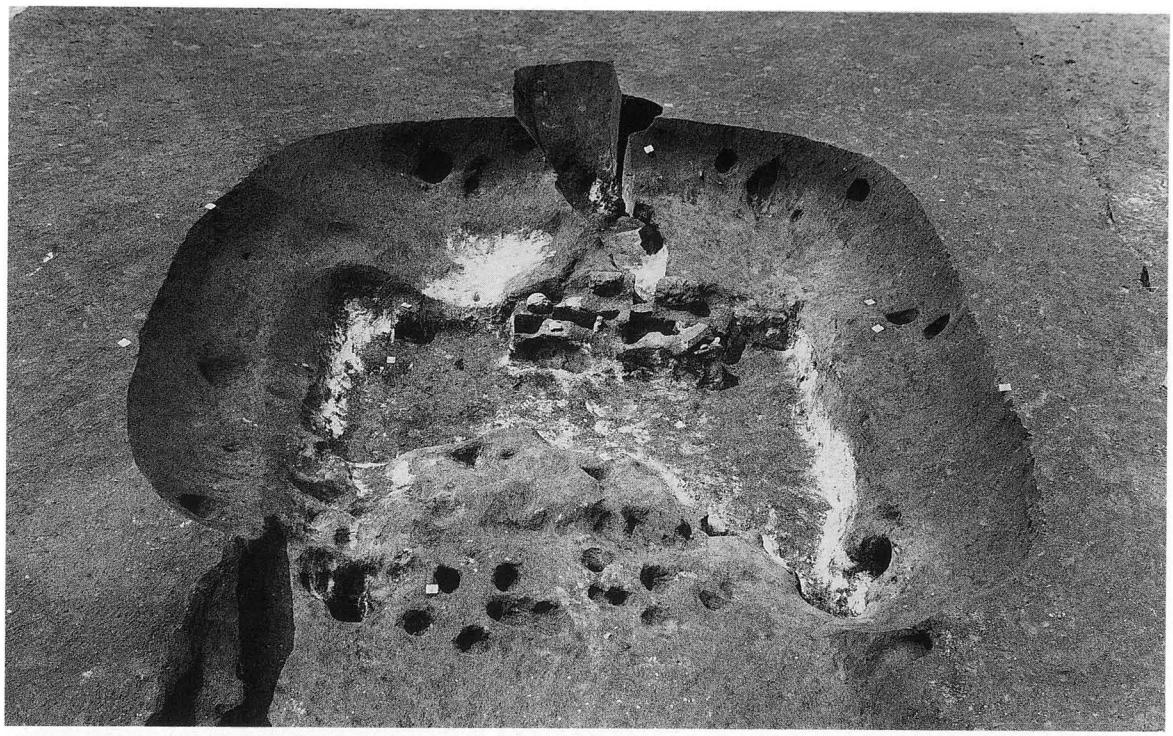
写真図版３　基本層序(1)

第３トレンチ（東から）

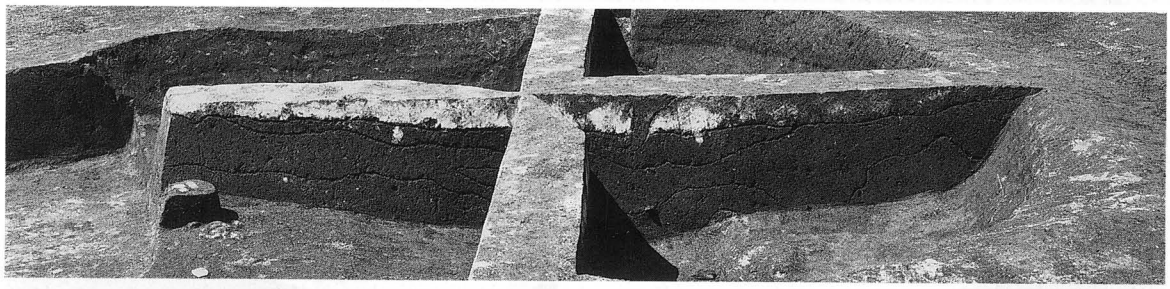


第３トレンチ　断面（北東から）

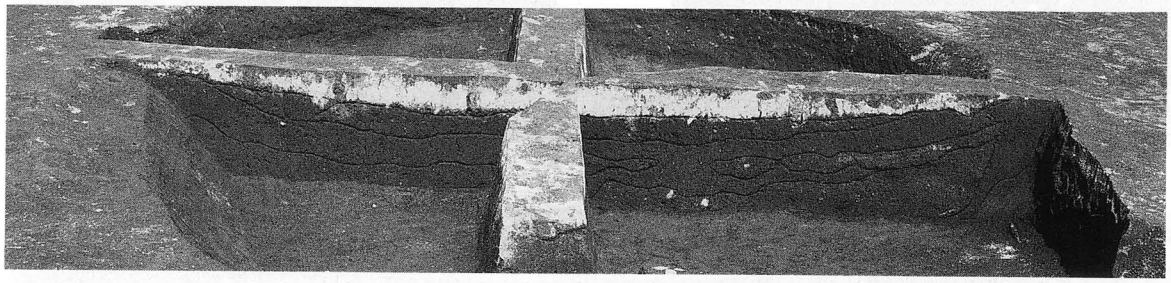
写真図版４　基本層序(2)



第１号竪穴住居跡　平面

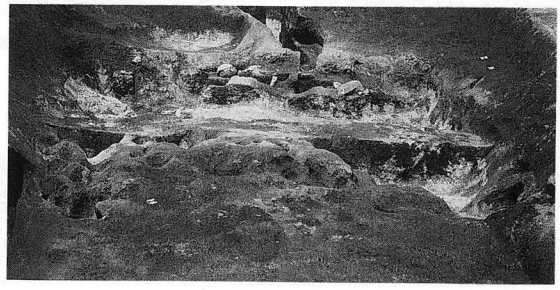


断面Ａ－Ａ’



断面Ｂ－Ｂ’

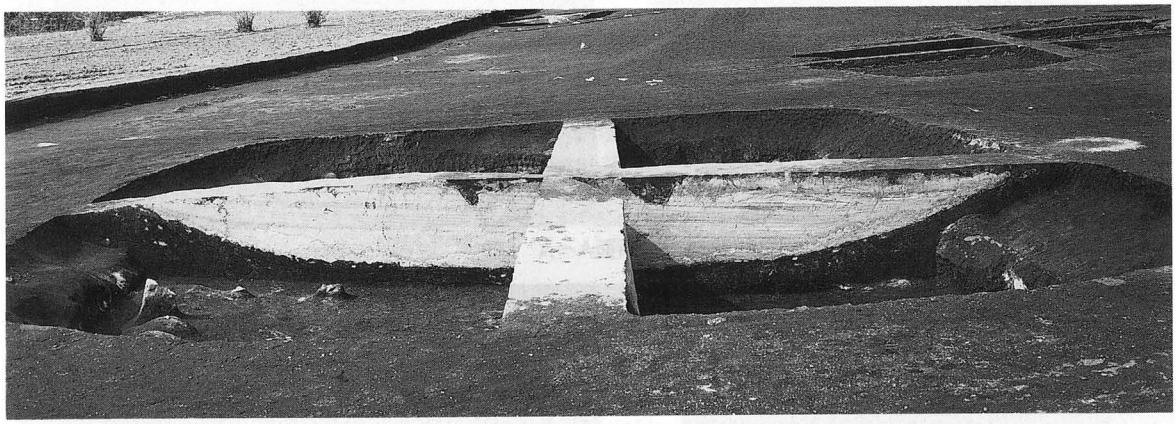
カマド断面ａ－ａ’



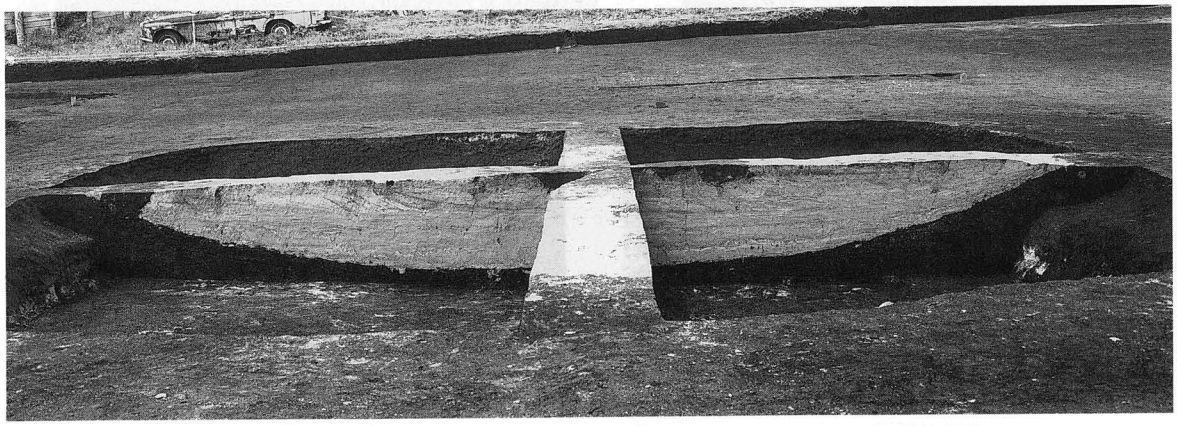
貼り床断面Ｃ－Ｃ’

写真図版５　第１号竪穴住居跡

第２号竪穴住居跡　平面

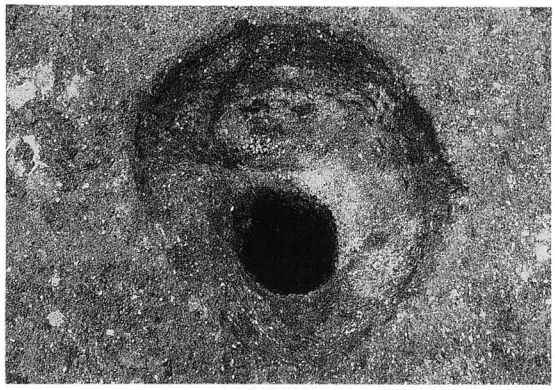


断面A－A’

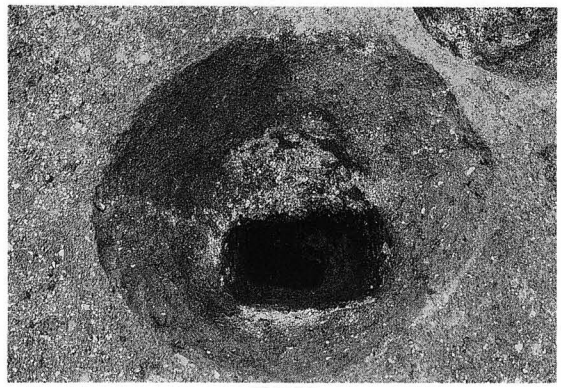


断面B－B’

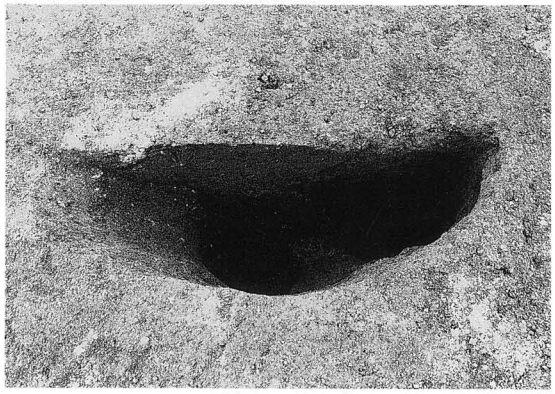
写真図版６　第２号竪穴住居跡(1)



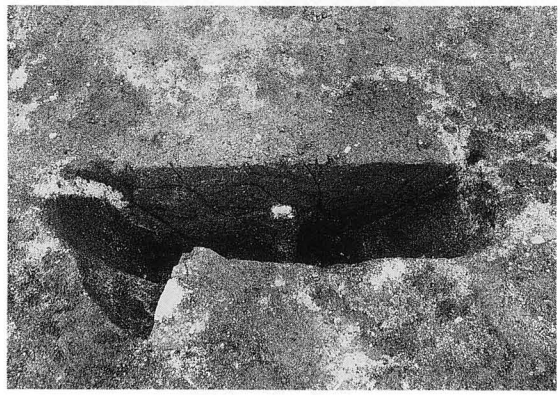
P1平面（北西から）



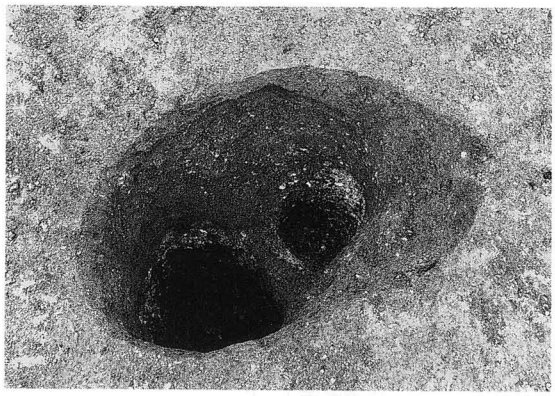
P4平面（北西から）



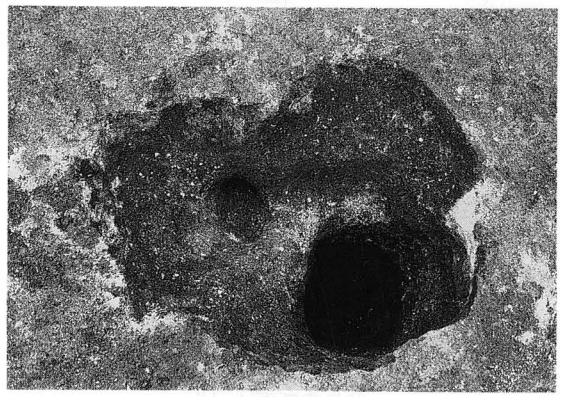
P2断面（南東から）



P3断面（南東から）

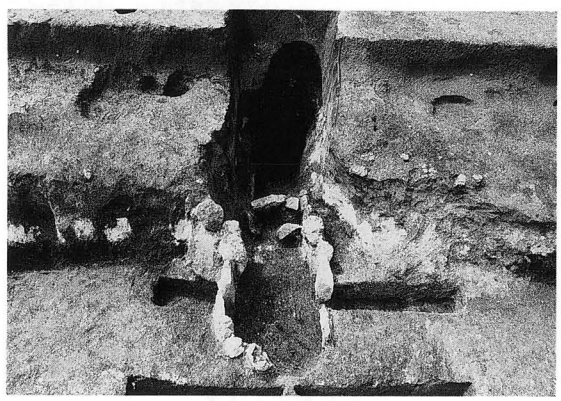


P2平面（北西から）



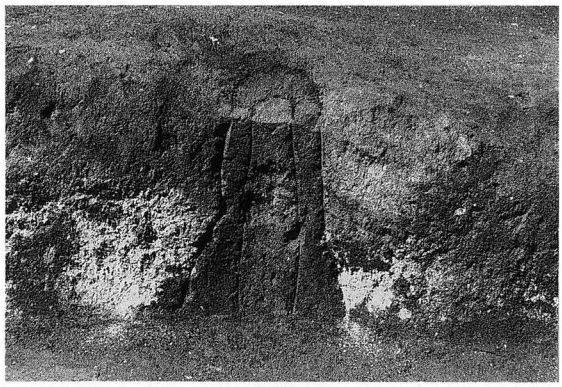
P3平面（北西から）

カマド断面a－a'



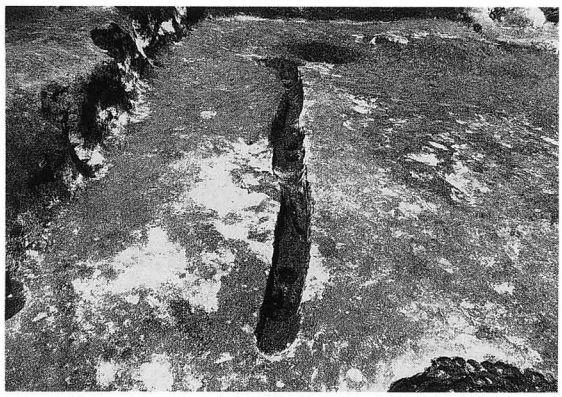
カマド芯材検出状況

写真図版７　第２号竪穴住居跡(2)



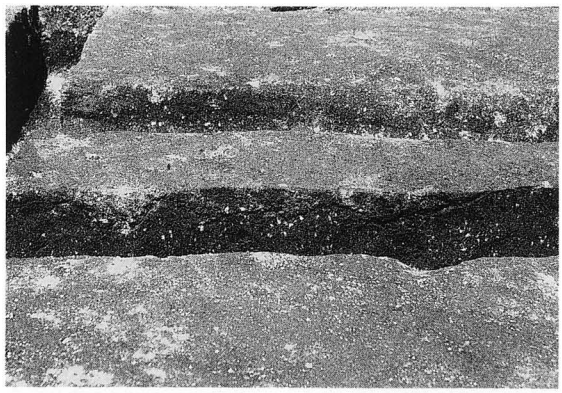
P7断面

P33平面

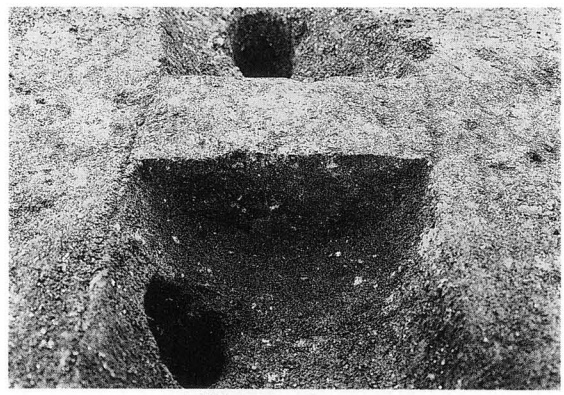


床溝（P3－P4間）

床溝（P1－P2間）

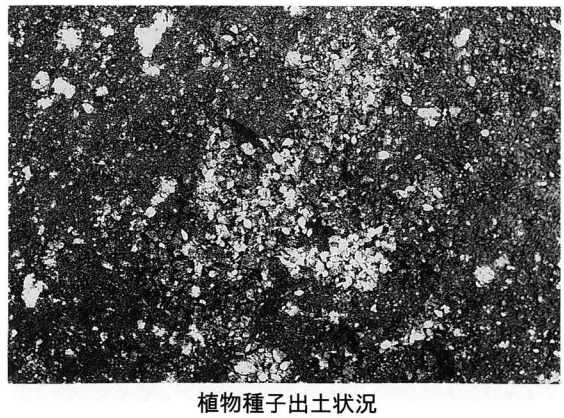


貼り床断面H－H'



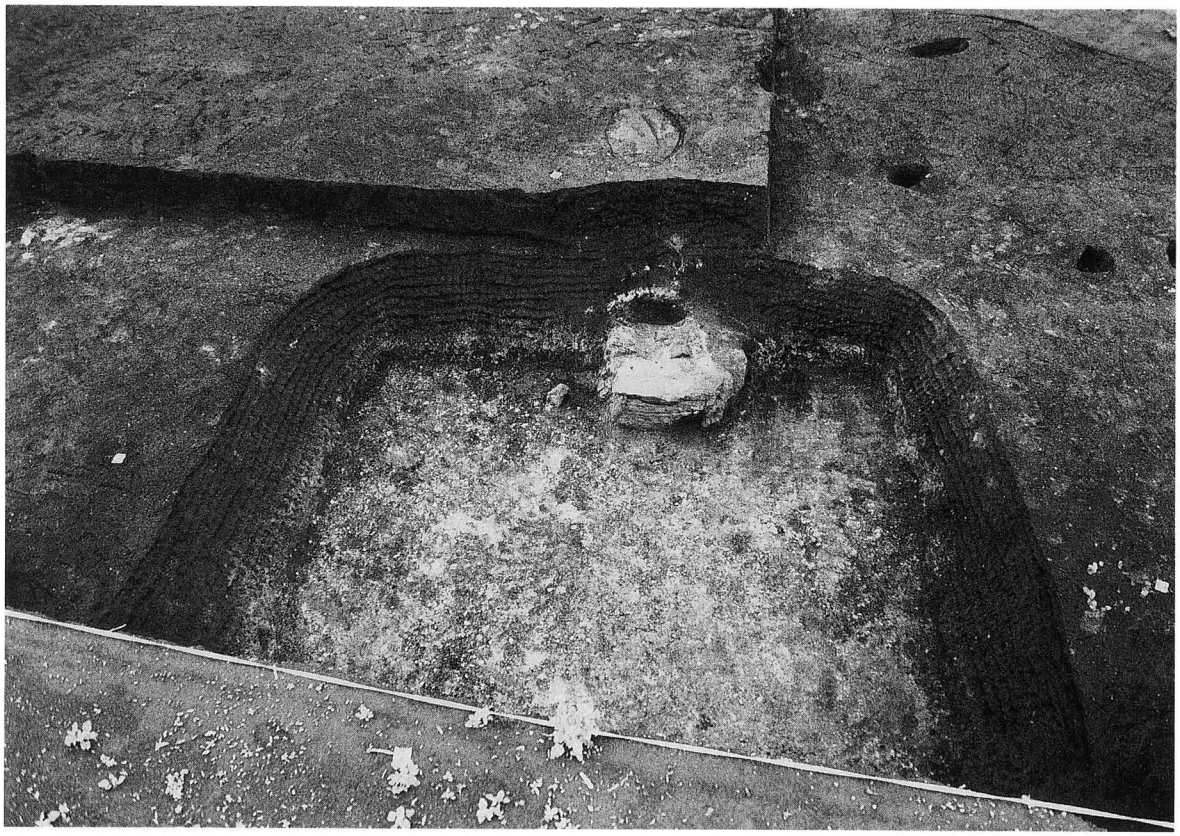
床溝断面J－J'

炭化材出土状況

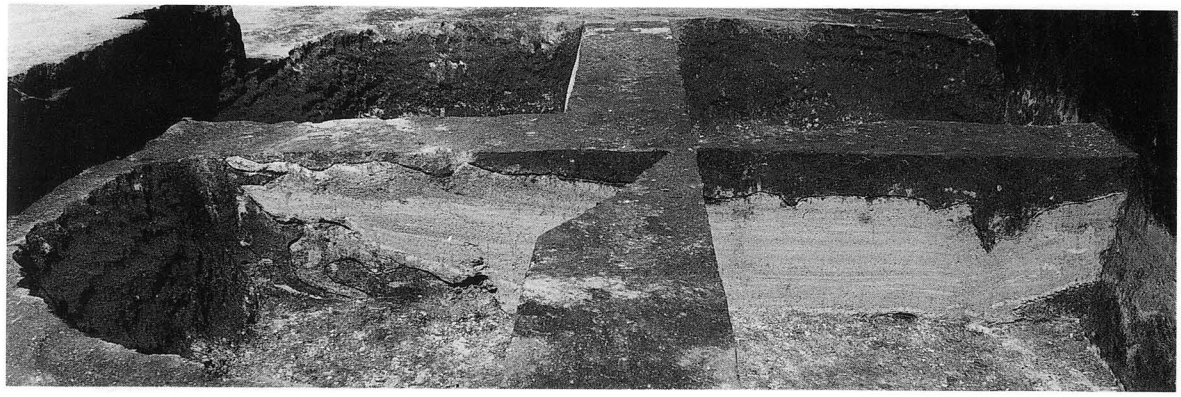


植物種子出土状況

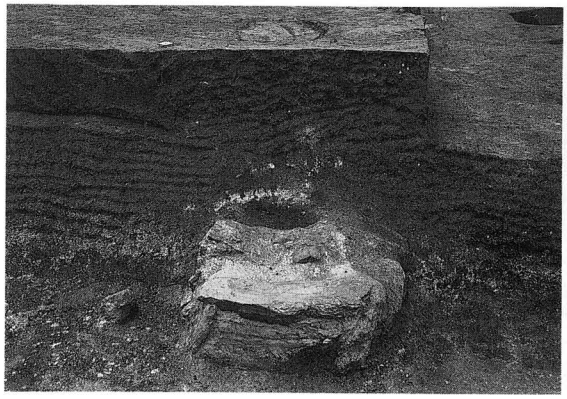
写真図版８　第２号竪穴住居跡(3)



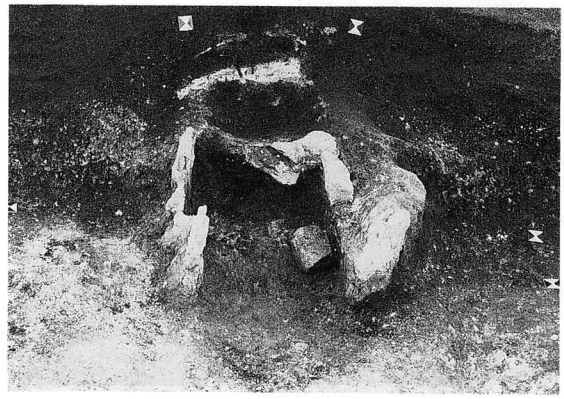
第３号竪穴住居跡　平面



断面A－A’



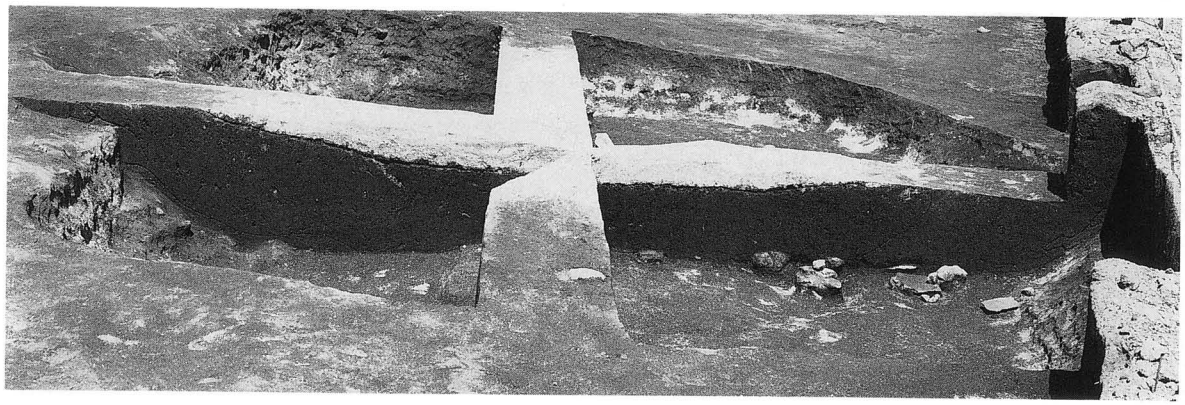
カマド検出状況



カマド芯材検出状況

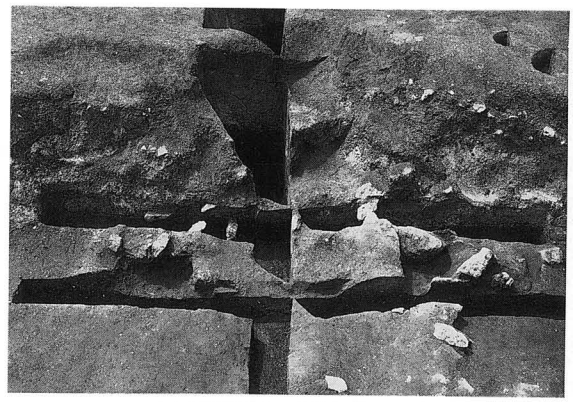
写真図版９　第３号竪穴住居跡

第４号竪穴住居跡　平面



断面A－A’

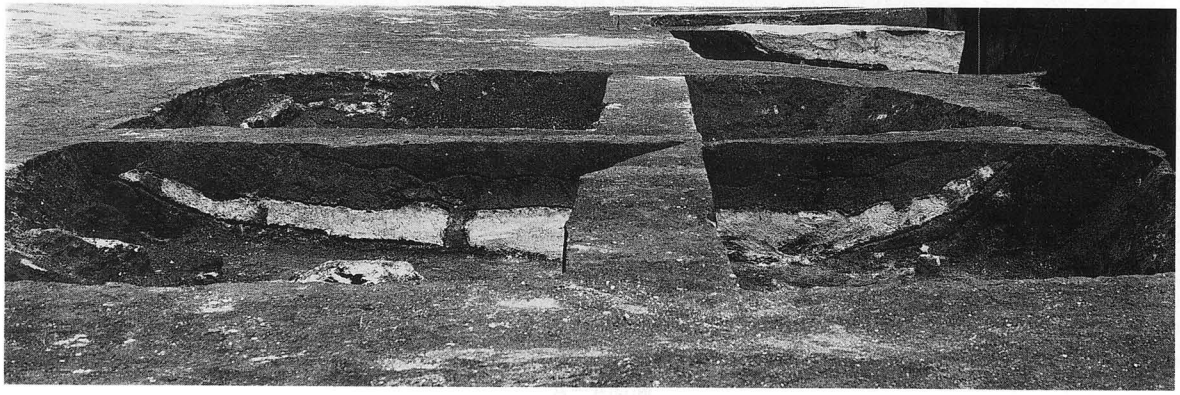
カマド断面a－a’



カマド断面b－b’及びc－c’

写真図版10　第４号竪穴住居跡

第５号竪穴住居跡　平面



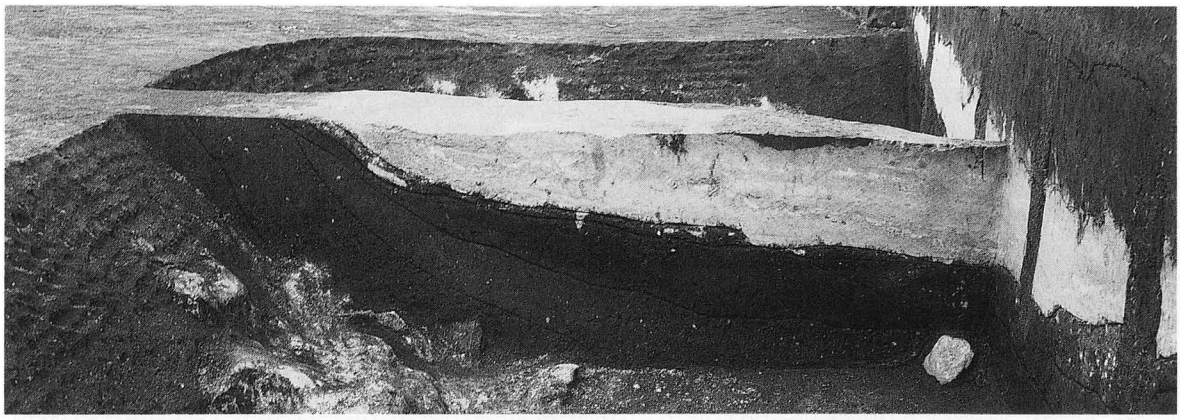
断面A－A’

カマド断面e－e’

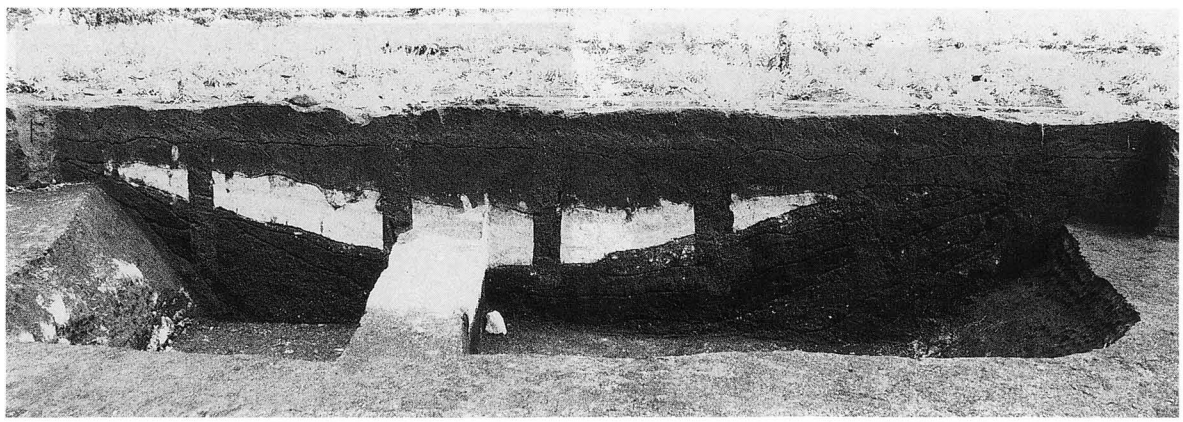
P1平面

写真図版11　第５号竪穴住居跡

第６号竪穴住居跡　平面

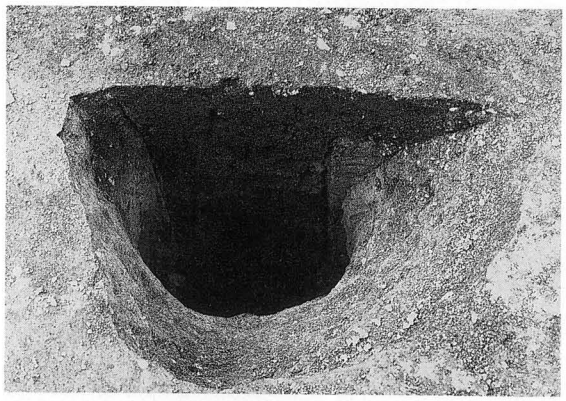


断面A－A’

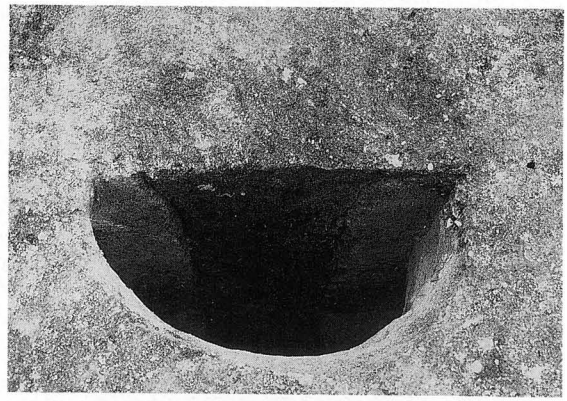


断面B－B’

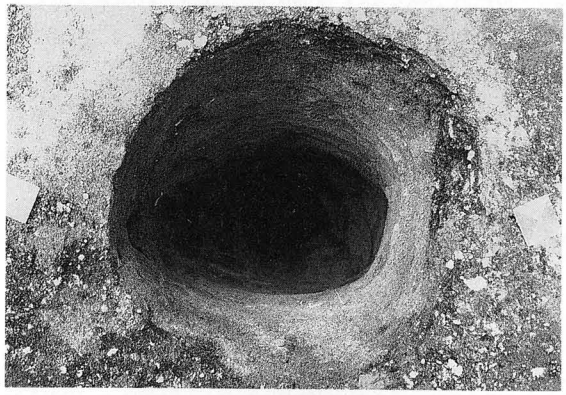
写真図版12　第６号竪穴住居跡(1)



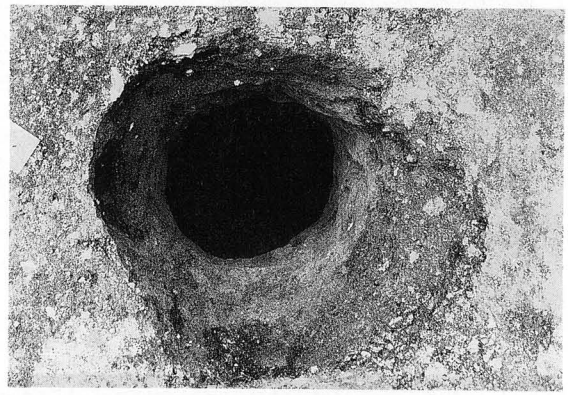
P2断面



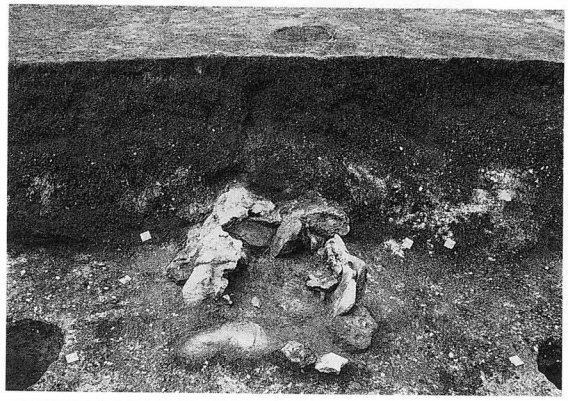
P1断面



P2平面



P1平面

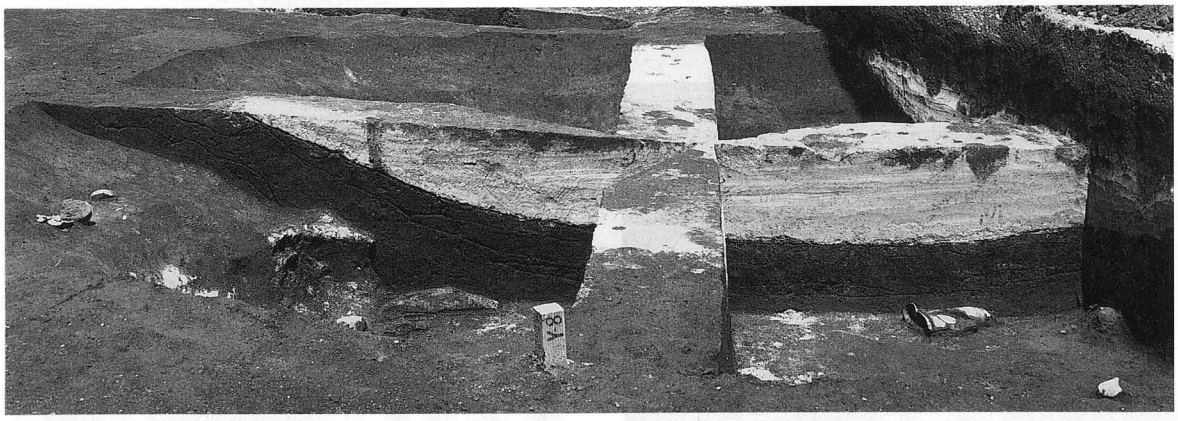


カマド検出状況

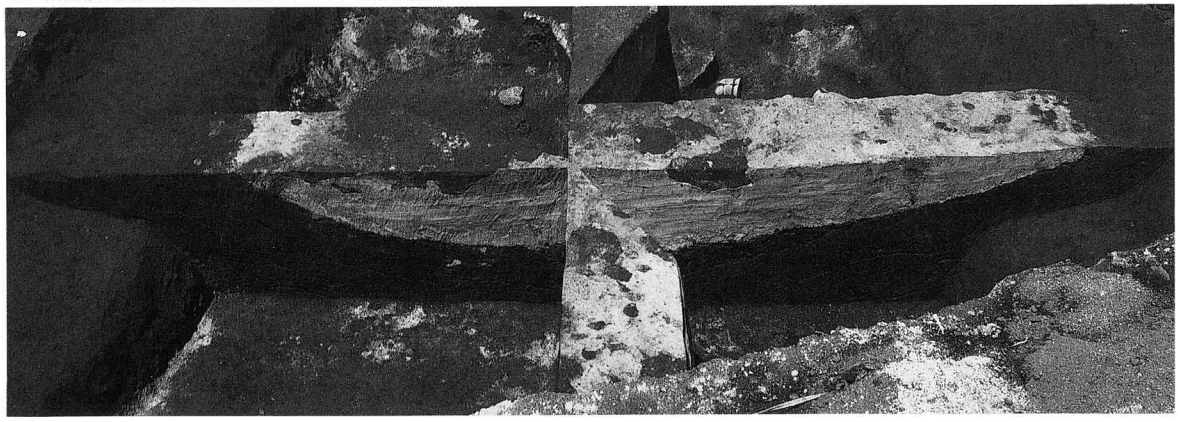
カマド断面a－a'

写真図版13　第６号竪穴住居跡(2)

第７号竪穴住居跡　平面

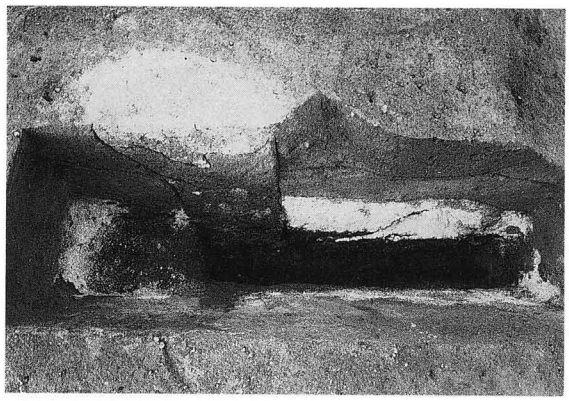


断面A－A’

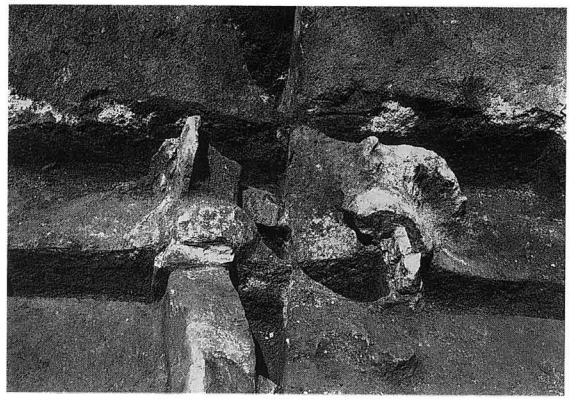


断面B－B’

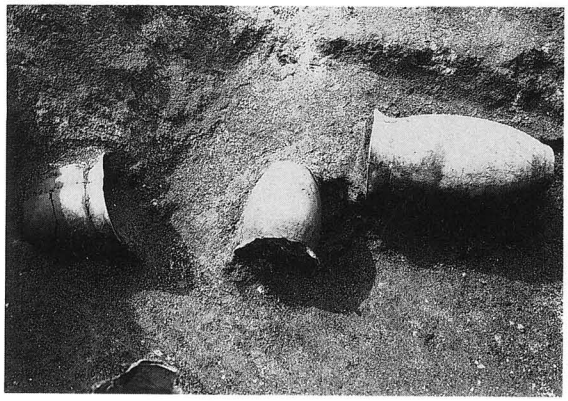
写真図版14　第７号竪穴住居跡(1)



カマド断面a－a’

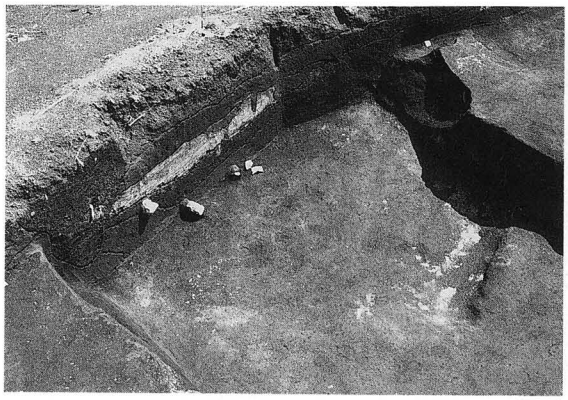


カマド断面b－b’及びc－c’

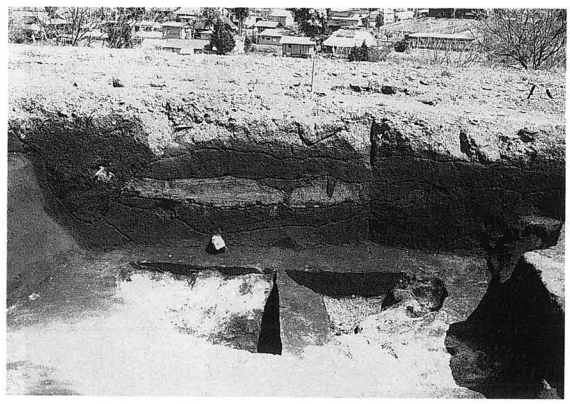


Q1床面壁際土器出土状況（南東から）

Q4棚状張り出し部土器検出状況（南西から）

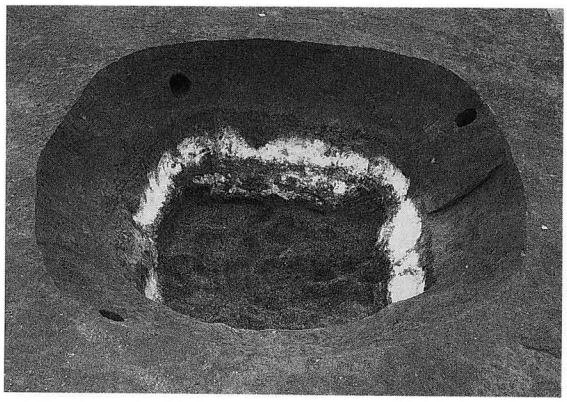


第１号竪穴住居状遺構　平面（北から）

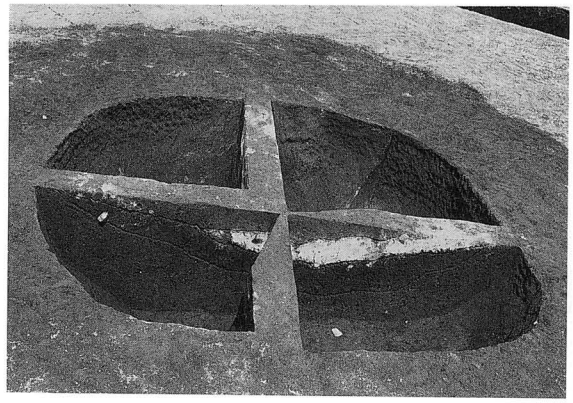


断面A－A’及びB－B’

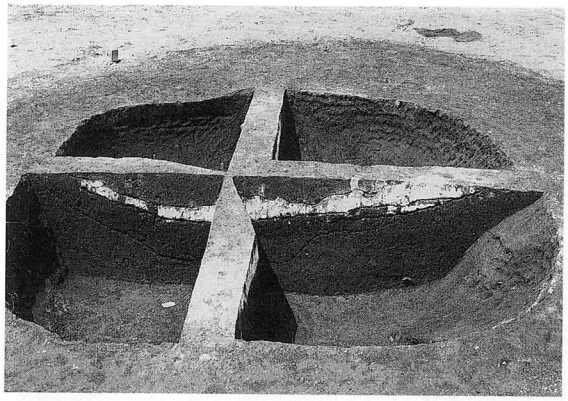
写真図版15　第７号竪穴住居跡(2)・第１号竪穴住居状遺構



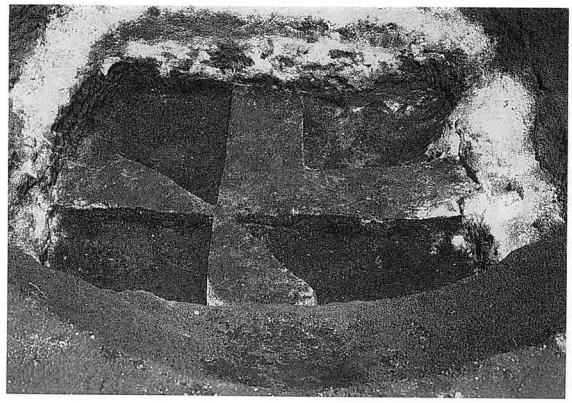
第３号竪穴住居状遺構　平面



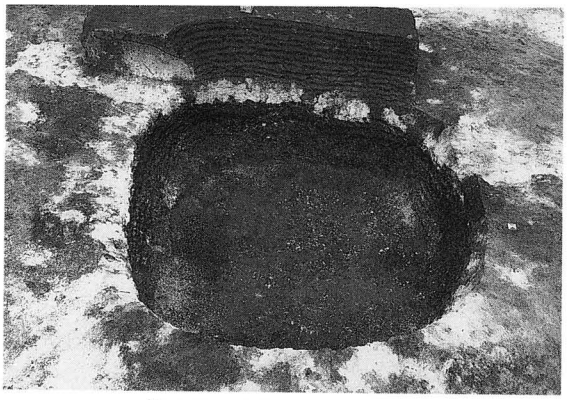
断面A－A’



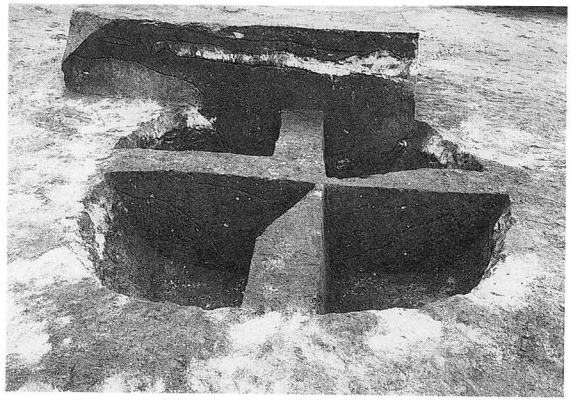
断面B－B’



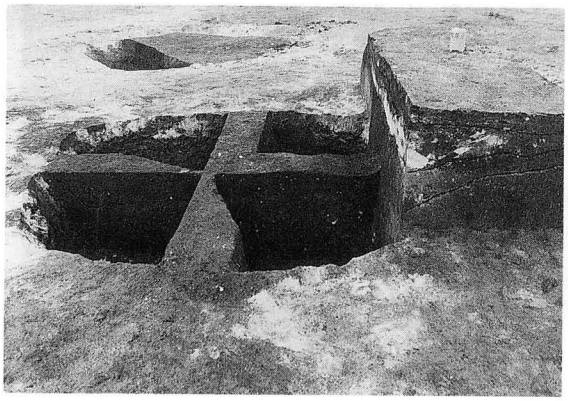
貼り床断面D－D’



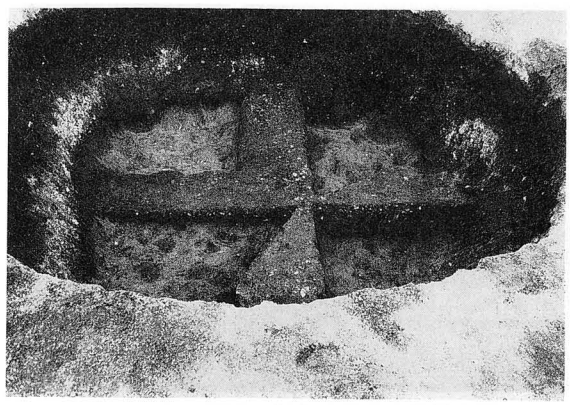
第３号竪穴住居状遺構　平面



断面A－A’



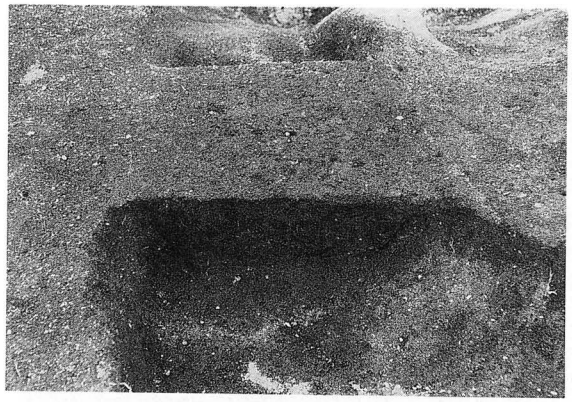
断面B－B’



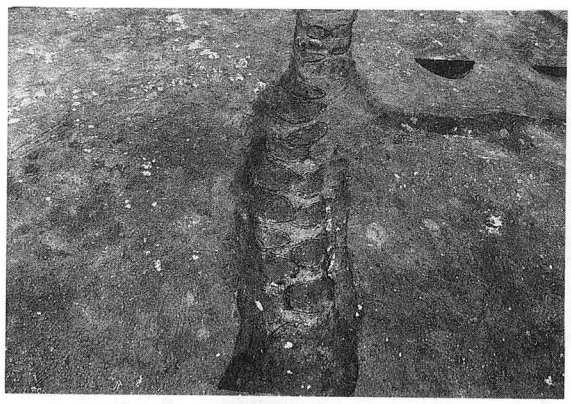
貼り床断面A－A’

写真図版16　第２号・第３号竪穴住居状遺構

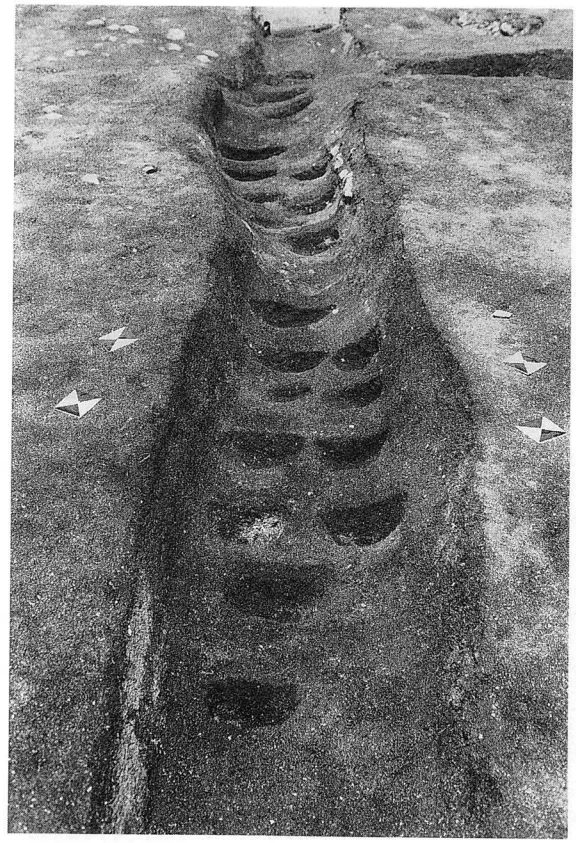
第１号方形溝状遺構　平面



断面B－B’付近

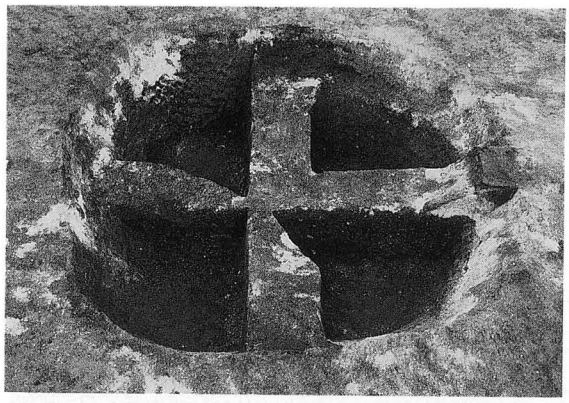


溝底面検出状況（南西側・南東から）

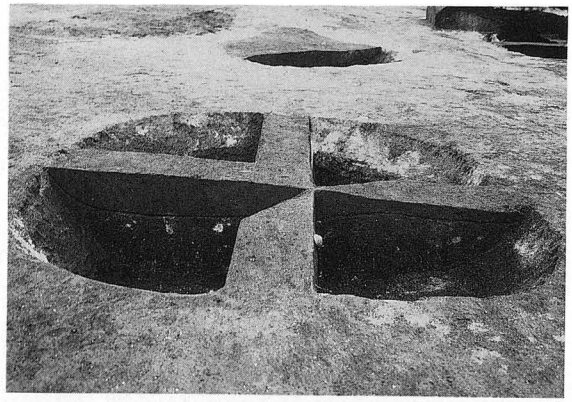


溝底面小ピット断面I－I’、J－J’付近

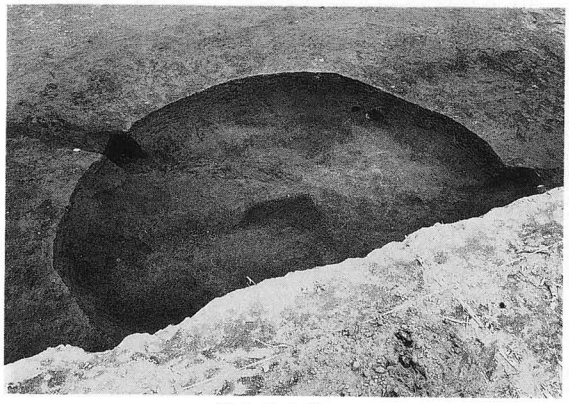
写真図版17　第１号方形溝状遺構



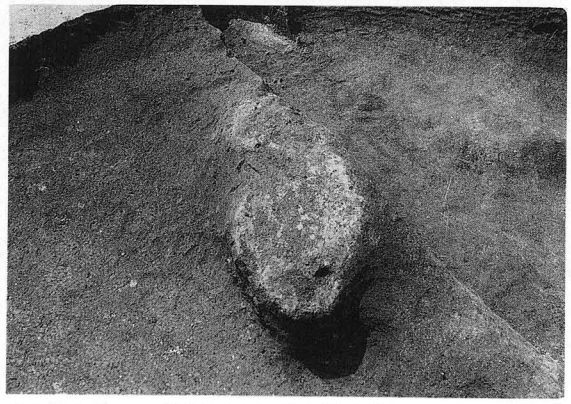
第１号土坑平面



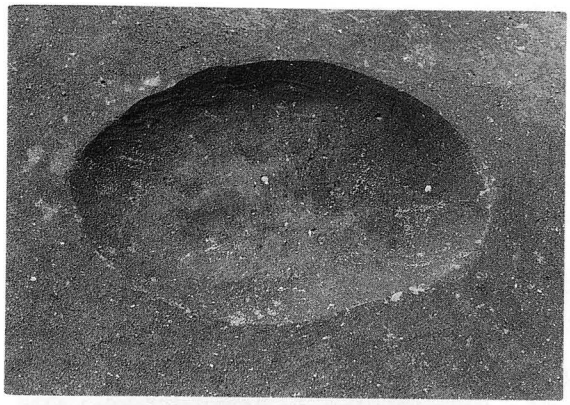
第１号土坑断面



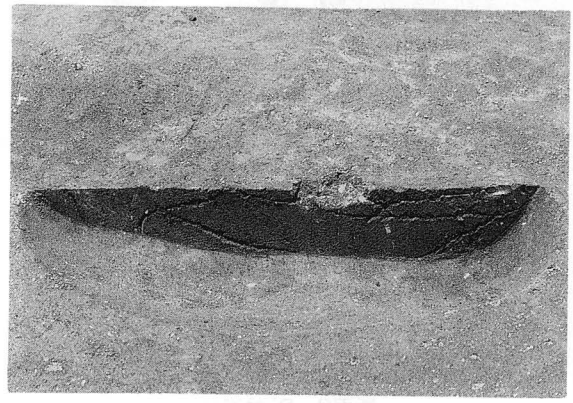
第２号土坑平面



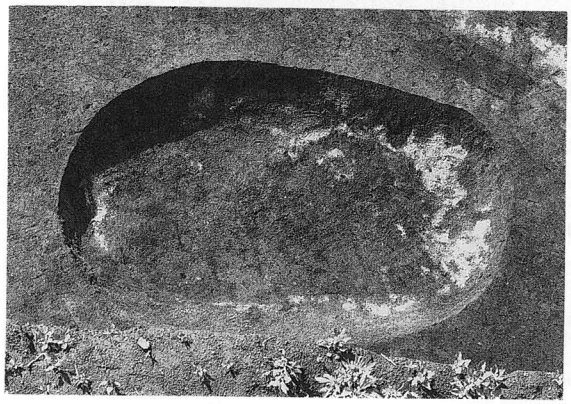
第２号土坑焼土検出状況



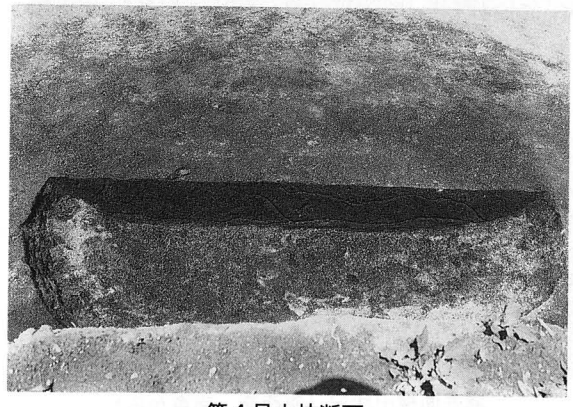
第３号土坑平面



第３号土坑断面

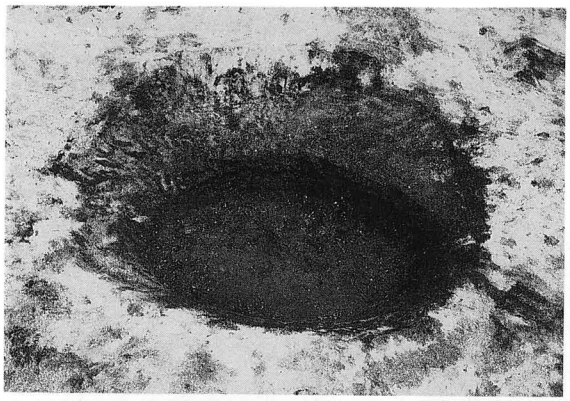


第４号土坑平面

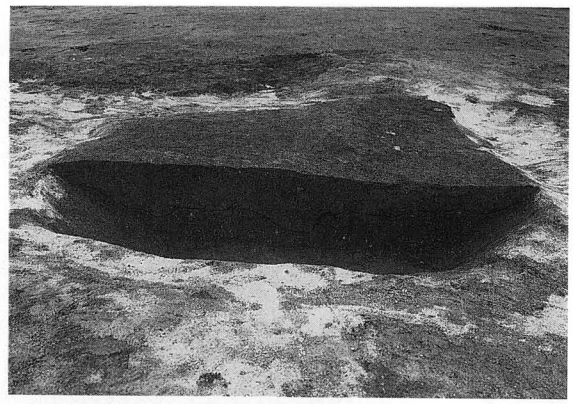


第４号土坑断面

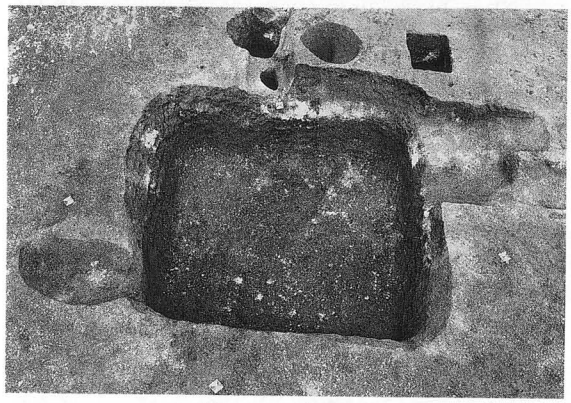
写真図版18　土坑(1)



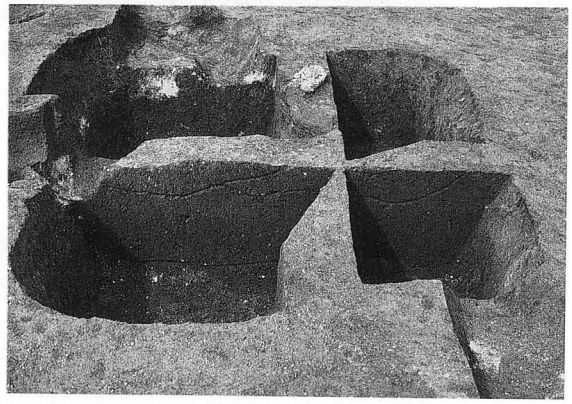
第５号土坑平面



第５号土坑断面

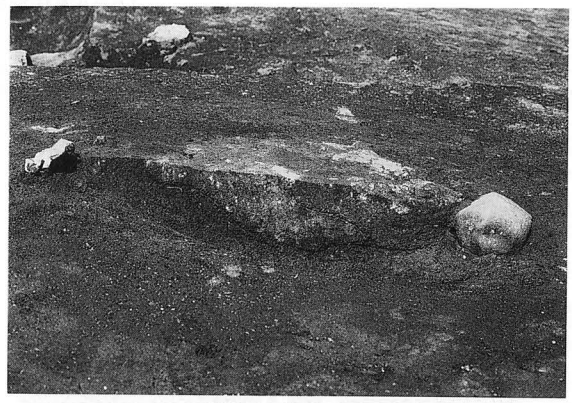


第６号土坑平面



第６号土坑断面

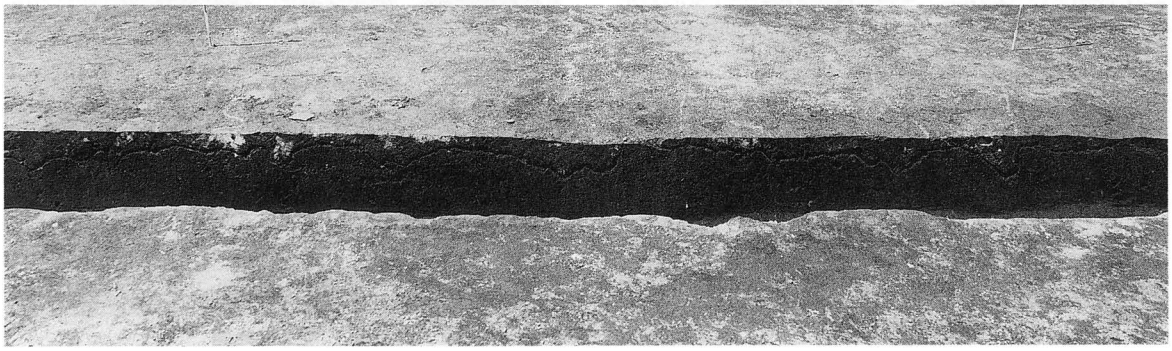
第７号土坑平面



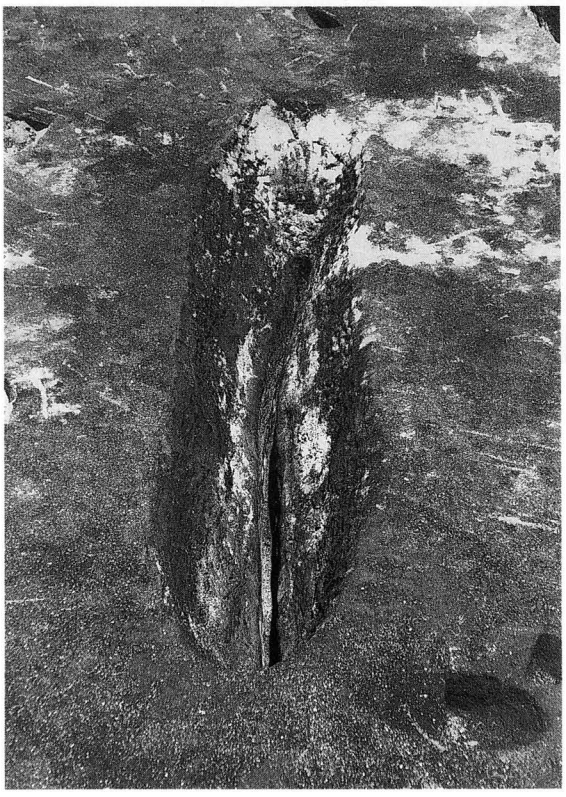
第７号土坑断面

写真図版19　土坑(2)

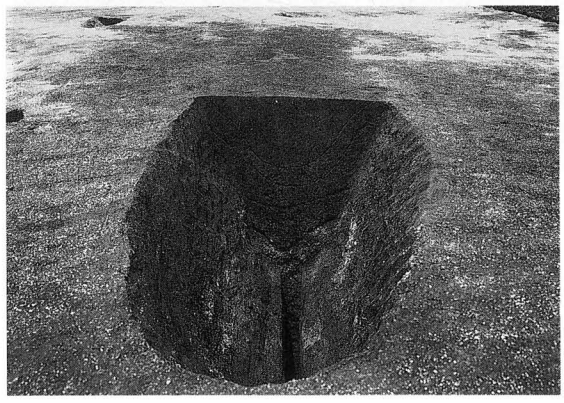
To－a溝状堆積範囲　検出状況



To－a溝状堆積範囲　断面



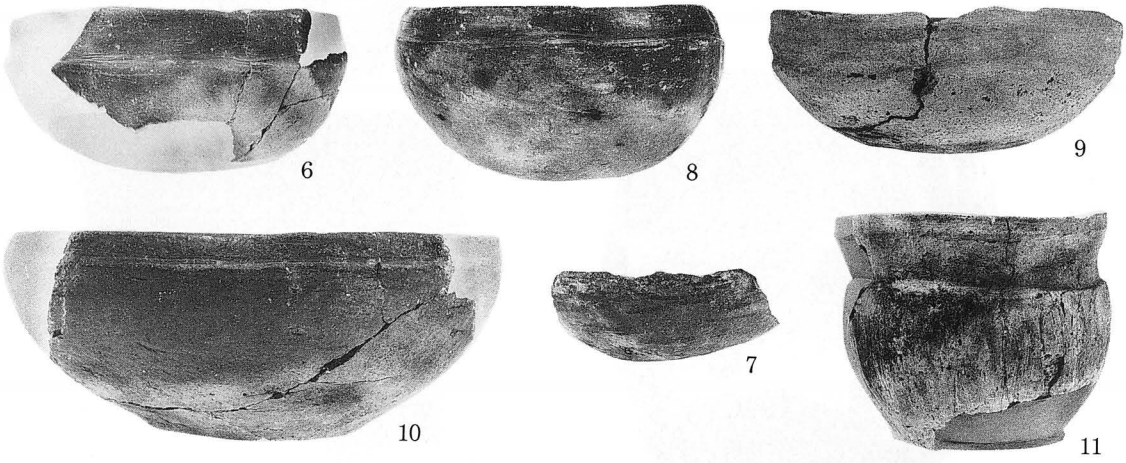
第１号陥し穴状遺構平面

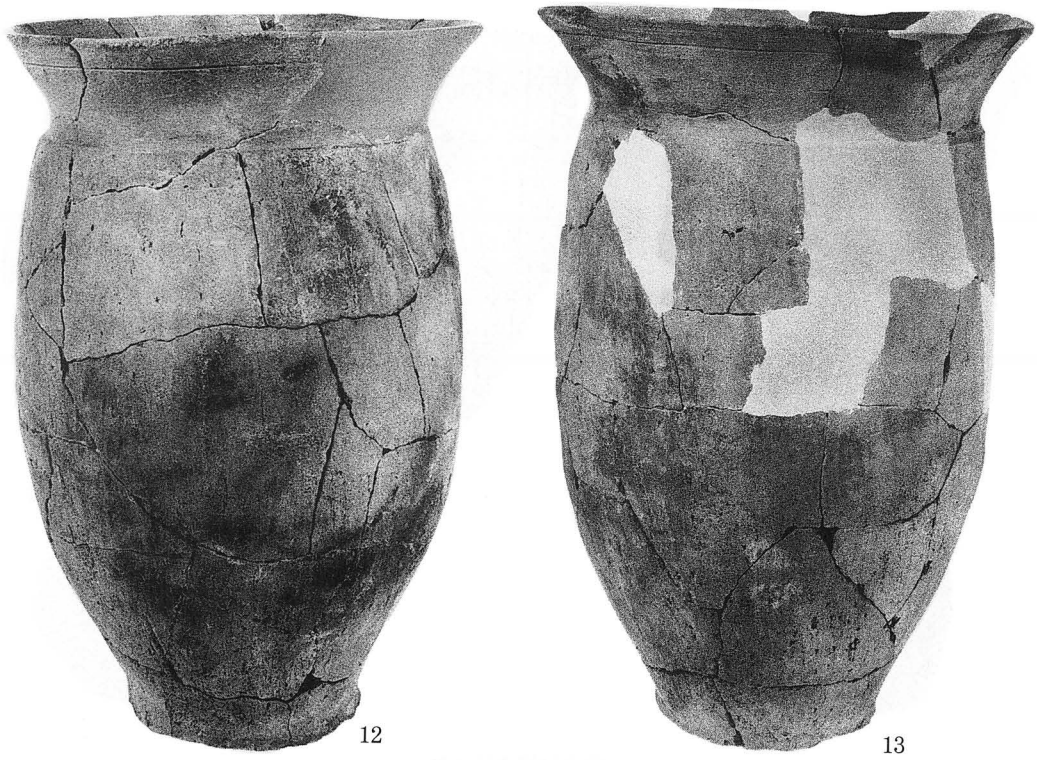


第１号陥し穴状遺構断面

写真図版20　To－ａ溝状堆積範囲・第１号陥し穴状遺構

第１号竪穴住居跡





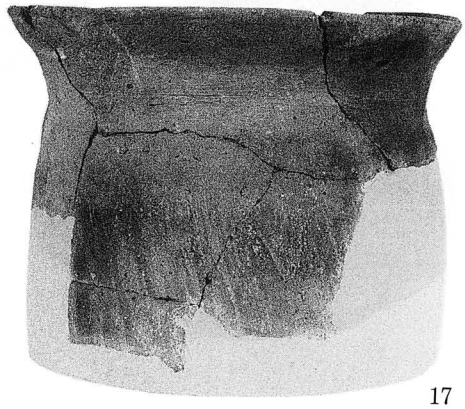
第２号竪穴住居跡

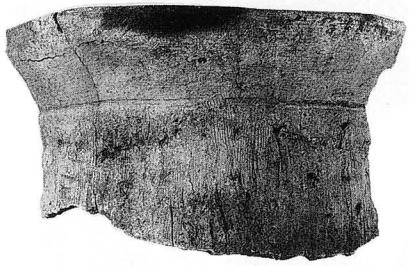
写真図版21　出土遺物(1)

14

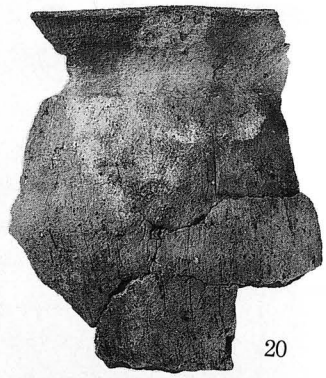
15

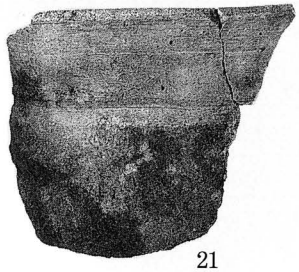
16

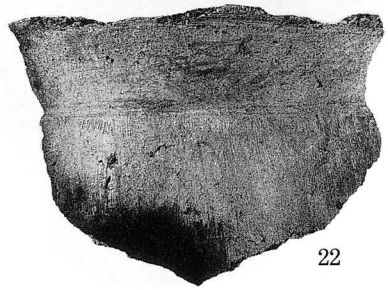

17


18

19

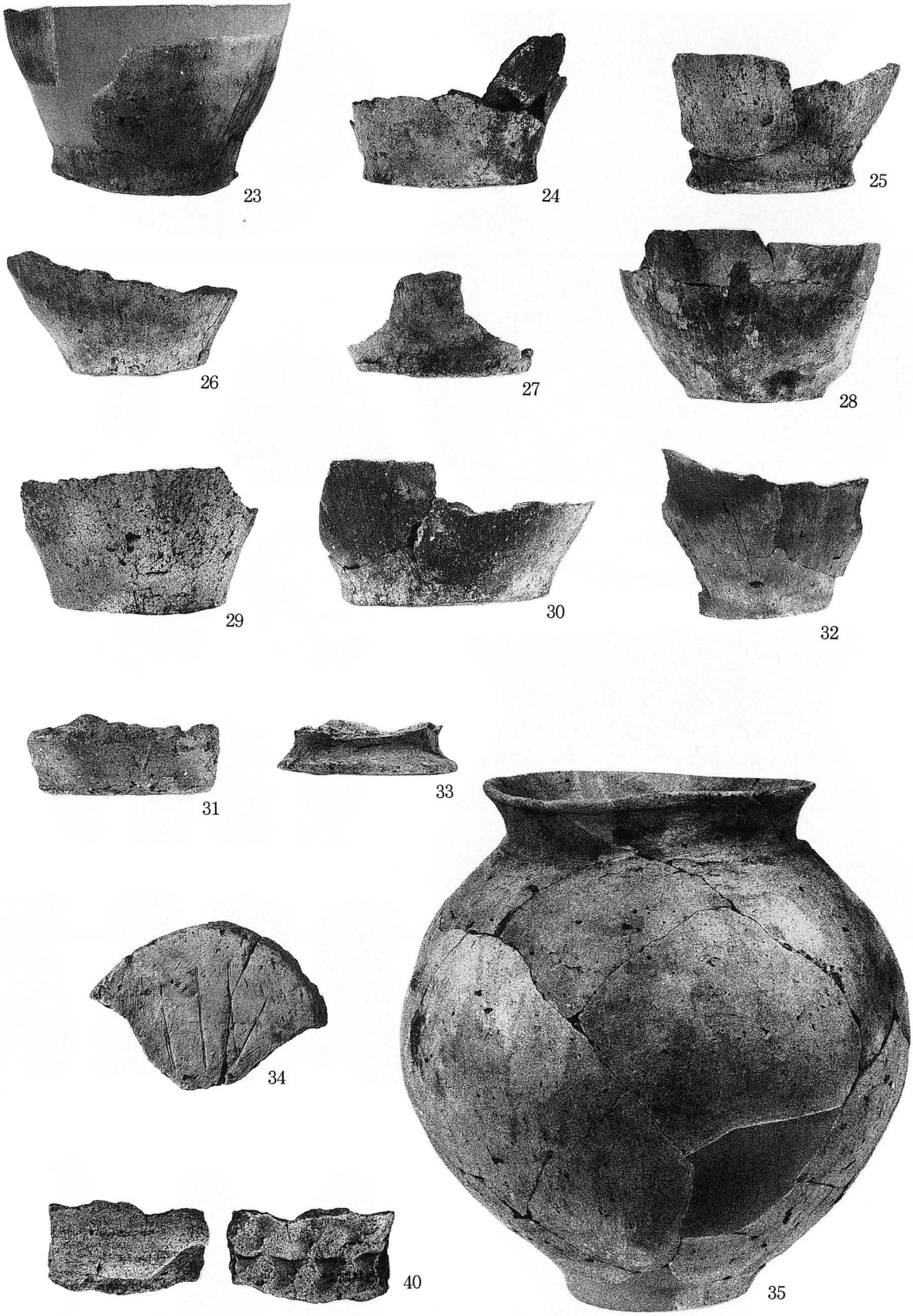

20


21


22

第２号竪穴住居跡

写真図版22　出土遺物(2)

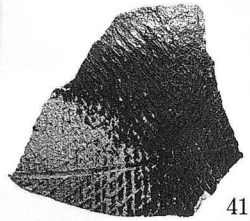


第２号竪穴住居跡

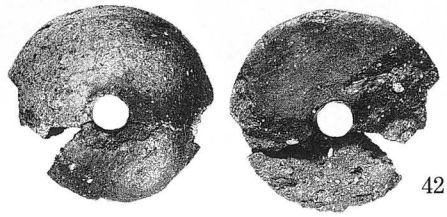
写真図版23　出土遺物(3)

36

39


41

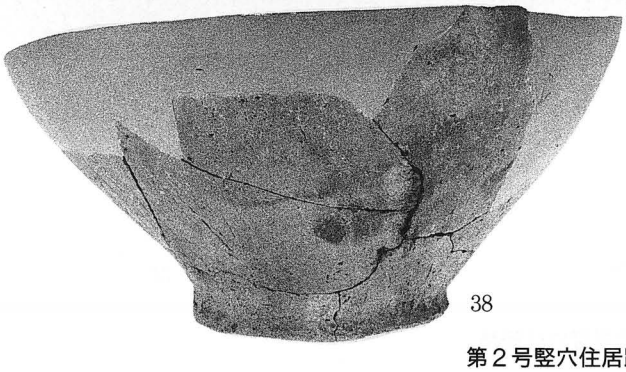
43

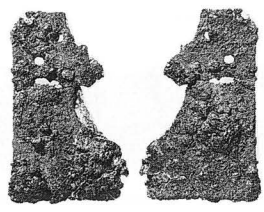

42

37

44

45


38

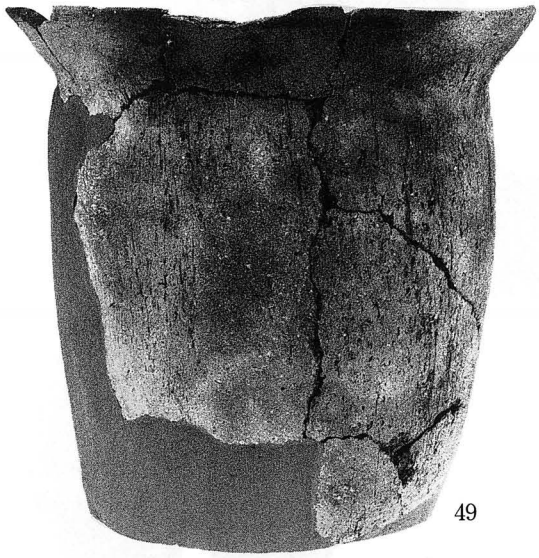

46

47

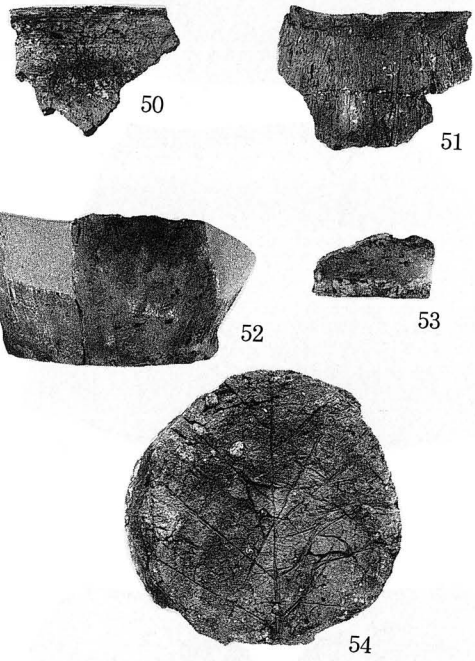
第２号竪穴住居跡

写真図版24　出土遺物(4)

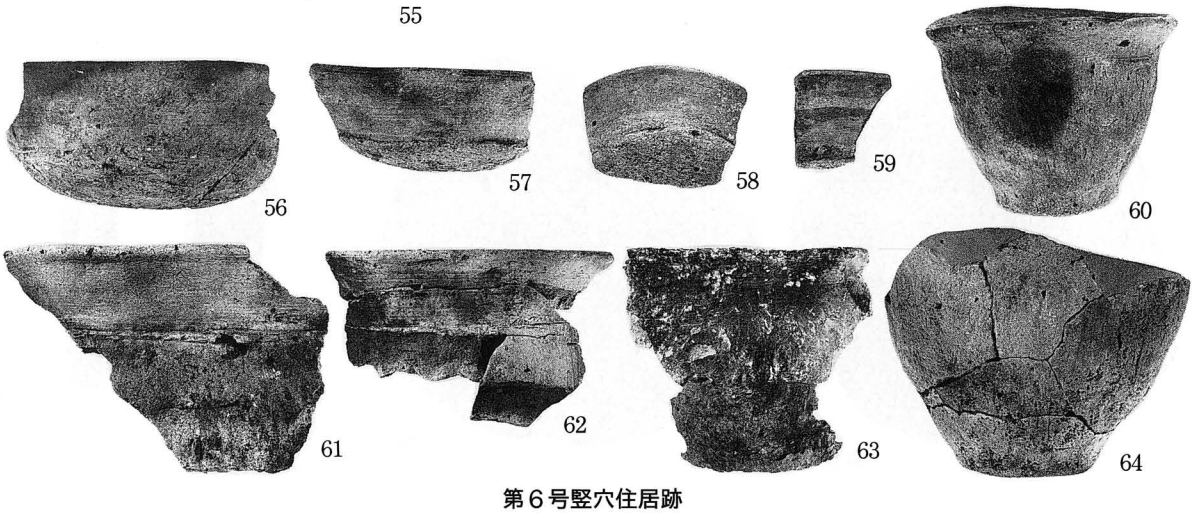
第３号竪穴住居跡



第４号竪穴住居跡



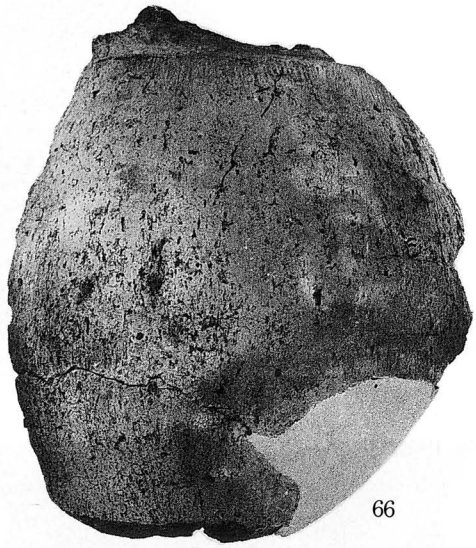
第５号竪穴住居跡



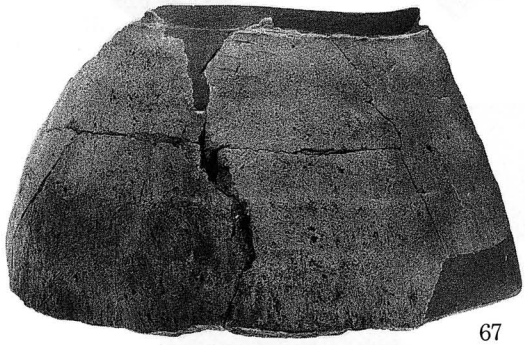
第６号竪穴住居跡

写真図版25　出土遺物(5)

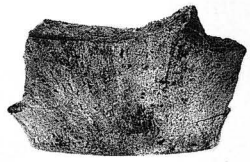
65



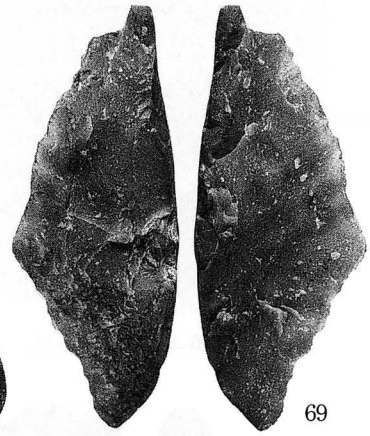
66



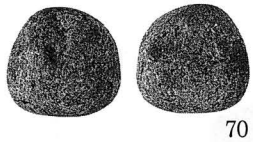
67



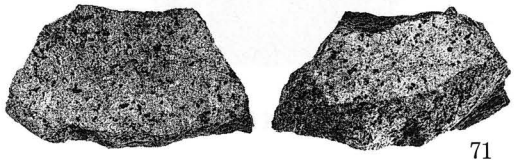
68



69



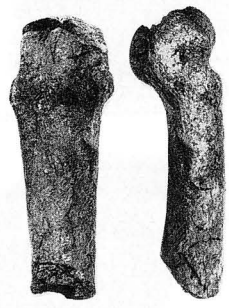
70



71

72

第６号竪穴住居跡



73

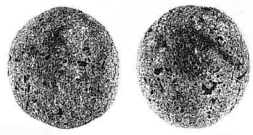
写真図版26　出土遺物(6)

第７号竪穴住居跡

写真図版27　出土遺物(7)

85

86



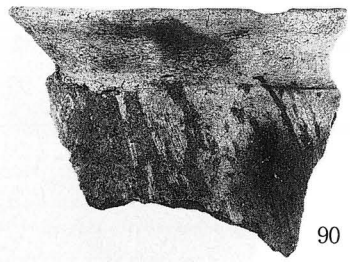
88

89

第１号竪穴住居状遺構

87

第７号竪穴住居跡

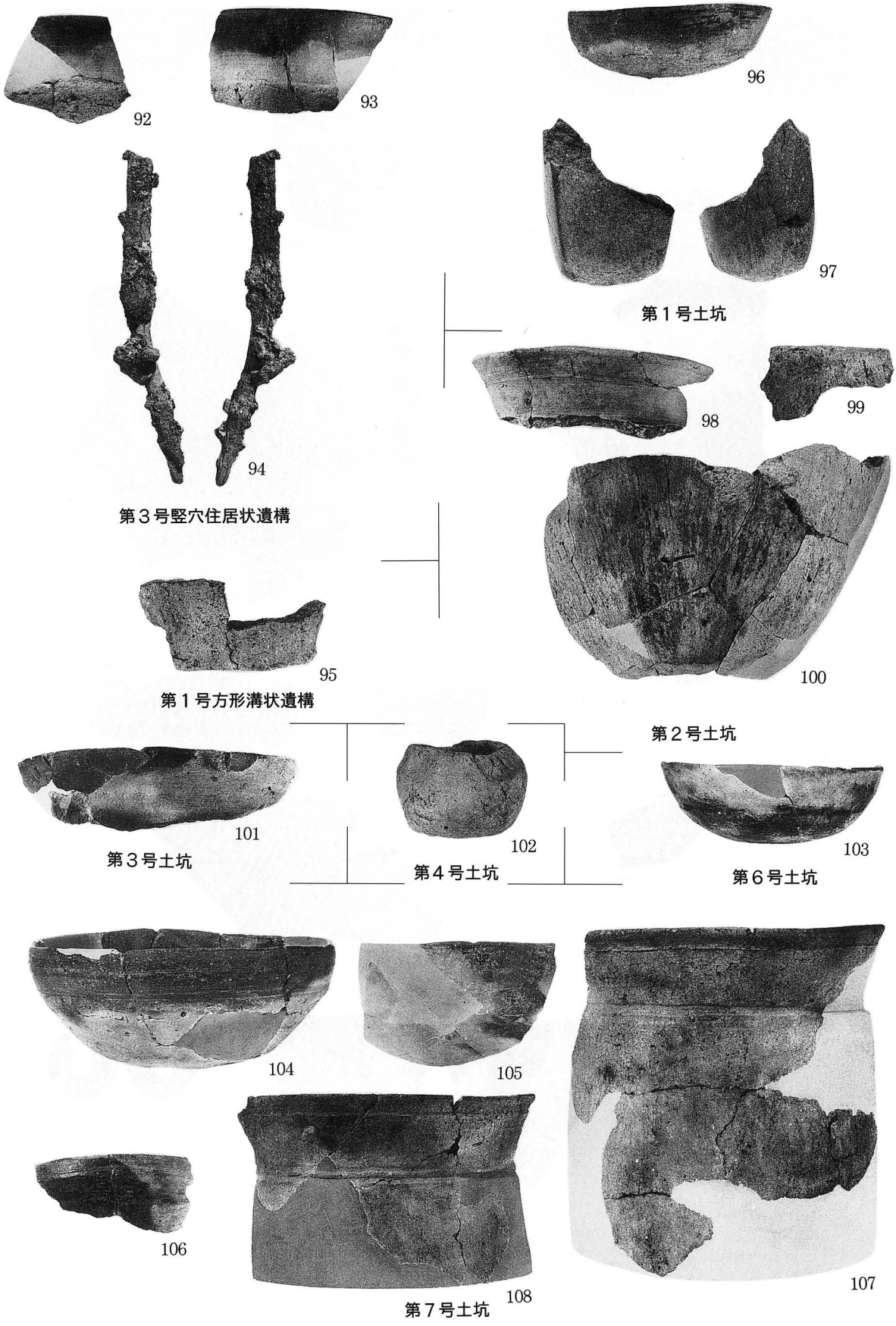


90

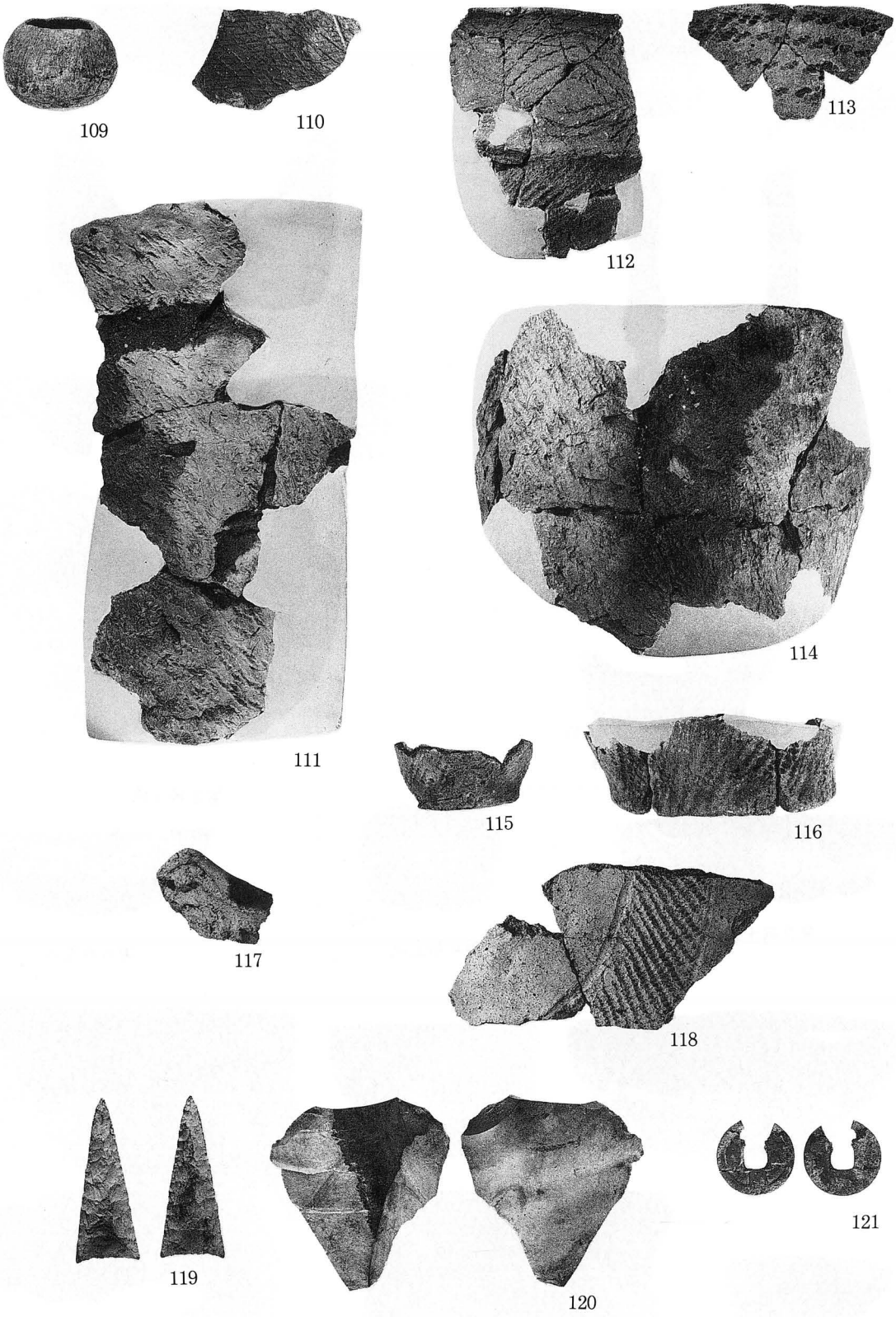
91

第２号竪穴住居状遺構

写真図版28　出土遺物(8)



写真図版29　出土遺物(9)



遺構外

写真図版30　出土遺物(10)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	佐藤基
副所長	伊藤直司

〔管理課〕

課長	川浪清徳
主査	立花多加志
主事	日影睦夫

〔調査第一課〕

課長	小田野哲憲
課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	酒井宗孝
〃	小山内透
文化財専門調査員	中田迪
〃	吉田充
〃	鎌田勉
〃	小笠原健一郎
〃	鳥居達人
〃	濱田宏
〃	佐々木進悦
〃	安藤由紀夫
〃	木戸口俊子
〃	小野寺正之
〃	阿部勝則
〃	千葉正彦
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	朝倉雄大
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	中村直美
〃	丸山浩治
期限付専門職員	平めぐみ
〃	北田勲
〃	江藤敦
〃	小林弘卓
〃	小原広幸

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
文化財専門調査員	古舘貞身
〃	阿部眞澄
〃	松尾芳幸
〃	小原眞一
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	金子佐知子
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	佐々木務
〃	晴山雅光
〃	星雅之
〃	佐々木琢
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	北村忠昭
〃	金子昭彦
期限付専門職員	鈴木聡
〃	平澤里香
〃	布谷義彦
〃	山口俊規
〃	熊谷佳恵
〃	吉田里和
〃	藤原賢徳
〃	吉川徹
嘱託	藤島恵子
〃	新田トヨ
〃	佐々木光重

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第334集

上台遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業二戸地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成12年３月17日
発行　平成12年３月24日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185
TEL　(019) 638－9001
FAX　(019) 638－8563
印刷　株式会社　白ゆり
〒020-0122　盛岡市みたけ６丁目１－50
TEL　(019) 643－6060

©㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000